倉吉市文化財調査報告書　第82集

二タ子塚遺跡発掘調査報告書

平成６年度

倉吉市教育委員会

倉吉市文化財調査報告書　第82集

倉吉市教育委員会 氏寄贈

二タ子塚遺跡発掘調査報告書

遺跡略号　４ＥＴＦ

鳥取大学附属図書館
<10>0050052729

平成６年度

倉吉市教育委員会

序

この報告書は、平成６（1994）年度に、国営船上山・小田股ダム建設に係る採石事業に伴う事前調査として、中国四国農政局東伯農業水利事業所の委託を受け、倉吉市津原字フタゴ塚において実施した発掘調査の記録です。

今回の発掘調査により、弥生時代末期から古墳時代前期に連続する土壙墓群と古墳群を検出しました。これは、当地方の古墳時代の始まりを考える上で貴重な資料となるものです。

この報告書が多くの方々に活用されて歴史解明の一助となれば幸いに思います。

最後に、発掘調査にあたり御協力いただいた中国四国農政局東伯農業水利事業所をはじめ、津原地区の方々、現場作業、内務整理に従事していただいた方々に感謝の意を表するものです。

平成７年３月

倉吉市教育委員会
教育長　小　川　幸　人

例　　言

1．本報告書は、平成６年度に倉吉市教育委員会が、中国四国農政局東伯農業水利事業所の委託を受け、国営船上山・小田股ダム建設に係る土砂採取事業に伴う事前調査として、倉吉市津原字フタゴ塚において実施した発掘調査の記録である。

2．発掘調査団は次のような組織・編成である。

団　　長　小川　幸人（倉吉市教育委員会教育長）

調査委員　名越　　勉（倉吉市文化財保護審議会会長）

　　手嶋　義之（倉吉市文化財保護審議会委員）

調 査 員　根鈴　輝雄（倉吉博物館学芸員）　　眞田　廣幸（文化課文化財係長）

　　森下　哲哉（文化財係主任）　　根鈴智津子（文化財係主事）

　　竹宮亜也子（文化財係主事）　　加藤　誠司（文化財係主事）

　　岡本　智則（文化財係主事）　　竹中　孝浩（鳥取県教育委員会派遣調査員）

　　高取　英雄（鳥取県教育委員会派遣調査員）

調査補助員　山根　雅美

事 務 局　福井　輝夫（教育次長）　　生田　淳美（文化課長）

　　中原　拓憲（文化課長補佐）　　猪口　洋志（文化財係主事）

　　高山　りさ（文化財係主事）

内務整理　泉　美智子・松田　恵子・世浪由美子・妻藤　君江・松嶋あつ子・青戸　千秋

　　谷﨑　恵子・竹歳　暁子・児玉美佐子

3．現場での調査は加藤・高取が、遺構の図面整理は加藤・高取・根鈴智・松田が担当した。遺物実測・遺物写真は、加藤・高取・根鈴智が担当した。浄書は、泉・世浪・妻藤が担当した。

4．第Ⅳ章は、牛骨の鑑定結果について鳥取大学医学部医学科解剖学第２講座　井上貴央教授に御寄稿いただいたものである。記して謝意を表するものです。

5．本書の執筆は、第Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ章、第Ⅲ章１号墳を加藤が、第Ⅲ章遺物を根鈴智が、それ以外は高取が担当した。編集は松田が担当した。

6．遺構測量のための基準杭設置を株式会社ウエスコ倉吉事務所に委託した。

7．第１図（地形図）は、建設省国土地理院発行の１：50,000地形図「倉吉」「大山」の一部を複製･加筆したものである。第２図は、平成元年修正測量の１：2,500国土基本図　倉吉市平面図を使用した。

8．挿図中の方位は、国土座標第Ⅴ座標系の北を示す。

9．遺物に付した記号・番号は、本文・挿図・図版で統一している。

10．調査によって得られた資料は、倉吉博物館に保管している。

本　文　目　次

Ⅰ　発掘調査に至る経緯…… 1
Ⅱ　位置と歴史的環境…… 1
Ⅲ　調査の概要…… 4
　1．遺構…… 8
　　(1)　土壙墓群…… 8
　　(2)　古墳群……16
　　(3)　土壙……33
　2．遺物……34
Ⅳ　鑑定……45
Ⅴ　二タ子塚6号墳……46
Ⅵ　考察……48

挿　図　目　次

第1図　倉吉市周辺の地形と遺跡分布図…… 3
第2図　二タ子塚遺跡調査区位置図…… 4
第3図　二タ子塚遺跡全体図…… 5
第4図　土壙墓群全体図…… 7
第5図　1・2号土壙墓遺構図…… 8
第6図　3・4号土壙墓遺構図……10
第7図　5・6号土壙墓遺構図……11
第8図　7号土壙墓・1号溝遺構図……12
第9図　1号溝遺物出土状況図……13
第10図　8～10号土壙墓遺構図……14
第11図　2～4号溝遺構図……15
第12図　1号墳遺構図……17
第13図　1号墳主体部遺構図1……18
第14図　1号墳主体部遺構図2……19
第15図　1号墳周溝内埋葬施設遺構図……21
第16図　2号墳遺構図……23
第17図　2号墳1・2号主体部遺構図……24
第18図　3～5号墳遺構図……25
第19図　3号墳1・2号主体部遺構図……27
第20図　3号墳周溝内埋葬施設遺構図……29
第21図　4・5号墳主体部遺構図……31
第22図　1号土壙遺構図……32
第23図　2・3号土壙遺構図……33
第24図　3～6号土壙墓出土遺物図……35
第25図　1～3号溝出土遺物図……37
第26図　1・2号墳出土遺物図……38
第27図　3号墳出土遺物図1……39
第28図　3号墳出土遺物図2……41
第29図　5号墳・1号土壙出土遺物図……42
第30図　鉄器・石器遺物図……43
第31図　二タ子塚6号墳墳丘測量図……47
第32図　木棺型式……50
第33図　二タ子塚遺跡遺構変遷模式図……52

図　版　目　次

図版１　遺跡　調査前空中写真　調査区空中写真　調査後全景
図版２　遺構　土壙墓群検出状況　土壙墓群完掘　１号土壙墓
図版３　遺構　２号土壙墓　３・４号土壙墓　５号土壙墓
図版４　遺構　６号土壙墓　８号土壙墓　９号土壙墓
図版５　遺構　７号土壙墓・１号溝　１号溝遺物出土状況　１号溝供献台出土状況
図版６　遺構　２号溝　３号溝　４号溝
図版７　遺構　１～５号墳　１号墳
図版８　遺構　１号墳主体部石槨内掘下げ　１号墳主体部粘土床断面　１号墳主体部粘土床検出状況
図版９　遺構　１号墳主体部敷石検出状況　１号墳主体部完掘　１号墳周溝内埋葬施設
図版10　遺構　２号墳　２号墳主体部検出状況　２号墳主体部完掘
図版11　遺構　３号墳　３号墳主体部　３号墳周溝内遺物出土状況
図版12　遺構　３号墳周溝内埋葬施設土器棺出土状況　３号墳周溝内埋葬施設
　　３号墳周溝内埋葬施設完掘
図版13　遺構　４号墳　４号墳主体部　５号墳
図版14　遺構　５号墳主体部　１号土壙　２号土壙　３号土壙
図版15　遺構　二夕子塚６号墳全景　１号主体部　２号主体部
図版16　遺物　５号土壙墓・６号土壙墓・１号溝・２号溝・２号墳出土遺物
図版17　遺物　３号墳出土遺物
図版18　遺物　３号墳出土遺物　鉄製刀子・鉄斧・石鏃・砥石・石錘
図版19　鑑定　牛骨

I　発掘調査に至る経緯

平成４年２月、中国四国農政局東伯農業水利事業所より、国営東伯農業水利事業船上山ダム・小田股ダム建設工事に係る谷原石山採石場の拡張計画が提示された。開発予定地の踏査を実施したところ、丘陵尾根中央で古墳の高まりを確認した。また丘陵北端には、昭和48年の踏査時に古墳を２基確認している。このため倉吉市教育委員会が、予備調査を平成５年５月11日～６月11日まで行った。この結果、丘陵尾根部分を中心に古墳の周溝、箱式石棺墓、弥生土器、土師器などを検出して、遺跡の存在が明らかになった。(註) 倉吉市教育委員会は、東伯農業水利事業所と協議を計った結果、既存の採石場に近い尾根部分の3200㎡について発掘調査を実施することとなった。調査は、倉吉市教育委員会が主体となり、1994（平成５）年９月５日～12月28日まで実施した。

(註)　竹宮亜也子　「津原地区(ニタ子塚遺跡)」『倉吉市内遺跡分布調査報告書Ⅷ』　倉吉市教育委員会　1995年

II　位置と歴史的環境

ニタ子塚遺跡は、倉吉市街地から北西に約７㎞離れた倉吉市津原字フタゴ塚に所在する。遺跡の所在する灘手地区（旧灘手村）の地形は、大山の火山活動によって形成された洪積性の丘陵が樹枝状に入り組んでいる。これら丘陵の北側には標高約１～２ｍの灘手低湿地帯が広がっている。調査地は南西～北東に伸びる標高70～60m前後の丘陵尾根上で、付近の最高所を含む標高70～74mの地点にある。水田面と調査地の比高差は約60mである。調査前は、調査区全体が畑作を放棄した後の荒れた状態で、密集した笹竹林と雑木林であった。同一丘陵上には、清水谷古墳群(10)が所在し、1973年の調査により箱式石棺墓を主体とする古墳を２基検出した。このうち清水谷１号墳からは、内行花文鏡が出土している。その他、予備調査で箱式石棺墓、古墳周溝、古墳状の高まりを確認している。また、ニタ子塚遺跡が所在する丘陵の東側裾に所在する郊家平古墳群では、1987年の調査により横穴式石室を主体とする古墳を３基検出している。

ニタ子塚遺跡の所在する灘手地区を含めた倉吉市西郊には、数多くの遺跡が所在する。以下、分布図範囲内の遺跡を中心に概要を述べる。

旧石器時代の遺物は、中尾遺跡(44)から出土した国府型ナイフ型石器（黒曜石製・安山岩質各１)、長谷遺跡から出土したナイフ型石器（安山岩質）などがある。

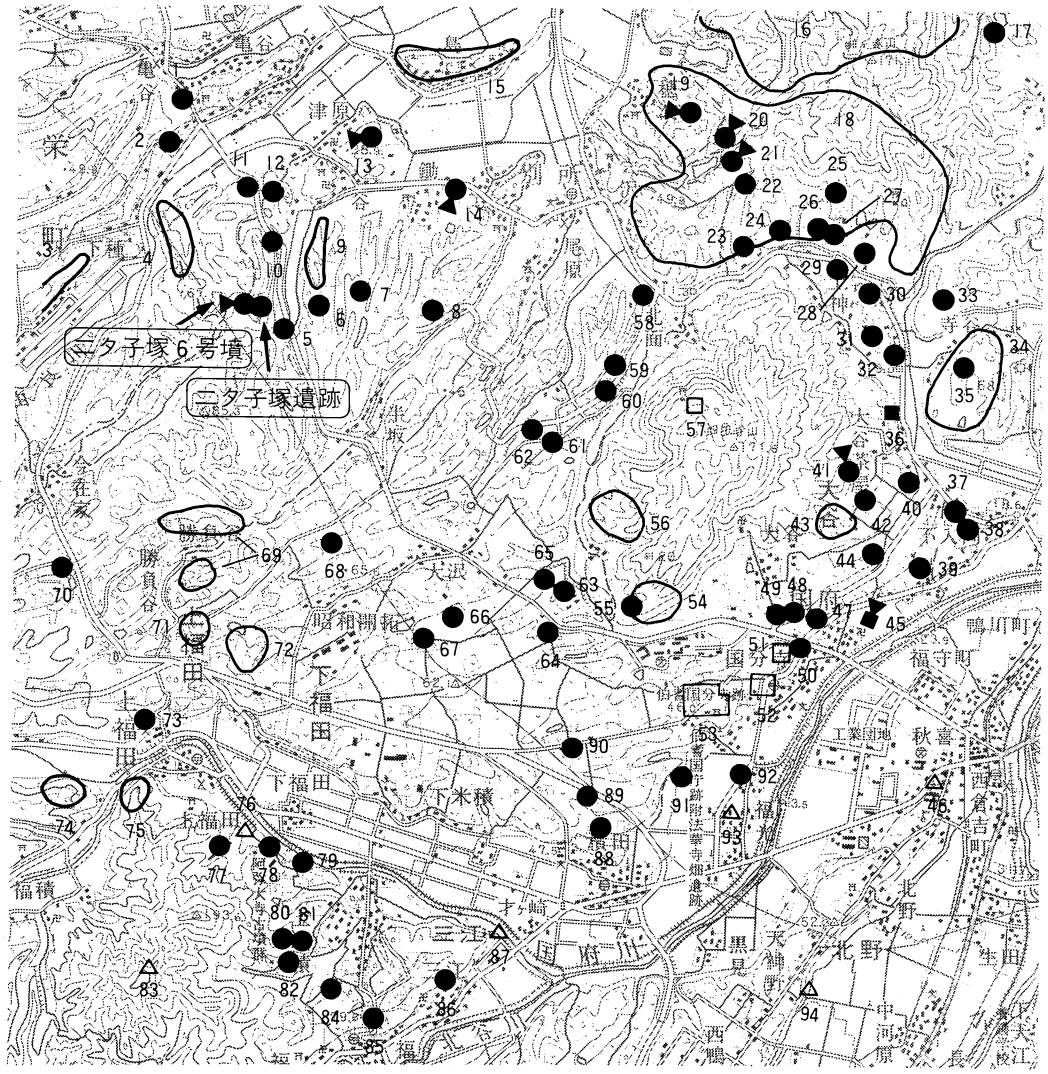
縄文時代の遺跡は、早期の竪穴式住居址と礫群、押型文土器が出土した取木遺跡(59)、84基の落し穴、前～晩期の土器が出土した中尾遺跡、57基の落し穴、尖頭器や早期の押型文土

器、後期・晩期の深鉢が出土した長谷遺跡がある。その他に縄文時代早期の土器が出土した遺跡としては、大栄町大谷第１遺跡・大谷築山遺跡が、縄文時代中期～後期の土器が出土した遺跡は、大栄町青木第１遺跡・後ろ谷遺跡・上種第５遺跡、中峯遺跡(64)がある。落し穴は、青木第４遺跡、頭根後谷遺跡(９)・大仙峯遺跡(７)・大山遺跡(８)・イキス遺跡（58）からも検出している。

弥生時代の遺跡は、前期では土壙墓群の出土した、大栄町後ろ谷遺跡、イキス遺跡がある。中期では、水晶の玉作工房跡が出土した大栄町西高江遺跡や青木第２遺跡がある。後期になると遺跡の数は増大する。大仙峯遺跡・大山遺跡・コザンコウ遺跡(62)・道祖神峰遺跡(61)・遠藤谷峯遺跡(65)・白市遺跡(63)・中峯遺跡・大沢前遺跡(66)、大栄町東高江遺跡・高江神社遺跡・別所経塚遺跡・青木第４遺跡・上種第５遺跡などの集落址がある。このうち中峯遺跡では鳥形スタンプ文土器が出土している。これらは、ほとんどの遺跡が古墳時代も営まれる。墳墓では、四隅突出型墳丘墓が３基出土し国史跡に指定された阿弥大寺墳丘墓群(78)、四隅突出型墳丘墓の可能性がある柴栗古墳群(32)の弥生墳墓、方形の削り出し墳丘墓を２基検出し吉備系の大型壷が出土した大谷後ロ谷墳丘墓群(55)、手焙り形土器の出土した三度舞墳丘墓(36)がある。これらはいずれも弥生時代後期の墳丘墓である。

古墳時代になると、丘陵上に多くの古墳が造られる。倉吉市西郊の前期古墳としては、粘土槨（長さ約７m・幅約1.4m）を主体とし、夔鳳鏡・三角縁神獣鏡・鉄器などの出土した国分寺古墳（45・前方後円〈方〉墳・全長60m)、箱式石棺墓を主体とし、三角縁神獣鏡・琴柱型石製品の出土した上神大将塚古墳（31・円墳・径30m)、竪穴式石槨の出土した向山古墳群宮ノ峰21号墳、方墳を密集して検出した猫山遺跡(30)がある。古墳時代後期の前方後円墳は、横穴式石室を主体とする大栄町西穂波16号墳(全長38m)、箱式石棺墓を主体とする高鼻２号墳（14・全長26m)、大塚山古墳（13・全長52m)、帆立貝式の前方後円墳である大栄町下種８号墳（全長31m)・上種西14号墳（全長36m）などがある。その他に発掘された古墳として、蛇行鉄剣の出土した頭根後谷遺跡、大栄町妻波古墳群、大山遺跡、横穴式石室を主体部とする東鳥ケ尾古墳（６)、横穴式石室を主体部とする７世紀代の方墳を検出した取木遺跡・一反

1	亀谷古墳群	13	大塚山古墳	25	桜木遺跡	37	沢べり遺跡(１次)
2	亀谷第１遺跡	14	高鼻２号墳	26	谷畑遺跡	38	沢べり遺跡(２次)
3	下種古墳群	15	島遺跡群	27	西山遺跡	39	不入岡遺跡
4	下種東古墳群	16	曲古墳群	28	トドロケ遺跡	40	イザ原古墳群
5	効家平古墳群	17	島古墳群	29	東狭間古墳	41	大谷大将塚古墳
6	東鳥ケ尾古墳	18	上神古墳群	30	上神猫山遺跡	42	小林古墳群
7	大仙峯遺跡	19	上神45号墳	31	上神大将塚古墳	43	大谷古墳群
8	大山遺跡	20	上神44号墳	32	柴栗古墳群	44	中尾遺跡
9	頭根後谷遺跡	21	上神48号墳	33	西前遺跡	45	国分寺古墳
10	清水谷古墳群	22	上神51号墳	34	屋喜山古墳群	46	北ノ城城跡
11	西焼ス古墳群	23	上神119号墳	35	屋喜山９号墳	47	擲塚遺跡
12	清水谷尻１号墳	24	クズマ遺跡	36	三度舞墳丘墓	48	打塚遺跡



第1図　倉吉市周辺の地形と遺跡分布図

49　古神宮古墓
50　宮ノ下遺跡
51　伯耆国分尼寺跡
52　伯耆国分寺跡
53　伯耆国庁跡
54　古墳群
55　大谷後ロ谷墳丘墓群
56　古墳群
57　四王寺跡
58　イキス遺跡
59　取木遺跡
60　一反半田遺跡
61　道祖神峰遺跡
62　コザンコウ遺跡
63　白市遺跡
64　中峯遺跡
65　遠藤谷峯遺跡
66　大沢前遺跡
67　大道谷遺跡
68　昭和開拓遺跡
69　勝負谷遺跡群
70　鶏塚古墳群
71　ケンカ塚古墳群
72　稚児ケ墓古墳群
73　観音堂遺跡
74　並塚古墳群
75　上福田横穴群
76　砦跡
77　小谷遺跡
78　阿弥大寺墳丘墓群
79　下小垣遺跡
80　奥田遺跡
81　箕ケ平遺跡
82　後中尾遺跡
83　高城城跡
84　後ロ谷遺跡
85　福本家ノ上古墓
86　上野遺跡
87　砦跡
88　矢戸遺跡
89　岩屋遺跡
90　福田寺遺跡
91　島掛遺跡
92　今倉遺跡
93　今倉城跡
94　市場城跡

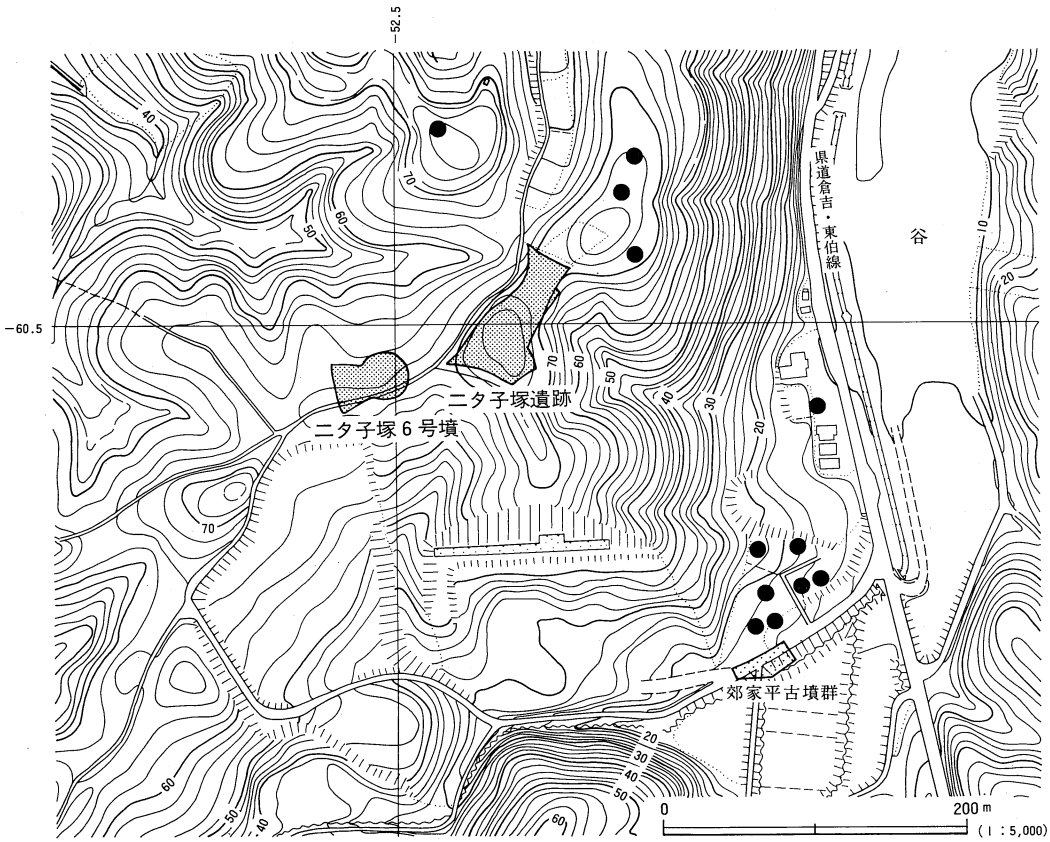
半田遺跡(60)などがある。

奈良時代になると、久米ケ原丘陵東端部周辺に伯耆国庁(53)・伯耆国分寺(52)・伯耆国分尼寺(51)、大型建物群を検出し官衙跡と推定されている不入岡遺跡(39)が近接して設けられ伯耆国の政治・文化の中心となる。平安時代には、四王寺山山頂に四王寺(57)が建立された。

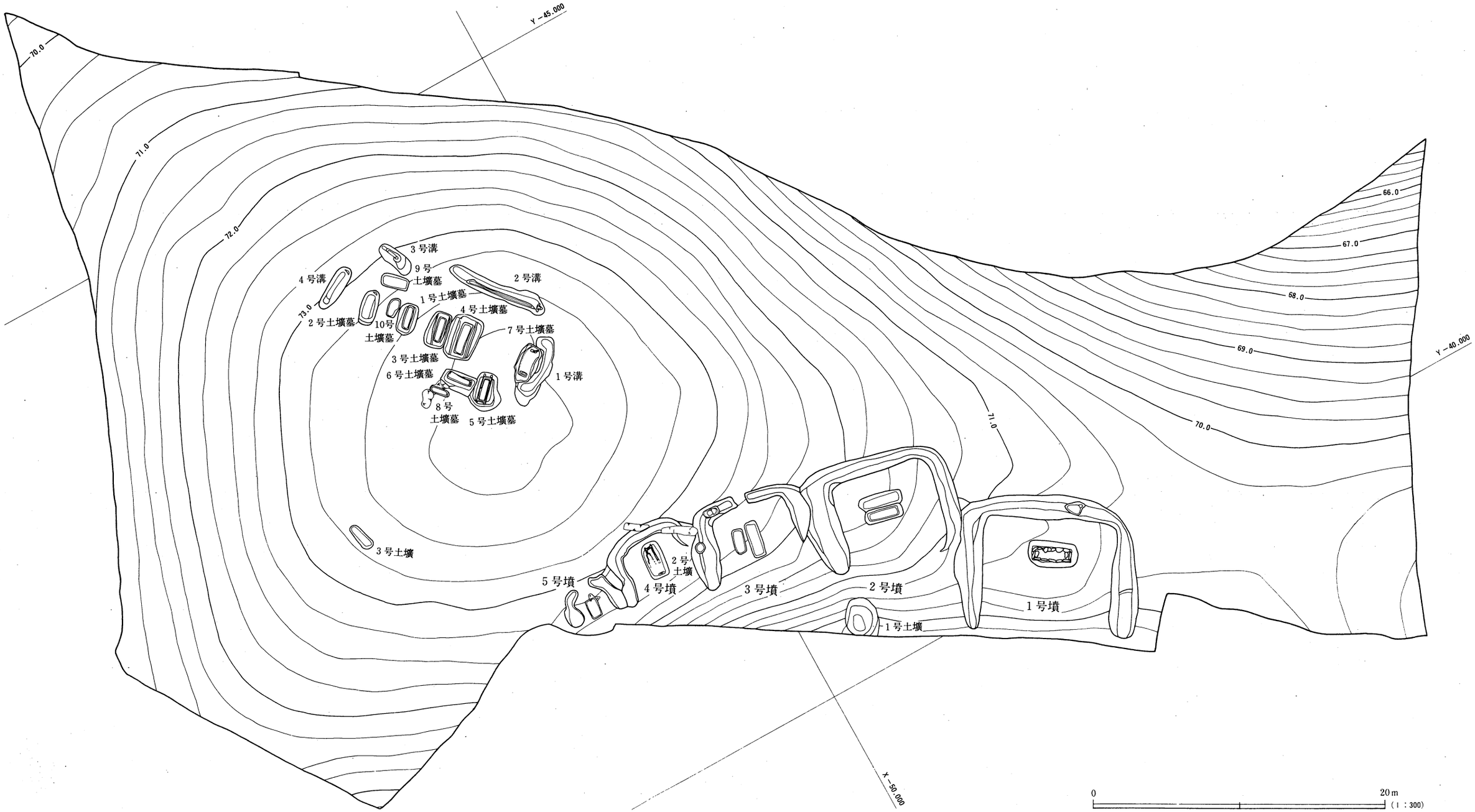
III　調査の概要

調査は石材が散乱し墳丘状の高まりのある１号墳の部分を除き重機により表土を除去した。表土除去後人力による検出を行い、遺構の掘り下げを行った。

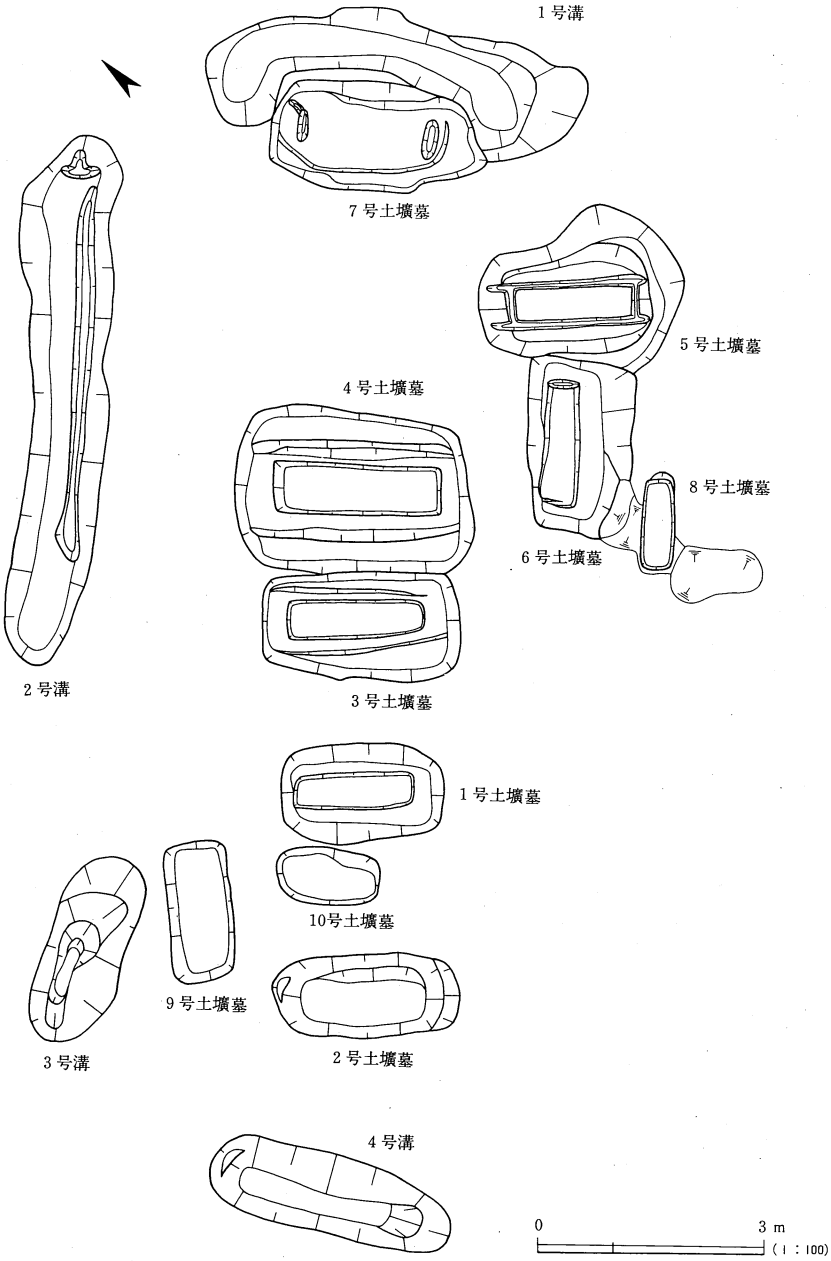
調査地の基本層序は、茶褐色土（表土・旧耕作土)、暗褐色土（ソフトローム土)、黄灰色砂質土（ホーキ火山砂層)、黄褐色砂質土（AT：姶良･丹沢火山砂層)、橙褐色粘質土（礫混じり粘質層)、黄褐色土(DKP：大山･倉吉軽石層)の順である。遺構の検出は、暗褐色土(ソフトローム土) 上層でおこなったが、尾根頂部については暗褐色土（ソフトローム土)、黄灰色砂質土（ホーキ火山砂層)、黄褐色砂質土（AT：姶良・丹沢火山砂層）の堆積状態が悪く、暗褐色土（ソフトローム土）に、黄灰色砂質土（ホーキ火山砂層)、黄褐色砂質土（AT：



第２図　ニタ子塚遺跡調査区位置図



第３図　ニタ子塚遺跡全体図



第4図　土壙墓群全体図

始良・丹沢火山砂層）がブロック状に混じる面で検出した。調査後の面積は3200㎡である。遺構の測量は国土座標による4mメッシュを組み、1号墳・2号墳の主体部と遺物出土状況図についてはS＝1/10で、その他の遺構はS＝1/20で実測した。調査地の調査後地形測量及び、ニタ子塚6号墳の墳丘測量は平板を使用し、S＝1/100、25cm毎の等高線で測量した。

調査の結果、土壙墓10基、土壙墓に伴う溝4条、古墳5基・周溝内埋葬施設2基、土壙3基（うち落し穴1基）を検出した。

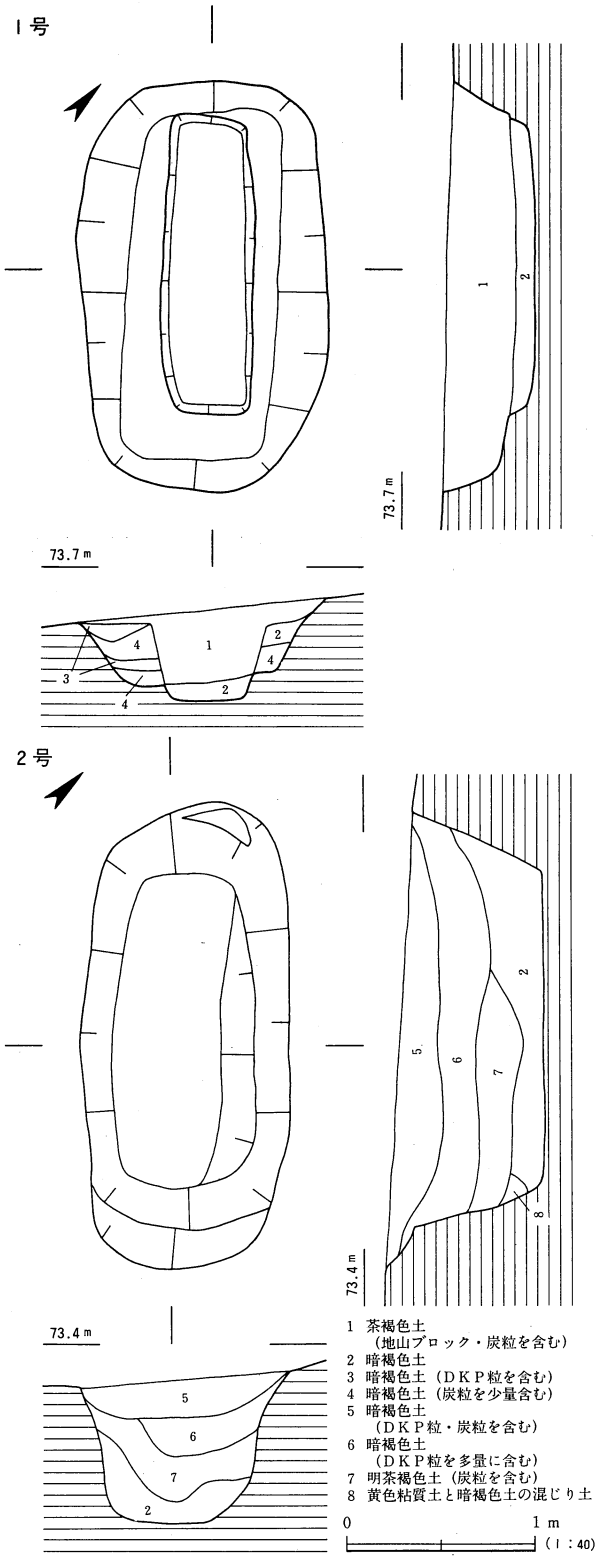
1．遺構

(1)　土壙墓群

調査区の最高所(標高74m)からわずかに西側に寄った場所を中心にして、10基からなる土壙墓群を検出した。４条の溝によって北・西・南（土壙墓群文中の方位は全て便宜上１号溝を北とした）の３方を区画された、長軸15m・短軸９mの方形の墓域内に規則的に配置されている。各土壙墓の主軸方向は、尾根と直交するもの（N33°W～N51°W）と平行するもの（N41°E～N51°E）に分かれる。前者に属するものは１～５・７・10号の７基、後者に属するものは６・８・９号の３基である。土壙墓間の切り合いはほとんど無く、３・４号と５・６号が一辺を共有している程度であった。木棺痕跡は、平・断面の観察によって１・３～７・９号の７基で検出された。

遺物は全体に少なく、棺内に副葬されたものは全く無かったが、５・６号の２基で棺上に供献された土器と標石と考えられる石が出土した。また、１号溝と２号溝でもまとまった遺物が出土した。

１号土壙墓　土壙墓群の南部、２号土壙墓と３号土壙墓の間に位置し、主軸方向はN45°Wである。平面形は隅丸長方形で、墓壙掘り方は２段になっており、規模は上段が長さ2.22m・幅1.36m・深さ



第５図　１・２号土壙墓遺構図

0.39m、下段が長さ1.58m・幅0.58m・深さ0.10mを測る。検出面から墓壙底までの深さは0.49mであった。下段の掘り方と埋土の堆積状況から、長さ1.55m・幅0.55m程度の木棺が納められていたと推定される。

遺物は、墓壙底から埋葬時に混入したと思われる安山岩質石鏃Ｓ３が１点出土した。

２号土壙墓　土壙墓群の南端、１号土壙墓と４号溝の間に位置し、主軸方向はN51°Wである。平面形は長楕円形で、墓壙掘り方の規模は長さ2.41m・幅1.10m、検出面からの深さは0.76mを測る。平・断面とも木棺痕跡は検出されなかった。

３号土壙墓　１号土壙墓と４号土壙墓の間に位置し、主軸方向はN39°Wである。１辺を共有する４号土壙墓と共に中心的な位置にある。平面形は隅丸長方形で、墓壙掘り方は３段になっている。規模は上段が長さ2.62m・幅1.42m・深さ0.51m、中段が長さ2.40m・幅0.84m・深さ0.06m、下段が長さ1.82m・幅0.50m・深さ0.26mで、検出面から墓壙底までの深さは0.83mを測る。下段の掘り方と埋土の堆積状況から、長さ1.75m・幅0.45m・高さ0.30m程度の木棺が納められていたと推定される。中段の掘り方の南側壁沿いに幅0.06m前後の炭化物層が検出された。

遺物は土器片がわずかに出土した。このうち１片は底部片Ｉであった。

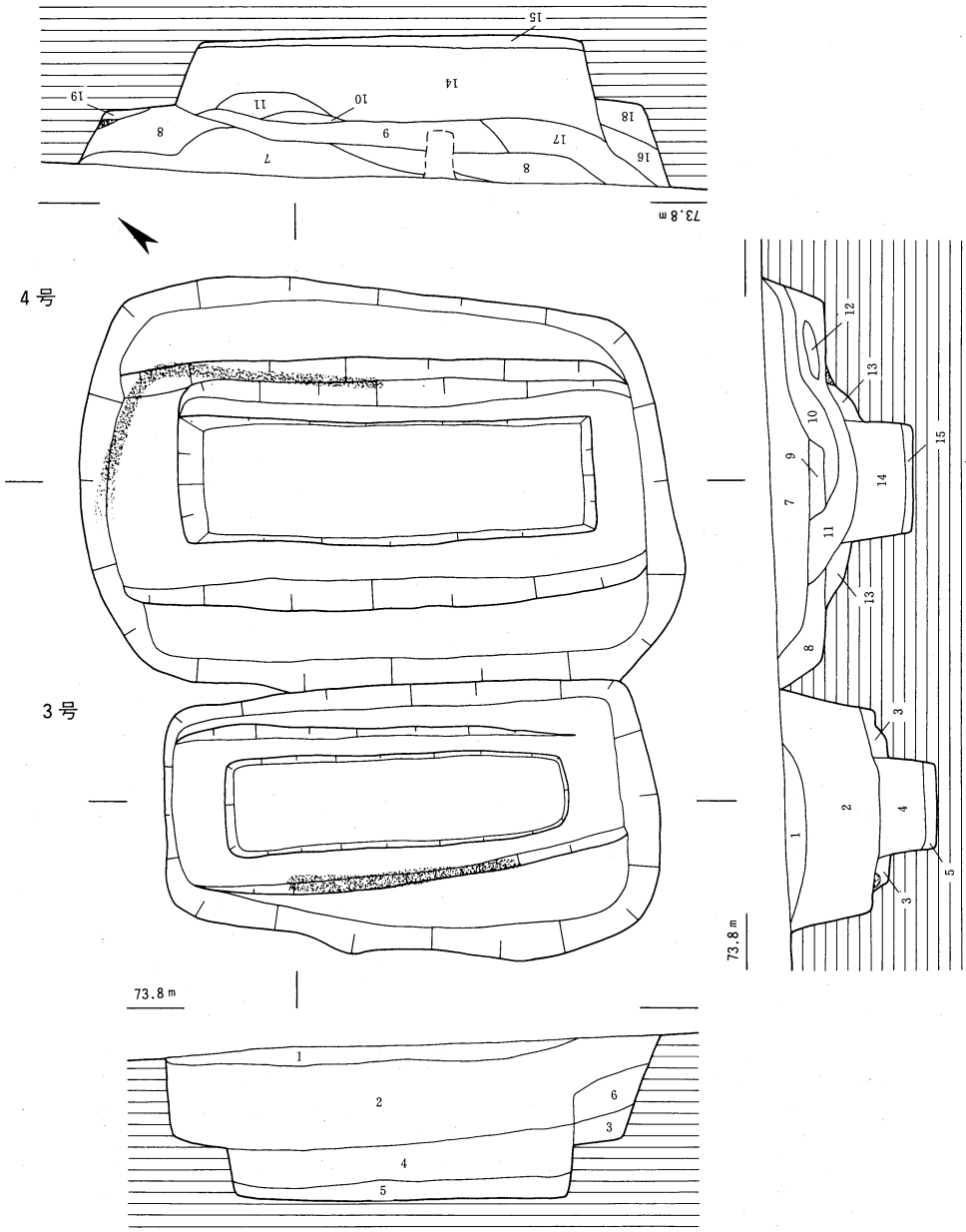
４号土壙墓　３号土壙墓と７号土壙墓の間に位置し、主軸方向はN42°Wである。１辺を共有する３号土壙墓と共に中心的な位置にあり、規模も最大のものである。平面形は隅丸長方形で、墓壙掘り方は３段になっている。規模は上段が長さ3.12m・幅2.11m・深さ0.33m、中段が長さ2.82m・幅1.34m・深さ0.16m、下段が長さ2.20m・幅0.66m・深さ0.26mで、検出面から墓壙底までの深さは0.75mを測る。下段の掘り方と埋土の堆積状況から、長さ2.00m・幅0.60m・高さ0.40m程度の木棺が納められていたと推定される。中段の掘り方の北側壁沿いに幅0.06m前後の炭化物層が検出された。

遺物は土器片がわずかに出土した。

５号土壙墓・６号土壙墓　５・６号土壙墓は検出面で黒褐色土が見られたため、当初土壙墓群の東西辺の区画溝を想定していた。従って、検出面から別々に十字ベルトを組んで掘り下げることができなかった。また、検出面の遺物は一括で取り上げてしまったため、壷６・甕・石錘Ｓ２の他、若干量の土器片がどちらの土壙墓に伴うものか特定できなかった。

５号土壙墓　土壙墓群の東部、土壙墓群中最高所に位置する。主軸方向はN40°Wで、６号土壙墓とＴ字状に接する。平面形はいびつな長楕円形で、墓壙底には小口板と側板の痕跡が残っていた。これによって推定される木棺の規模は、内法で長さ1.50m・幅0.40m程度である。側板の長さは1.80m程度と推定され両小口間の距離よりも長くなっており、小口板を側板で挟み込むような形の木棺であったと推定される。

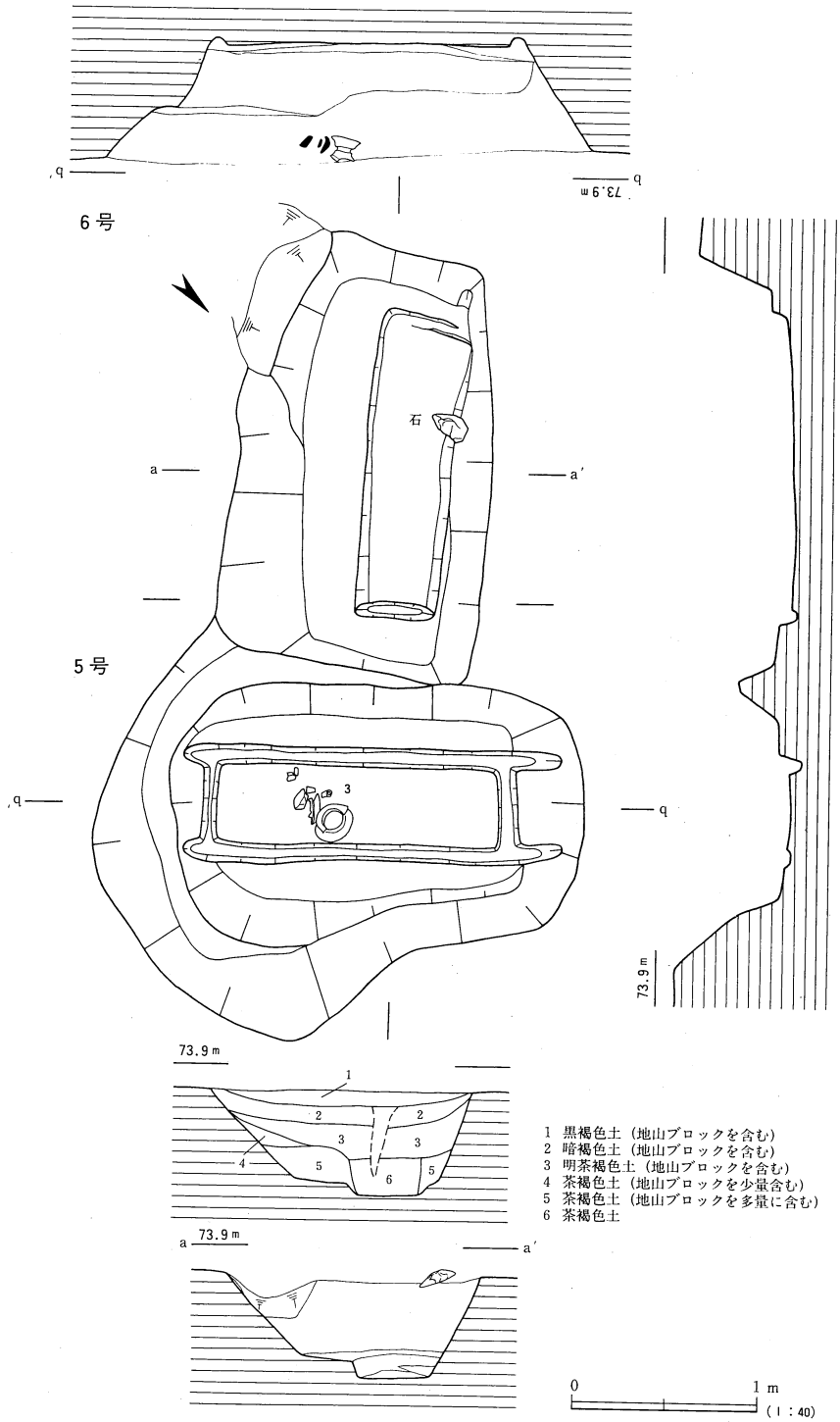
遺物は検出面の中央やや東寄りから注口土器２・器台３等が出土したほか、長さ23cmの標石と考えられる石が出土した。



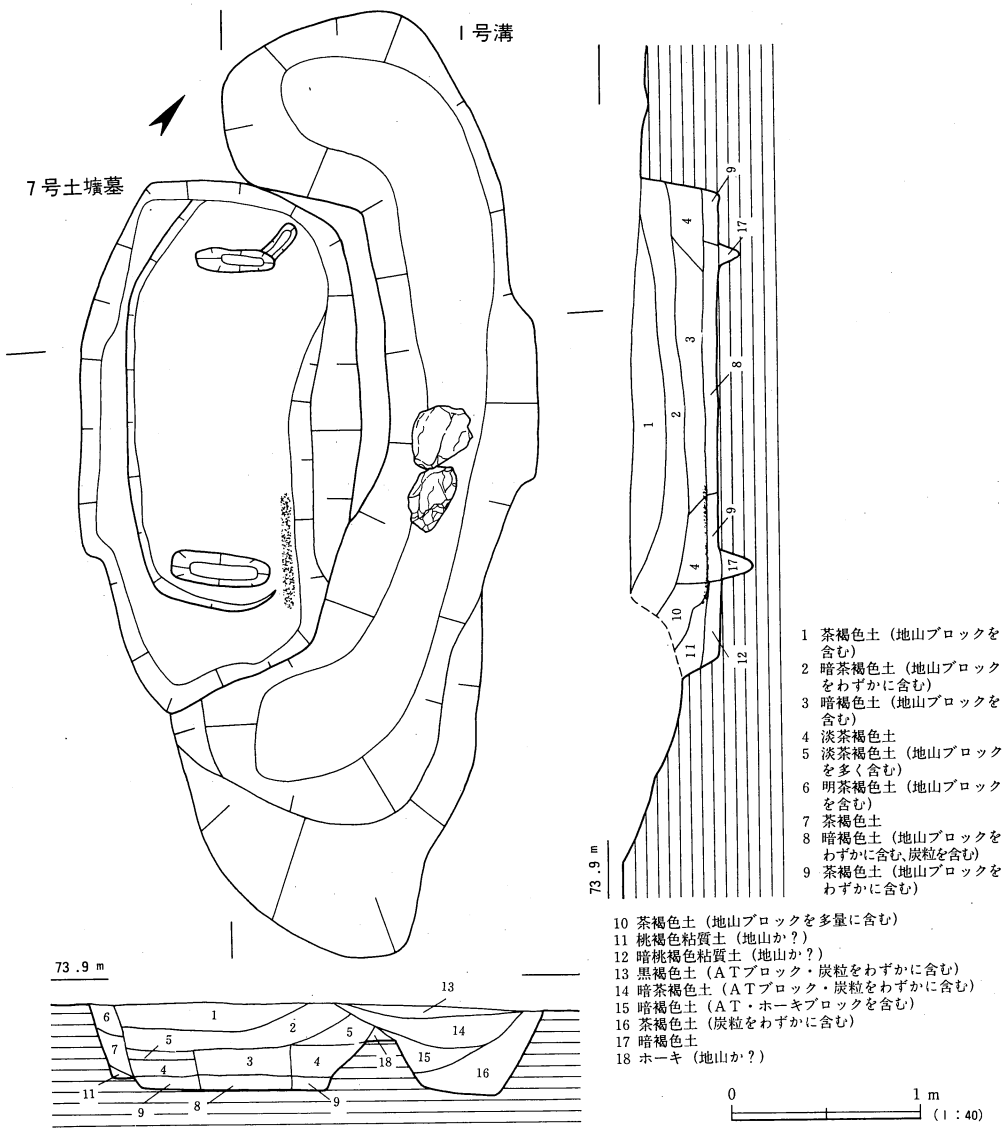
1 暗褐色土（地山小ブロックを含む）
2 暗黄褐色土（地山小ブロックを含む）
3 暗褐色土（ＡＴ・ホーキ小ブロックを含む）
4 暗褐色土（ＡＴ・ホーキブロックを含む、しまりが悪い）
5 暗褐色土（ＤＫＰ粒を含む）
6 暗褐色土
7 暗褐色土（ＡＴ・ホーキブロックを多く含む）
8 褐色土（ＡＴ・ホーキブロックを多く含む）
9 茶褐色土（ＡＴ・ホーキブロックを少量含む）
10 褐色土（ＡＴ・ホーキブロックを含む、炭粒を含む）
11 暗褐色土（茶褐色土粒を含む、ＡＴ・ホーキブロックを含む）
12 褐色土
13 赤褐色土（地山ブロックを少量含む）
14 暗褐色土（ＡＴ・ホーキブロックを含む、炭粒を含む）
15 黄褐色土（地山ブロックを少量含む）
16 褐色土　（ＡＴ・ホーキブロックをわずかに含む）
17 暗赤褐色土（ＡＴ・ホーキブロックを少量含む）
18 褐色土（ＡＴ・ホーキブロックを多量に含む）
19 暗赤褐色土

炭化物　根　0　1 m（1：40）

第６図　３・４号土壙墓遺構図



第7図　5・6号土壙墓遺構図

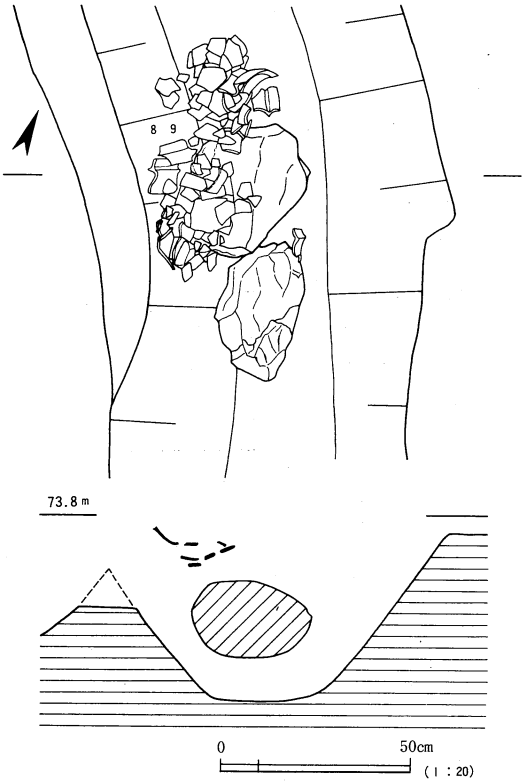


第8図　7号土壙墓・1号溝遺構図

6号土壙墓　土壙墓群の東部に位置する。主軸方向はN51°Eで、5号土壙墓とT字状に接する。平面形は隅丸長方形、墓壙掘り方は不明瞭な2段掘りで、規模は上段が長さ2.20m・幅1.38m・深さ0.49m、下段が長さ1.64m・幅0.46m・深さ0.06mで検出面からの深さは0.55mを測る。墓壙底には北側に小口板を立てるための溝が掘られており、南西側にも不明瞭ながら小口板の痕跡が認められた。下段の掘り方と埋土の堆積状況から、長さ1.60m・幅0.40m・高さ0.30m程度の木棺が納められていたと推定される。

遺物は検出面の中央やや南西寄りから注口土器4・甕5等が出土したほか、10cm四方の標石と考えられる石が出土した。

7号土壙墓　土壙墓群の北端に位置し、1号溝と接する。主軸方向はN33°Wである。一部不明瞭な部分が有るが推定される墓壙掘り方の規模は、長さ2.80m・幅1.40m程度で、検出面からの深さは0.46mを測る。墓壙底には両小口に小口板を固定するための溝が掘られていた。溝の長さは東側0.52m、西側0.42mを測り、東側のほうが長い。このため、おそらく頭位は東だろうと推定される。この小口板痕跡と埋土の堆積状況から、長さ1.60m・幅0.50m程度の木棺が納められていたと推定される。本土壙墓は、掘り方がいびつな点、埋土に立ち上がりが見られる点、墓壙底から炭化物層が検出された点など、何等かの施設の存在もしくは別遺構との切り合いが想定されるが判断できなかった。



第9図　1号溝遺物出土状況図

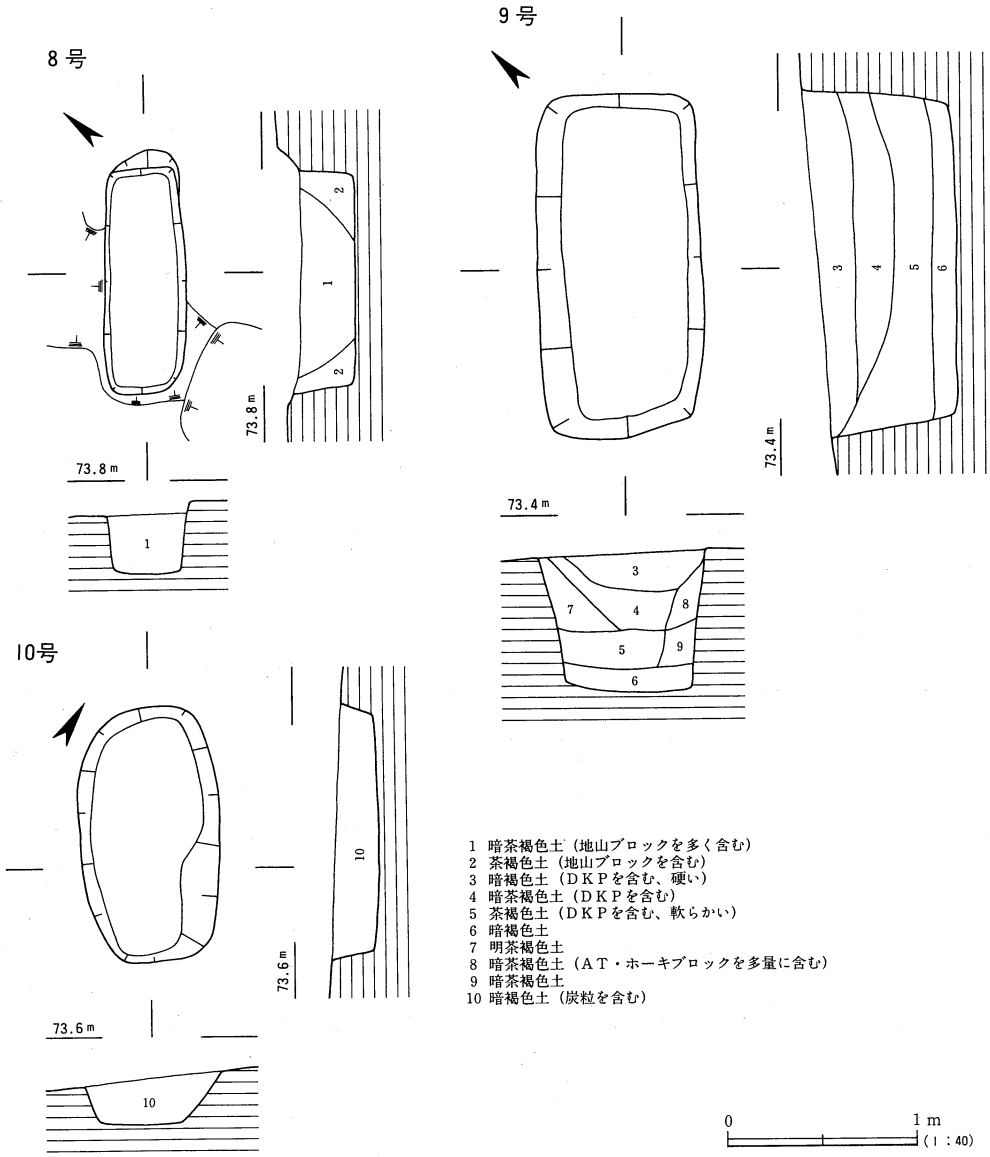
遺物は出土しなかった。

1号溝　尾根に直交し、土壙墓群の北を区画する。土層断面からは1号溝が7号土壙墓を切っているように見えるが、7号土壙墓の肩が崩れたためで、前後関係が逆転する可能性も考えたい。断面形はU字、平面形は両端が折れるカスガイ型で7号土壙墓を取り囲むような形になっている。検出面の規模は長さ5.02m・幅0.80m、検出面からの深さは0.46mを測る。溝の中央部は若干幅が広がっており、径0.30m程度の石が2個並んでいた。石は溝底から約0.10m浮いており、ある程度溝が埋まってからおかれた可能性も有る。石の上には土器片が多量に散らばっていたので、供献台と考えられる。

遺物は石の上を中心に壷7～9、体部全体を貝殻腹縁の刻み目で飾った注口土器、甕10・11、器台12等の土器がまとまって出土したほか、砥石S1が1点出土した。

8号土壙墓　土壙墓群の東端、6号土壙墓の南東に位置し、主軸方向はN51°Eである。平面形は隅丸長方形で墓壙掘り方の規模は長さ1.16m・幅0.42m、検出面からの深さは0.38mを測る。土壙墓群中最小のもので、6号土壙墓との位置関係から、6号土壙墓の被葬者と近親の子供の墓の可能性が高い。平・断面とも木棺痕跡は検出されなかった。

遺物は出土しなかった。

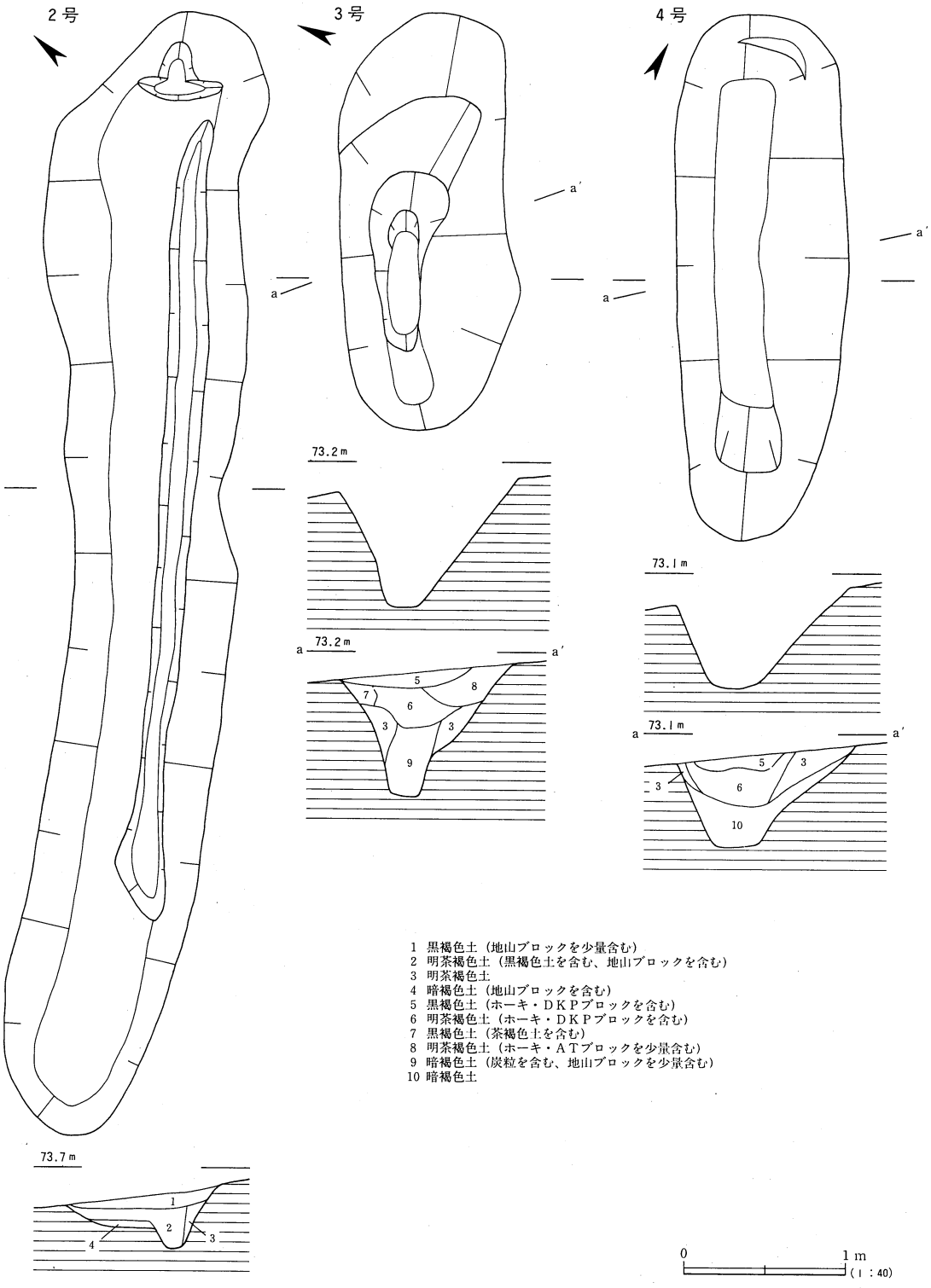


第10図　8～10号土壙墓遺構図

9号土壙墓　土壙墓群の南西隅、1号土壙墓と3号溝の間に位置し、主軸方向はN41°Eである。墓壙掘り方の規模は、長さ1.82m・幅0.86m、検出面からの深さは0.74mを測る。墓壙底から木棺痕跡は検出されなかったが、断面に側板を支えた痕跡が見られるので木棺墓であったと考えられる。

遺物は出土しなかった。

10号土壙墓　土壙墓群南部、1号土壙墓と2号土壙墓の間に位置し、主軸方向はN40°Wである。平面形はいびつな長楕円形で、墓壙掘り方の規模は長さ1.36m・幅0.74m、検出面からの深さは0.24mを測る。平・断面とも木棺痕跡は検出されなかった。土壙墓群内にあるため、



第11図　2～4号溝遺構図

土壙墓としたが、規模が小さく掘り方もいびつなため、土壙墓以外の遺構の可能性もある。

遺物は出土しなかった。

2号溝　尾根と平行して長く延び、土壙墓群の西を区画する。1・2・3・4・7号土壙墓主軸とほぼ直交する。断面形はU字形で、掘り方の規模は長さ6.96m・幅1.24m、検出面からの深さは0.20mを測る。溝底には東側に長さ4.92m・幅0.25m前後、検出面からの深さ0.12m前後の小溝が設けられている。

遺物は中央部付近の埋土上層より壷13・台付埦15、西側より壷14が出土した他、比較的多量の土器片が出土した。

3号溝　9号土壙墓の西に位置し、2号溝と共に土壙墓群の西を区画するが、2号溝とは軸が異なる。断面はV字形で、掘り方の規模は長さ2.60m・幅1.08m、検出面から最深部までの深さは0.78mを測る。底部はスリバチ状に深くなっており、形態的には土壙であるが、墓域を区画する位置にあり、他の溝と同様、上層に自然堆積の黒褐色土が見られたことから溝とした。土層断面には柱状のものを立てたような痕跡が認められた。

遺物は大型壷体部片16の他、若干の土器片が出土した。なお、大型壷体部片16は1・2・3号溝の上層埋土から、同一個体の破片が数片ずつ出土している。

4号溝　尾根と直交し、土壙墓群の南を区画する。断面はV字形で、掘り方の規模は長さ3.28m・幅1.06m、検出面からの深さは0.56mを測る。形態は土壙墓と差が無いが、上層に自然堆積の黒褐色土が見られたため溝と判断した。

遺物は出土しなかった。

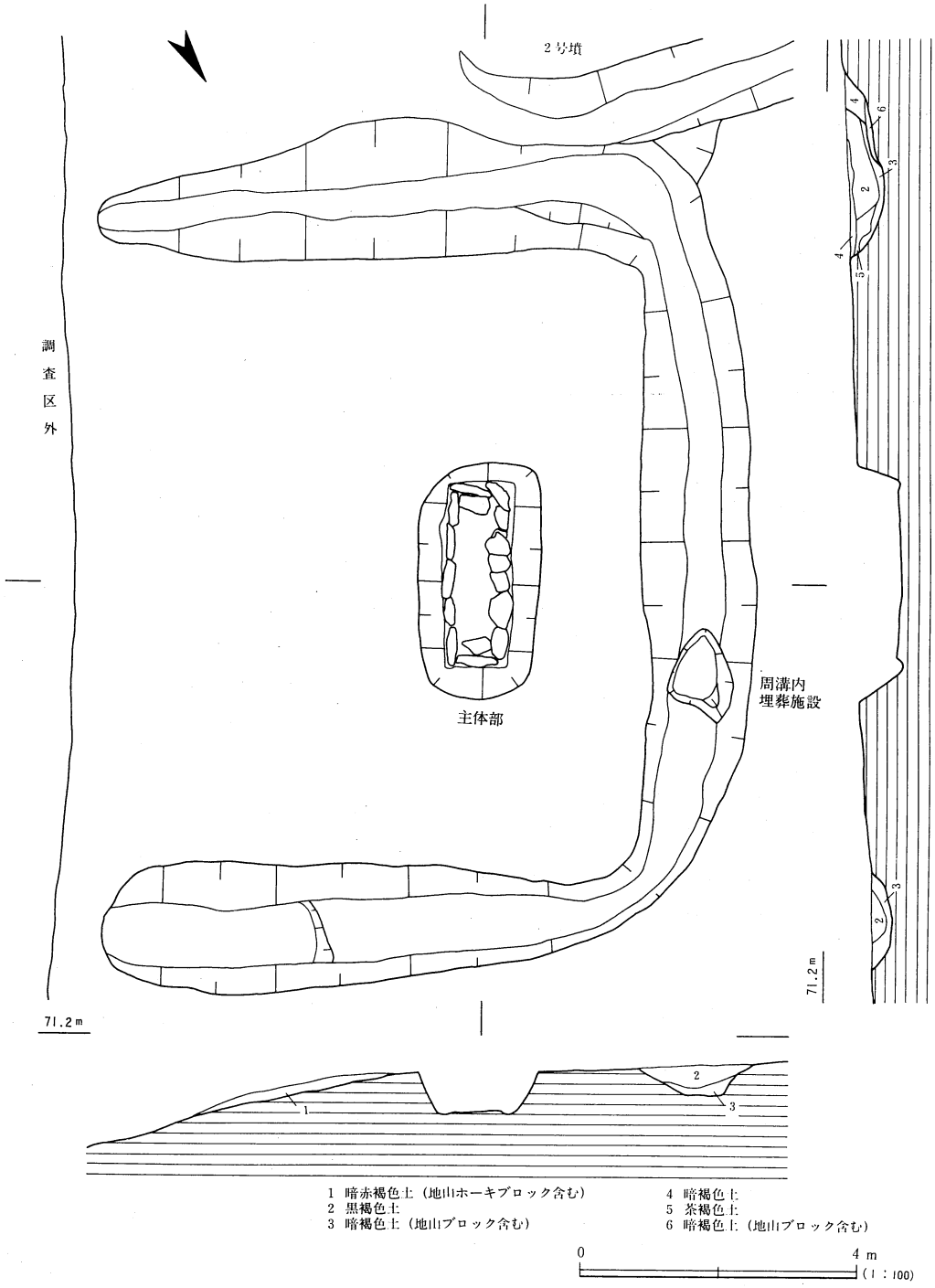
(2)　古墳群

調査の結果、調査区北側の丘陵東側の傾斜変換点で5基の古墳を検出した。5基は全て周溝の一部が接する様に造られており、このうち2～4号墳は西辺を揃えるようにしていた。盛土は1号墳でわずかに検出された以外遺存していなかったが、主体部は5基全てに残っており2・3号墳では2基の主体部が検出された。このうち1号墳の主体部は地域色の強い竪穴式石槨で類例の無いものであった。また、その他の埋葬施設として1号墳周溝から牛墓を、3号墳周溝から土器棺墓を検出した。

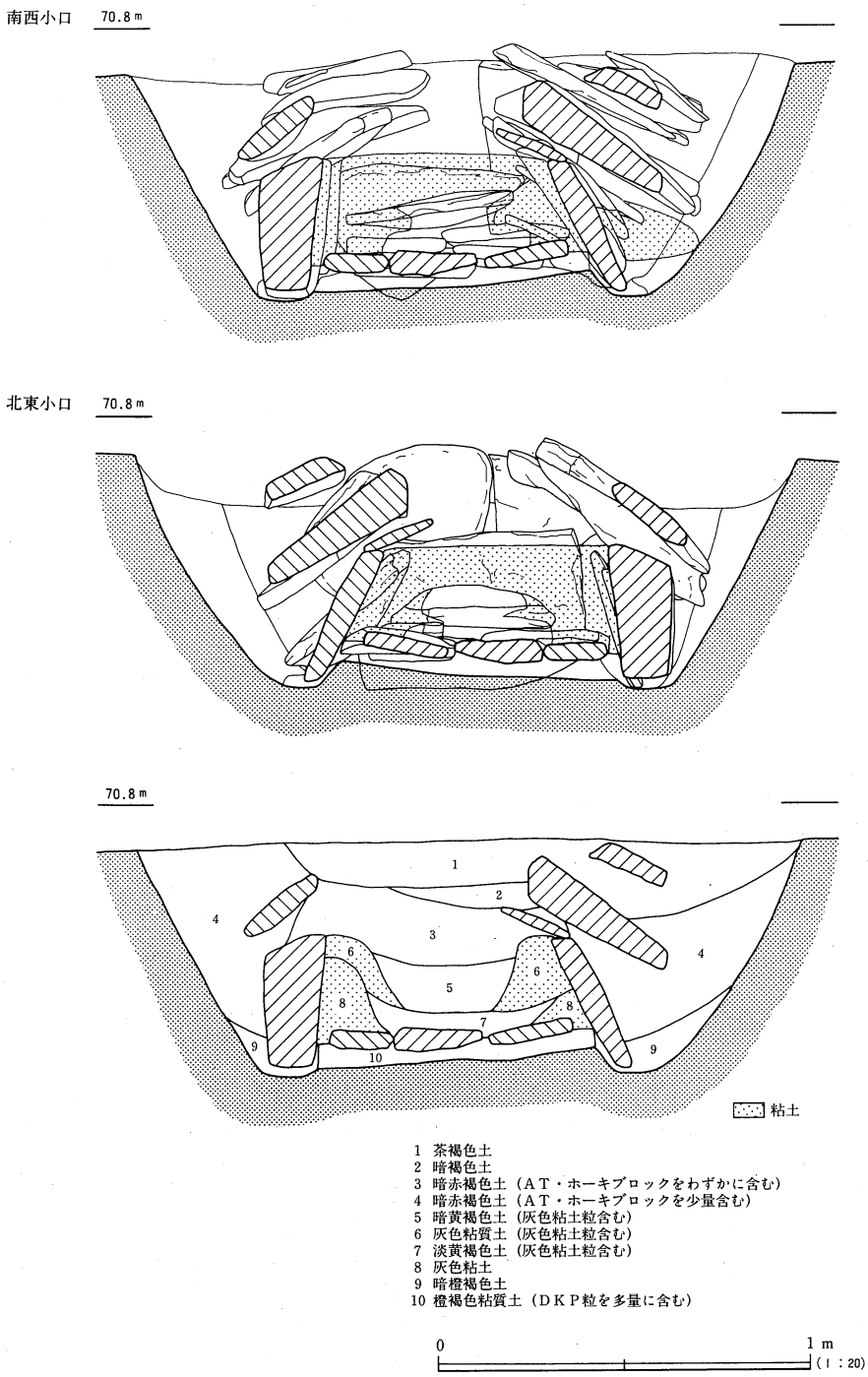
遺物は全体に少なく、副葬品は2号墳1号主体部の刀子1点のみであった。

1号墳

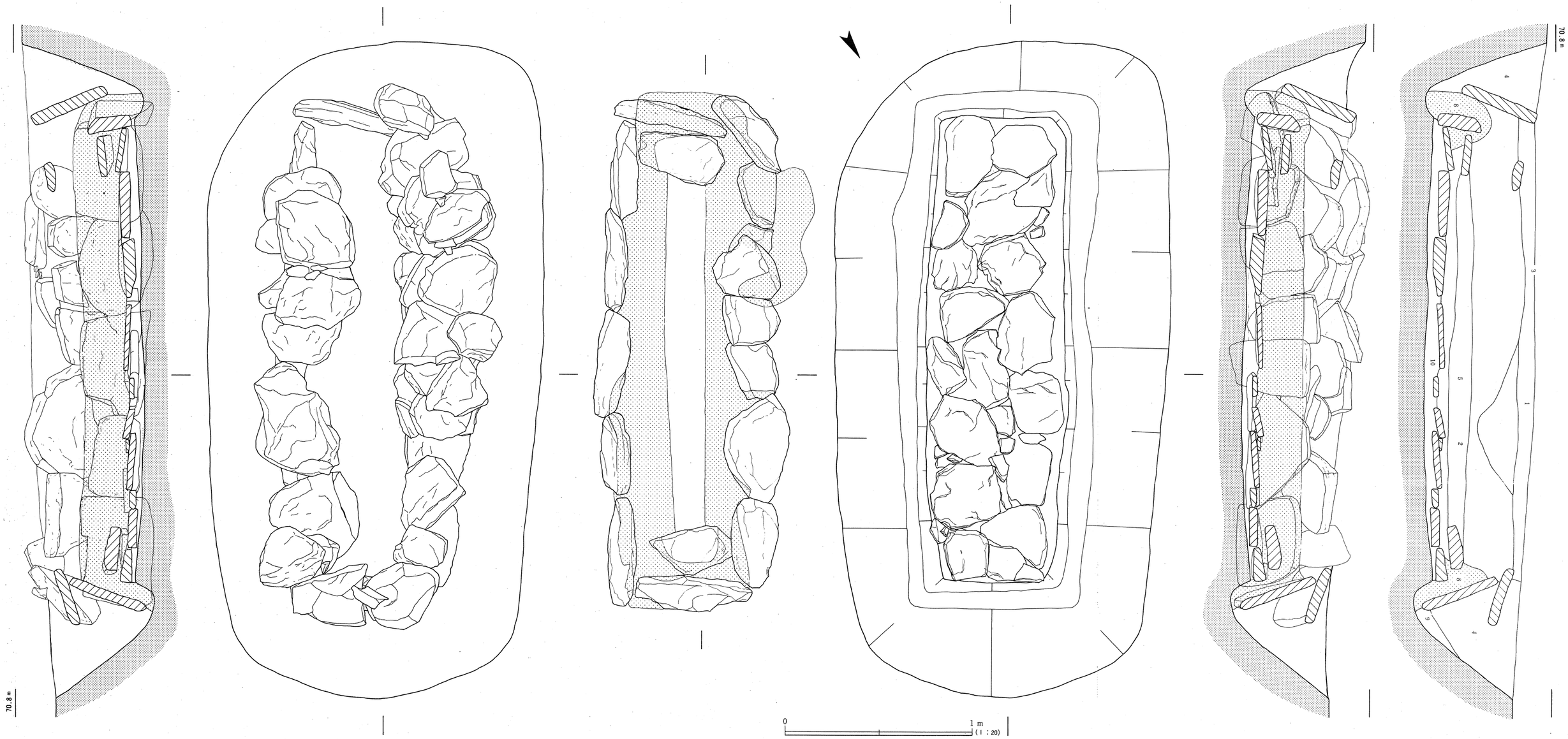
墳丘　調査区北側の標高71～72mの丘陵東側の傾斜変換点に位置する方墳で、今回調査した古墳群のなかで一番低い位置に立地する。調査前にはわずかに墳丘状の高まりが見られ、高まりの中心付近では石材が散乱していた。表土除去後の墳丘盛土は、斜面側だけ最大で10cmの厚さで遺存していた。調査後の周溝を含めた規模は、南北12.5m・東西9.5mを測り、今回調査した古墳群中最大の規模である。


2号墳
調査区外
主体部
周溝内
埋葬施設
71.2m
71.2m
1 暗赤褐色土（地山ホーキブロック含む）
2 黒褐色土
3 暗褐色土（地山ブロック含む）
4 暗褐色土
5 茶褐色土
6 暗褐色土（地山ブロック含む）
0
4 m
(1：100)

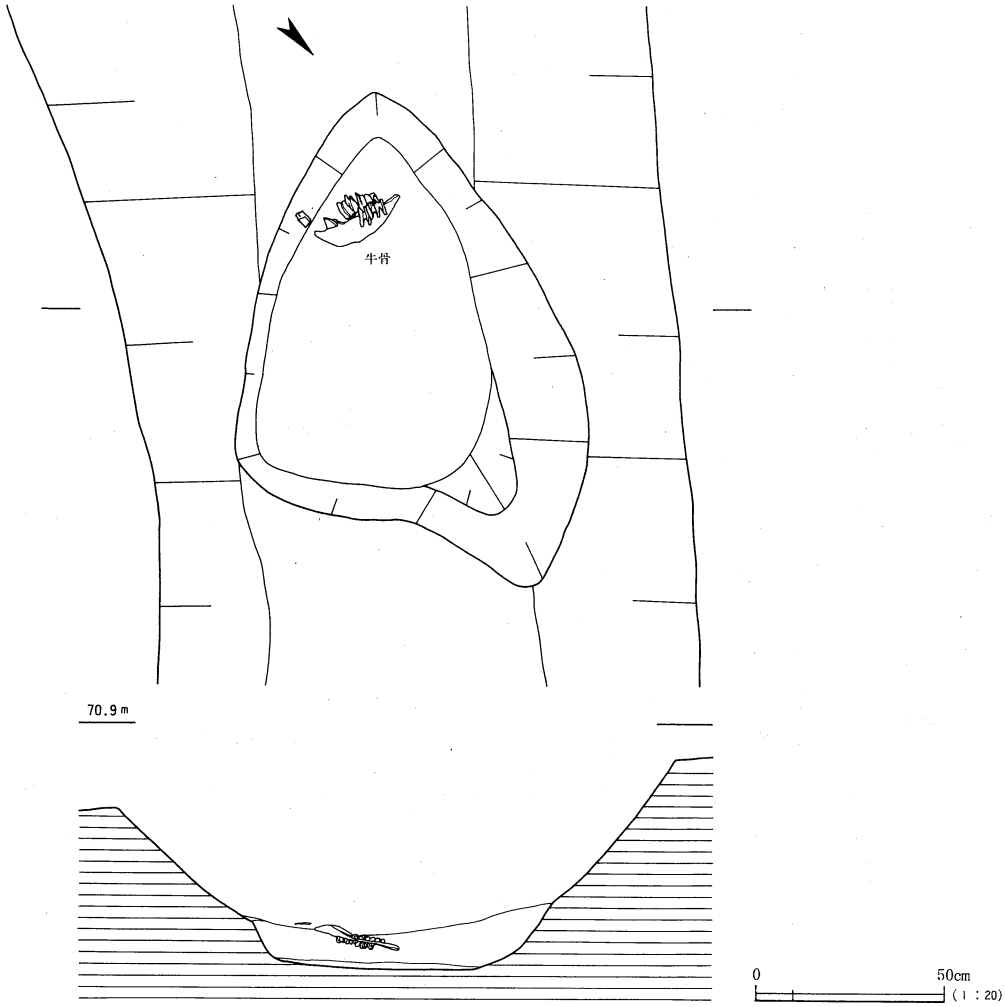
第12図　1号墳遺構図



第13図　１号墳主体部遺構図１



第14図　1号墳主体部遺構図2



第15図　1号墳周溝内埋葬施設遺構図

周溝　斜面の低い側を除きコの字状にめぐっている。南西側は2号墳の周溝を切っている。幅は最大で2.2m、深さは最も深い所で0.5mを測る。

主体部　墳丘中央やや西よりに位置する。主軸方向はN32°Eで、尾根と平行する。墓壙の掘り方規模は、長さ3.5m・幅1.77mで、検出面からの深さは最も深い所で0.6mを測る。断面観察及び平面掘り下げよりU字型の粘土床を検出したため、木棺は遺存していなかったが割竹形木棺と推定した。木棺の長さは両小口の石で木棺を挟んだ間、木棺の幅は粘土のU字型の肩であると考え、復元規模で長さ1.8m・幅0.4mと推定される。粘土床の周囲は基底部分が石材で囲まれ、さらに石材を二重三重に持ち送りながら積み上げていた。以上の状況から主体部は、割竹形木棺を持つ竪穴式石槨であると考える。石槨の規模は基底石の内法で、長さ2.4m・幅0.7mである。頭位は、南西側の石材が北東側に比べ若干厚く積み重なっており、南西

と推定する。

この主体部の構築方法は次のように復元できる。①墓壙を掘る。②長さ2.5m・幅0.7～0.75mの範囲で土を敷き整地する。③整地部分に約10～30㎝大の板石を隙間無く敷きつめる。④基底石掘り方に土を入れ、基底石を立てて内側から灰色粘土を詰めて安定させる。⑤敷石を覆い隠すように内側に土を敷く。⑥割竹形木棺を安置し、両小口部分を石で挟み込む。⑦木棺の隙間に粘土を詰める。⑧遺体を納めたのち木棺の蓋をする。⑨木棺の上に石を立てかけながら石を中央に持ち送る。⑩墓壙を埋める。

遺物　主体部からは副葬品、土器等の遺物は出土しなかった。周溝より高坏脚部17、墳丘表土除去中に小型器台18、鉄斧Ｆ１が出土した。

周溝内埋葬施設　周溝内北西側土壙より、牛の上・下顎骨及び歯が１体分出土した。周溝を検出した時点では、撹乱と考え周溝と一緒に掘り下げていたため、検出面での規模は不明であるが、周溝が埋まってから土壙が掘られている。周溝底での平面プランは不整な三角形で、規模は長さ1.13m・幅0.93m・深さ0.1mである。墓壙の長軸は周溝が伸びる方向と一致する。

２号墳

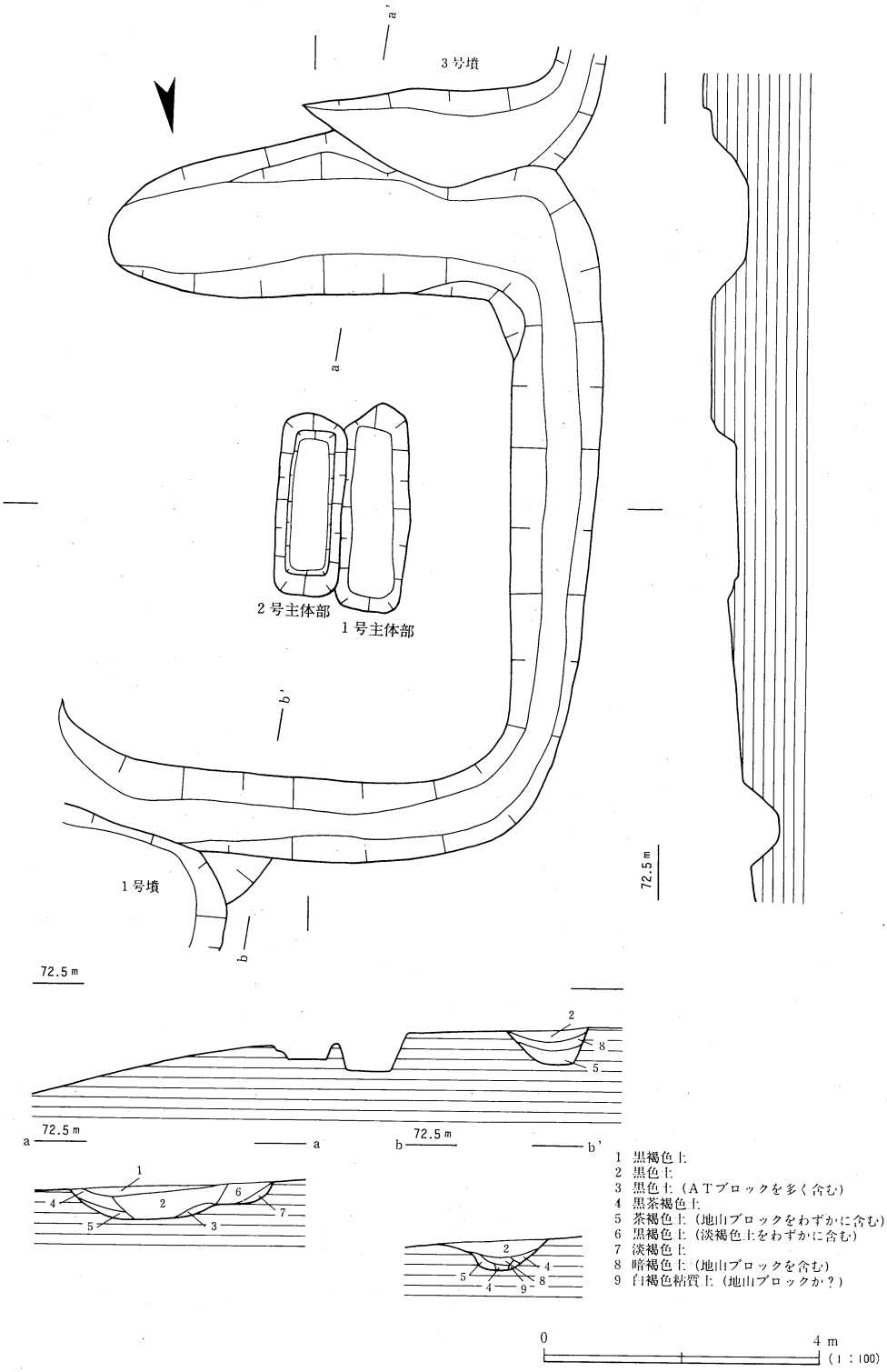
墳丘　調査区北側、標高71～72mの丘陵東側の傾斜変換点に位置する方墳で、１・３号墳と切り合う。調査後の周溝を含めた規模は南北10.7m・東西7.6mを測る。盛土は検出されなかったが、主体部が削平されていることから築造時にはある程度の盛土が有ったと考えられる。

周溝　斜面の高い側にコの字状に巡る。北端は一部１号墳の周溝によって切られ、南端は３号墳の周溝を切る。幅は0.85～2.35mで西・北側より南側が広くなっている。検出面からの深さは尾根側で最大0.55mを測り、斜面側は徐々に浅くなる。

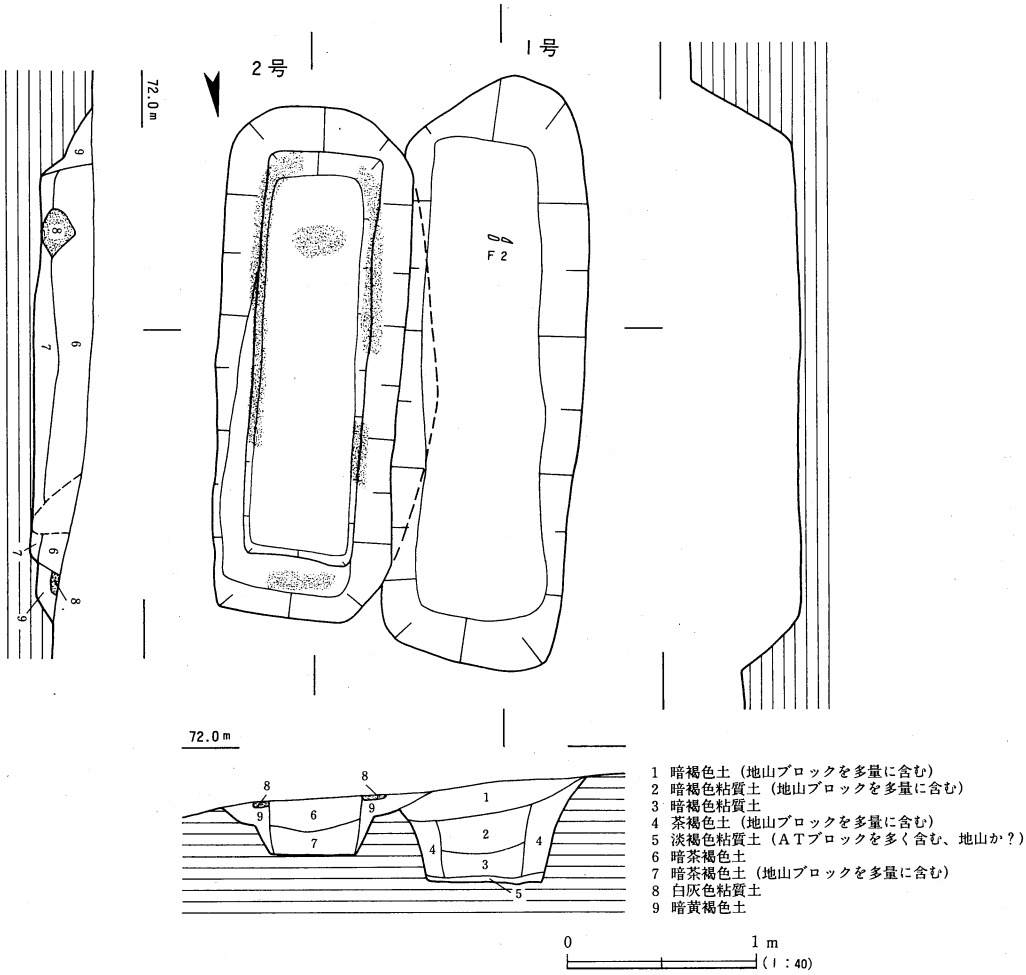
１号主体部　墳丘の中央やや西寄りに位置する土壙墓である。主軸方向はN13°Eで尾根と平行する。平面形はいびつな隅丸長方形で、墓壙掘り方の規模は長さ3.14m・幅0.97m、検出面からの深さは0.54mを測る。土層断面から木棺痕跡が検出されており、幅0.40m程度の木棺を納めていたと推定される。頭位は副葬品の位置から南と推定される。

副葬品は墓壙底南側中央から刀子Ｆ２が出土した。検出時は３つに折れており、腹を南、刃先を西に向けていた。

２号主体部　１号主体部の東に位置する土壙墓で、１号主体部を一部切っている。主軸方向はN16°Eでほぼ１号主体部と平行する。平面形は隅丸長方形で、墓壙掘り方は２段になっており、上段の規模は長さ2.70m・幅1.17m、下段の規模は長さ1.96m・幅0.46mで、検出面からの深さは0.26mを測る。土層断面から木棺痕跡が検出されており、下段の掘り方と合わせて、木棺の規模は長さ1.90m・幅0.40m程度と推定される。検出面で下段の掘り方の外側に沿って検出された白灰色粘質土は蓋と側板を固定するための目張りと考えられる。また、墓壙底南側中央で検出された白灰色粘質土塊は１号主体部の副葬品の出土位置と似ているため、


3号墳
a'
a
2号主体部
1号主体部
b'
1号墳
b
72.5 m
72.5 m
a
a
b
72.5 m
b'
1 黒褐色土
2 黒色土
3 黒色土（ＡＴブロックを多く含む）
4 黒茶褐色土
5 茶褐色土（地山ブロックをわずかに含む）
6 黒褐色土（淡褐色土をわずかに含む）
7 淡褐色土
8 暗褐色土（地山ブロックを含む）
9 白褐色粘質土（地山ブロックか？）
0
4 m
（1：100）

第16図　2号墳遺構図



第17図　2号墳1・2号主体部遺構図

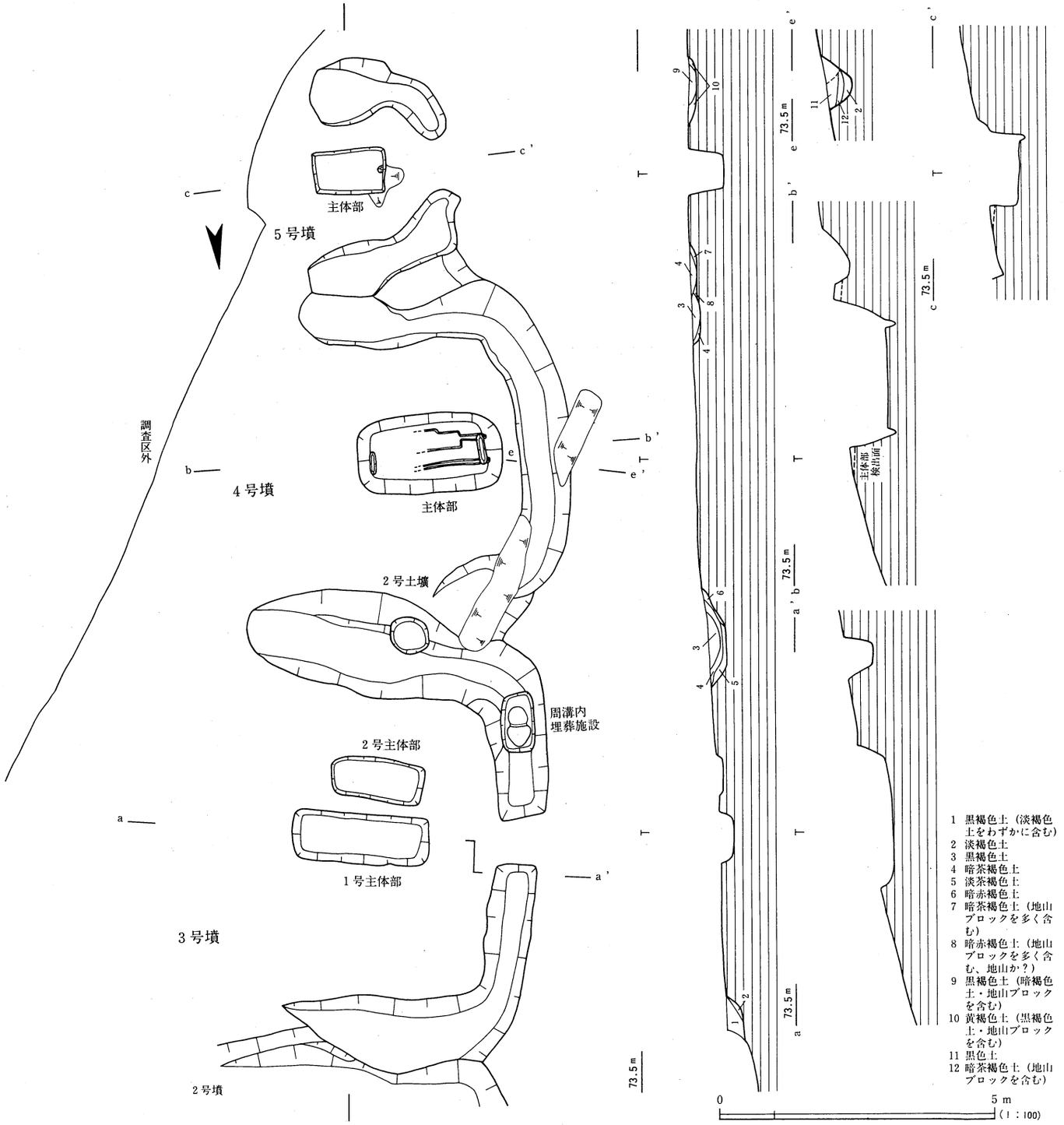
いわゆる粘土枕と考えられる。よって頭位は南と推定される。

副葬品は出土しなかった。

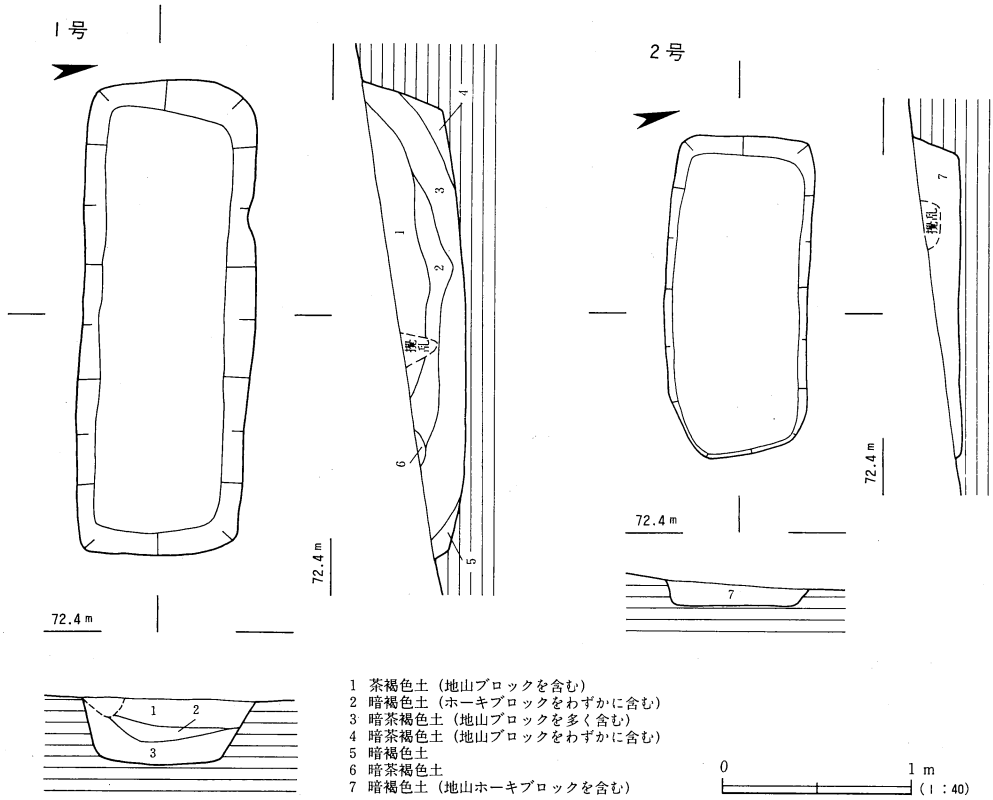
出土遺物　周溝埋土中より直口壷19・甕21・器台23が、表土中より大型壷20・高坏22が出土した。なお、直口壷19は他の遺物と時期が異なるので後世の混入とみられる。

3号墳

墳丘　調査区北側、標高72～73mの丘陵東側の傾斜変換点に位置する方墳で、2・4号墳と切り合う。調査後の周溝を含めた規模は南北8.65m・東西5.35mを測る。盛土は検出されなかったが、主体部がかなり削平を受けていることから、築造時にはある程度の盛土が有ったものと考えられる。



第18図　　3～5号墳遺構図



第19図　3号墳1・2号主体部遺構図

周溝　周溝は斜面の高い側にコの字状に巡り、尾根側の中央を0.85m程陸橋状に掘り残す。北側は2号墳の周溝に切られ、南側は一部地境溝による攪乱を受ける。幅は最大1.90m、陸橋部0.75mを測り、斜面側の方が広くなる。検出面からの深さは尾根側で最大0.48mを測り斜面側は徐々に浅くなっていた。

1号主体部　墳丘中央部に位置する土壙墓で、一部地境溝による攪乱を受ける。主軸方向はN79°Wで、尾根に対して直交する。平面形は隅丸長方形で、墓壙掘り方の規模は長さ2.52m・幅0.92m、検出面からの深さは最大0.41mを測る。墓壙としては掘り方がかなり浅いので、盛土が流失もしくは削平を受けたと考えられる。平断面とも木棺痕跡は検出されなかった。頭位は墓壙底の傾斜から西側と推定される。

副葬品は出土しなかった。

2号主体部　1号主体部の南0.30mに位置する土壙墓で、一部地境溝による攪乱を受ける。主軸方向はN75°Wで、1号主体部とほぼ平行する。平面形は隅丸長方形で、墓壙掘り方の規模は長さ1.69m・幅0.75m、検出面からの深さは最大0.23mを測る。1号主体部と比べるとかなり規模が小さいので子供を埋葬したものと考えられる。平断面とも木棺痕跡は検出されなかった。

副葬品は出土しなかった。

周溝内埋葬施設　陸橋部の南1.15mの周溝内に位置する土器棺墓である。大型の壷27を棺身、大型の把手付甕26を棺蓋とする合口土器棺で、棺の長さは0.75mであった。長さ1.06m・幅0.58m、周溝底からの深さ0.48mの墓壙掘り方内に、蓋側をやや上に向けた状態で埋置していた。棺身は底部を穿孔した後、高坏28の坏部で塞いでいた。棺蓋は同様に底部を穿孔した後、同一個体の高坏の脚裾部片で塞いでいた。また、棺蓋には接地面にも水抜き用の穴が開けられていた。なお、上面の割れは木の根が入っていたため周溝掘り下げ時に壊れたものであり、調査前は完形であったと思われる。

副葬品、人骨等は出土しなかった。

出土遺物　周溝内埋葬上面付近より壷24・甕25が出土した。周溝内埋葬に対する供献土器か墳丘から転落したものかは不明である。その他若干の土器片が出土した。

4号墳

墳丘　調査区北側の標高72～73mの丘陵東側の傾斜変換点、古墳群中最高所に位置し、3・5号墳と切り合う。墳形は方墳だが、1～3号墳と比べると辺・角が丸みを持つ。調査後の周溝を含めた規模は南北5.75m・東西4.80mを測る。盛土は検出されておらず、主体部の残りもいいため、築造時からほとんど盛土を持たなかったと考えられる。

周溝　周溝は斜面の高い側にコの字状に巡る。北側は3号墳と接し、一部地境溝による攪乱を受けているため不明瞭であった。南側は一部5号墳の周溝によって切られる。幅は最大1.10m、西側中央部0.95mで、検出面からの深さは最大0.45mを測る。

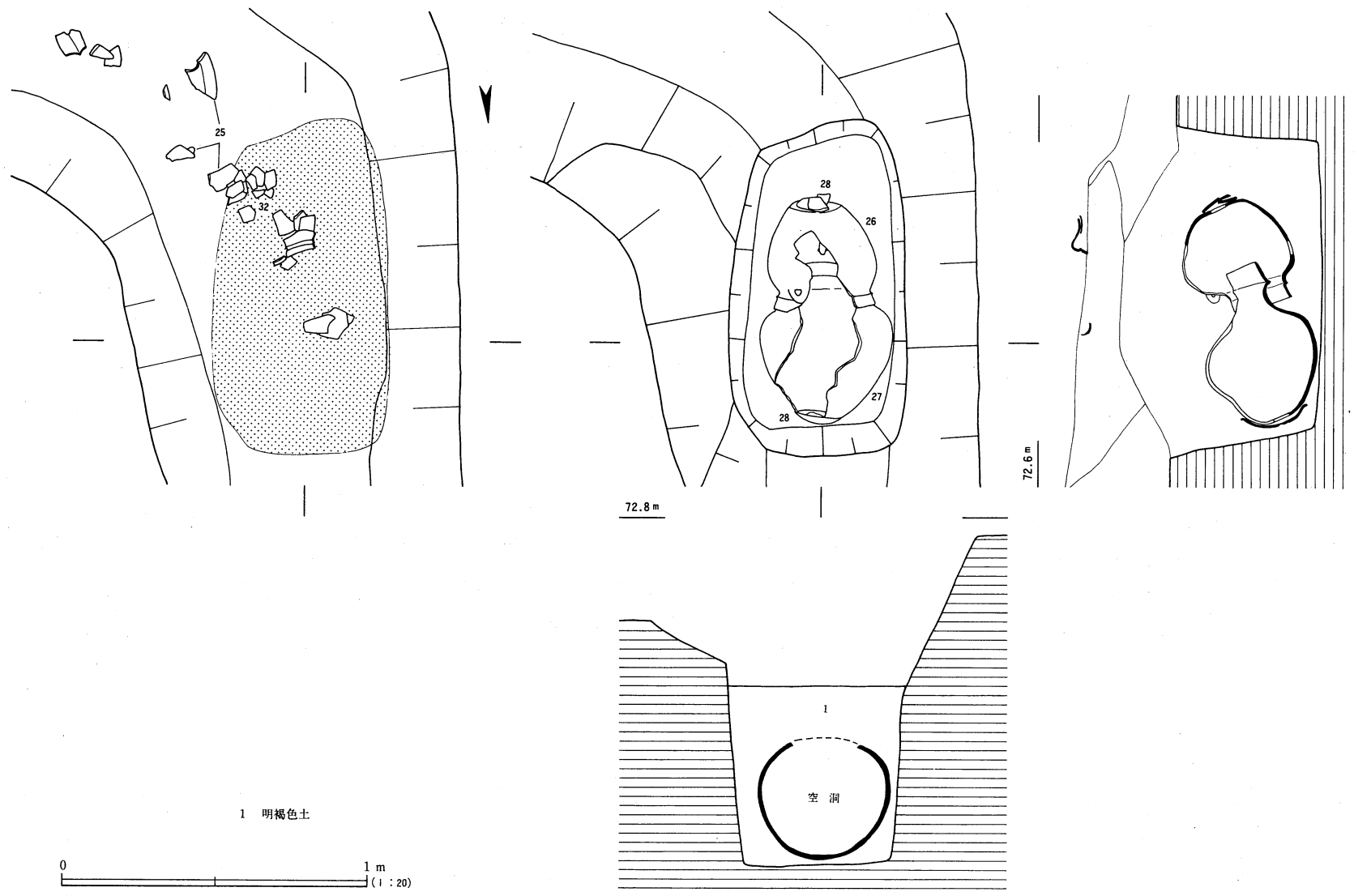
主体部　墳丘の中央部に位置する土壙墓である。周溝との距離は0.30m弱しかなく非常に近接している。主軸方向はN90°Wで尾根に対して直交する。平面形は長楕円形で、墓壙掘り方の規模は長さ2.66m・幅1.46m、検出面からの深さは0.68mを測る。墓壙底には両小口に小口板を固定するための溝が掘られており、西側の溝は小口板を立てた後、黄褐色土を裏込めしていた。溝の長さは西側0.56m・東側0.44mを測り、西側の方が長くなっている。溝状の側板痕跡も検出されており、小口板を側板で挟み込むような形の木棺であったと推定される。小口・側板の痕跡と土層断面から推定される木棺の規模は、内法で長さ1.90m・幅0.50mである。南側の側板痕跡は途中から広くなっているが大部分を掘りすぎたため詳細不明である。頭位は小口幅と墓壙底の傾斜から西と推定される。

副葬品は出土しなかった。

出土遺物　周溝埋土より、流れ込んだと思われる石鏃S 4が出土したのみで、古墳に伴う遺物は出土しなかった。

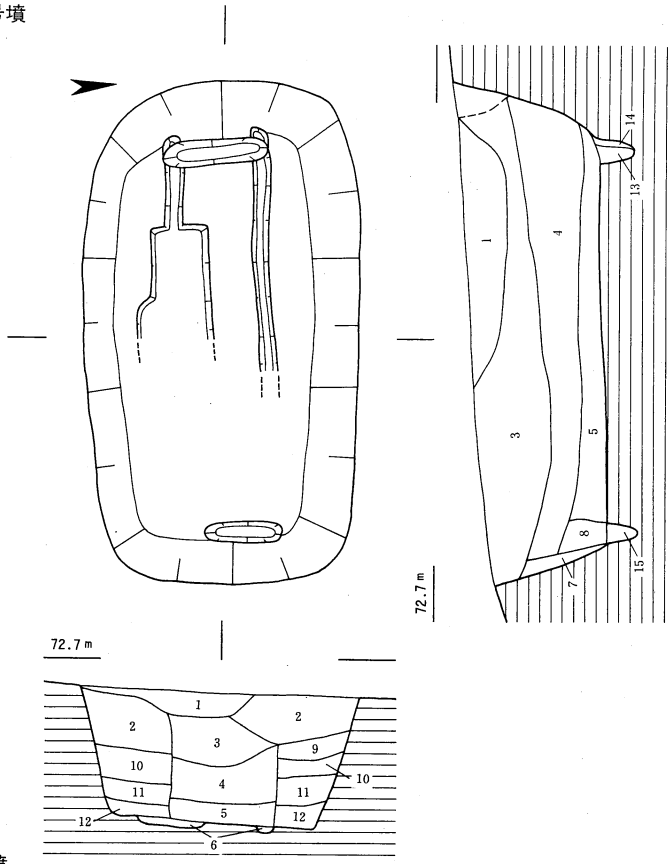
5号墳

墳丘　古墳群中最南端、調査区北側の丘陵東側の傾斜変換点に位置し、4号墳と切り合う。2・3号墳のように4号墳と周溝を揃えず、やや低位に造られている。墳形は不明瞭であるが方墳と考えられる。調査後の周溝を含めた規模は南北4.30m、東西2.95mを測る。盛土は検

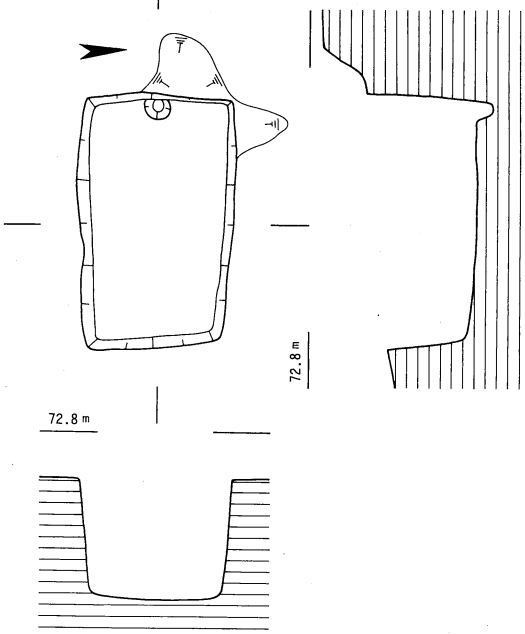


第20図　3号墳周溝内埋葬施設遺構図

4号墳



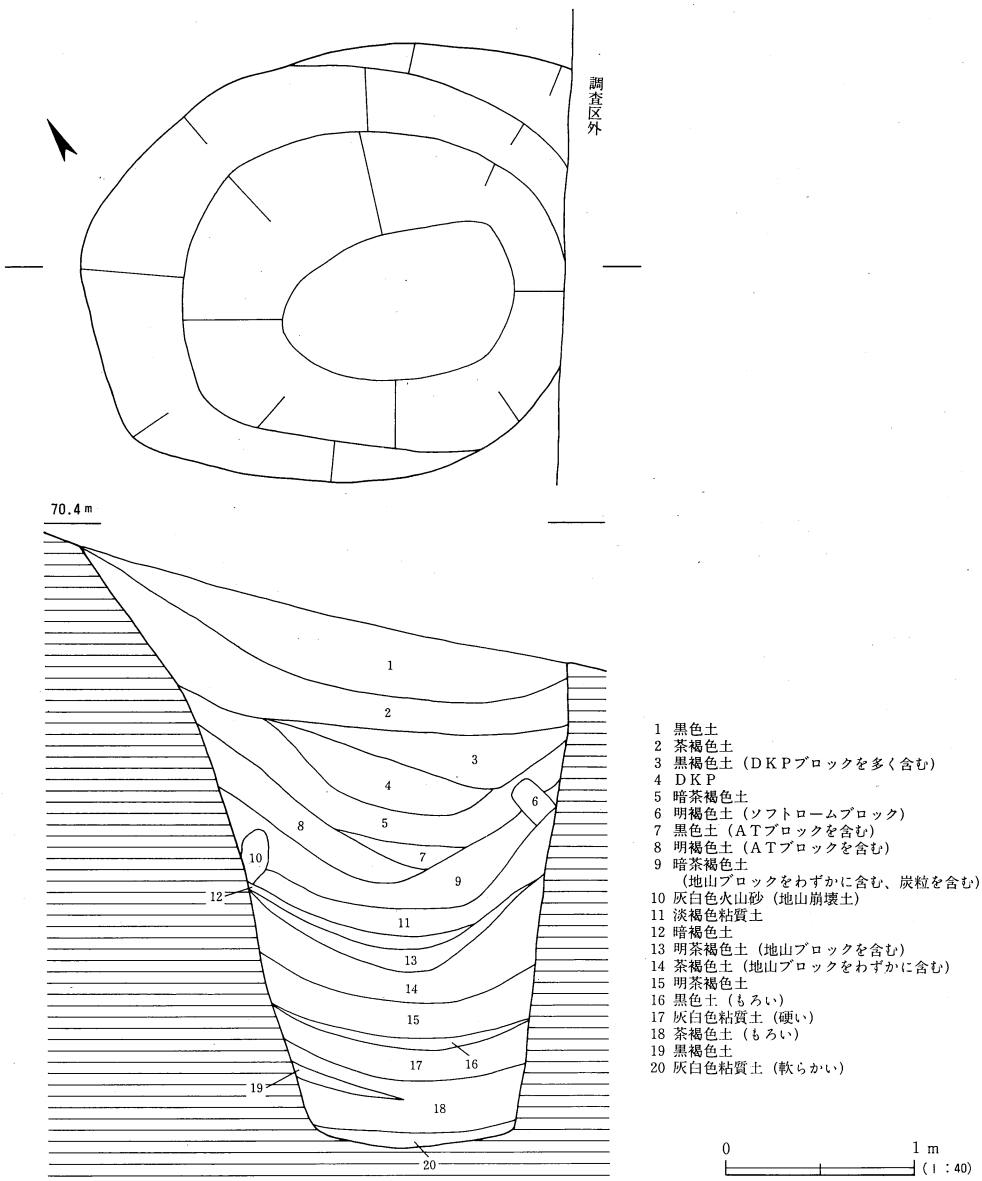
5号墳



1 暗褐色土（地山ブロック小粒を少量含む）
2 暗橙褐色土（地山ブロックを含む）
3 暗橙褐色土（地山ブロックをわずかに含む）
4 暗橙褐色土（地山ブロックをわずかに含む、暗褐色土を含む）
5 暗黄褐色土（ＤＫＰと暗褐色土の混じり土）
6 暗褐色土（ＤＫＰを含む）
7 暗橙褐色土
8 暗橙褐色土（地山ブロックを多く含む）
9 暗橙褐色土（地山ブロックを含む、暗褐色土を含む）
10 黄褐色土（地山ブロックを少量含む）
11 暗橙褐色土（地山ブロックを多く含む）
12 暗黄褐色土（５より暗い）
13 暗茶褐色土
14 淡黄褐色土
15 暗橙褐色粘質土

0　1 m（1：40）

第21図　4・5号墳主体部遺構図

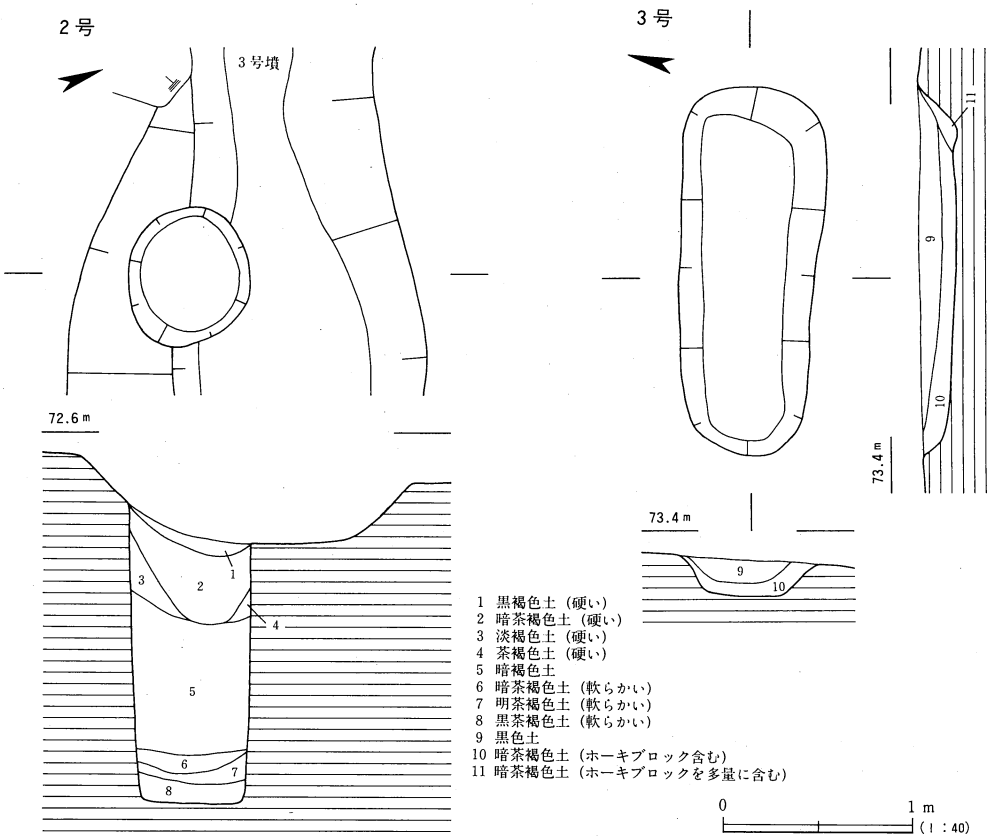


第22図　１号土壙遺構図

出されておらず、主体部の残りもいいため築造時からほとんど盛土を持たなかったと考えられる。

周溝　周溝は斜面の高い側にコの字状に巡り、尾根側中央を陸橋状に掘り残す。北側は４号墳の周溝をわずかに切っている。幅は最大1.05m、陸橋部0.55mで、斜面の方が広くなっていた。検出面からの深さは0.10m～0.15m程で非常に浅い。

主体部　墳丘中央に位置する土壙墓で、北西肩部が根による攪乱を受ける。主軸方向はN86°Wで、尾根に対して直交する。平面形は方形で、墓壙掘り方の規模は長さ1.34m・西小口幅0.80



第23図　2・3号土壙遺構図

m・東小口幅0.74m、検出面からの深さは0.66mを測る。墓壙底西辺中央に径0.14m・深さ0.10mの小ピットを持つ。木棺痕跡は平断面とも検出されなかった。頭位は小口幅の違いから西と推定される。

副葬品は出土しなかった。

出土遺物　主体部検出面より大型壷29・高坏31、南側周溝より甕30が出土した。当初壷29は5号墳の主体部としての土器棺と考えていたが、下から本物の主体部が検出されたので主体部に対する供献土器であろう。

(3)　土壙

3基の土壙を検出した。3基は形態・規模の点で大きな差が有り、性格も異なると推定される。

1号土壙　調査区北側東斜面、2号墳南側周溝の延長線上に位置し、一部調査区外にかかる。平面形は円形で、掘り方の規模は長軸2.56m・短軸2.30m、検出面からの深さは尾根側で3.20mを測る。地山の土層を観察すると上層部は軟質・褐色系の火山灰層であるが半ば過ぎから硬質・灰色系の火山砂層に変わり、埋土にもこれが崩落したものが含まれるようになる

(10・17・20層)。

遺物は17・18層の境界付近から土師器体部32・高坏坏部片が出土した。性格は不明だが、同時期の遺構である古墳群との関係から、1号墳主体部や2号墳2号主体部で使用された粘土の採掘壙の可能性が有る。

2号土壙　調査区北側丘陵東側の傾斜変換点、3号墳の南側周溝内に位置する。平面形はほぼ円形、規模は長軸0.72m・短軸0.64m、深さは周溝底から1.42m、周溝検出面からは1.80m程度になる。

遺物は出土しなかった。性格は、底部に杭穴状のものが検出されなかったので断定を避けるが、埋土の締まり具合や周辺から縄文土器片・石鏃が出土していることから縄文時代の落し穴と推定される。

3号土壙　調査区南側の東緩斜面に位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.96m・短軸0.72m、検出面からの深さは0.20mを測る。当初平面形から土壙墓の一つと考えていたが、埋土が黒色土の自然堆積であったため性格不明の土壙とした。

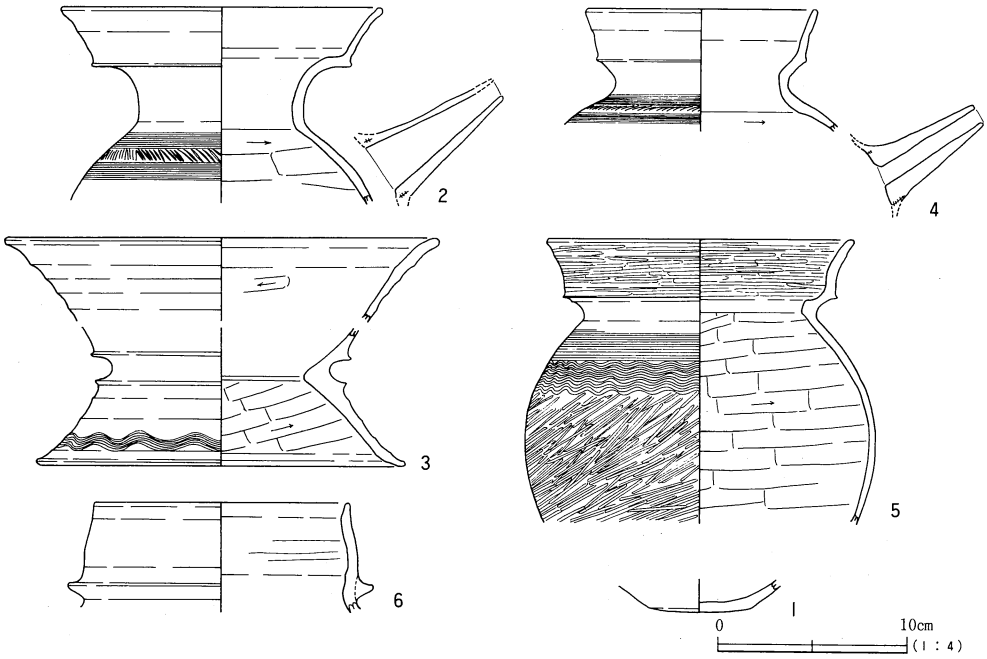
遺物は出土しなかった。

2．遺物

土壙墓群

〔法量（　）は推定値〕

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・焼成・色調・遺存状態
3号土壙墓埋土	1	底部	底径 (5.3)	縁の丸い平底。	外面ヘラミガキ後ナデ。内面ヘラケズリ後ナデ。	精良。 焼成良好。 暗黄褐色。内面炭化物付着。 底部1/2。
5号土壙墓上面	2	注口土器	口径(16.8) 注口長 7.5 注口先径 0.9	口縁部は強く外反する複合口縁で口縁端部は小さく角張る。屈曲部はほとんど磨滅しているが、長く伸びるものではない。頸部は細くしまって長い。肩部に櫛状工具による細かい目の浅い平行線帯を2条施し、間に同一工具による刻み目を密にめぐらす。注口部分の取付く角度不明。薄手。	口縁部内外面ヨコナデ。肩部内面右方向の丁寧なヘラケズリで単位不明瞭。 注口部外面ハケメ調整、型による成形とみられ、内面の調整単位は観察できない。	1～3㎜大の砂粒、1㎜以下の細砂粒を比較的多量に含む。 焼成不良。もろい。 淡黄白色。 口縁部1/3・頸部2/3・肩部1/8・注口部ほぼ完存。
	3	鼓形器台	口径 22.6 脚径 19.0 器高(11.7)	外反気味に大きく開く上台部で、端部は丸い。脚台部は上台部より小さく、端部でさらに外反させて丸くおわる。屈曲部の稜は鋭い。脚台部下位に櫛描波状文帯をめぐらす。	口縁部内外面強いヨコナデ。上台部外面ヨコナデの単位明瞭、内面左方向のヘラケズリ後ナデ仕上げ。脚端部内外面強いヨコナデ。脚台部外面ヨコナデ、内面右上方向のヘラケズリ。	1～2㎜大の砂粒を比較的多量に含む。 焼成ややあまい。 暗橙褐色。 上台部2/3、脚台部完存。
6号土壙墓上面	4	注口土器	口径(12.0) 注口長 6.1 注口先径 0.8	口縁部は外反する複合口縁で、口縁端部は丸い。屈曲部の内面の段は不明瞭。屈曲部の稜は磨滅しているが小さい。頸部は比較的短い。肩部に櫛状工具による細かく浅い平行線帯を2条施し、間に同一工具による刻み目を密にめぐらす。注口部分の取付く角度不明。	口縁部内外面ヨコナデ、外面屈曲部付近に櫛描沈線状の擦痕が残る。肩部内面右方向のヘラケズリ。注口部外面ナデ調整。棒状工具を差し込んだままの成形で基部は厚い。	2㎜大の砂粒を少量含む。 焼成あまい。 淡桃橙色。注口部下側及び胴部破片に煤付着。 口縁部1/4、肩部1/3、注口部ほぼ完存。



第24図　3～6号土壙墓出土遺物図

〔法量（　）は推定値〕

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・焼成・色調・遺存状態
6号土壙墓上面	5	甕	口径(16.0) 最大胴径 (18.4)	口縁部は外反する複合口縁で、口縁端部は丸い。屈曲部は明瞭な段をなし、屈曲部の稜は小さく突出する。体部は肩の強く張らない倒卵形。肩部外面には貝殻腹縁による平行線帯→波状文帯を施文する。	口縁部内外面横方向のヘラミガキ。口縁部外面には櫛描沈線状の擦痕を残す。頸部外面ヨコナデ。体部外面先細の斜め方向のヘラミガキ、内面右方向のヘラケズリ。	1～2㎜大の砂粒を多量に含む。 焼成良好。 淡黄褐色。胴部一部黒斑。 口縁～胴部1/2。
5・6号土壙墓上面	6	壷	口径(13.4)	内湾する長い口縁部で、端部は上方向に立って丸くおわる。頸部との境界に断面三角形の突帯を貼付。	口縁部内外面ヨコナデ。口縁部内面の器面は粗く、擬凹線状の条痕がある。	1㎜大の砂粒を少量含む。雲母めだつ。 焼成普通。 淡黄白褐色。 口縁部1/8。
1号溝埋土上層	7	壷	口径(15.8)	口縁部は短く内傾する複合口縁で端部は肉厚。屈曲部の稜は横方向に細長くのびる。頸部は強く外反して上方に開く。	口縁部内外面ヨコナデ。口縁部外面擬凹線状の条痕がみえる、内面ヨコナデ2単位。頸部外面ヨコナデ。肩部内面右方向のヘラケズリ。	2～3㎜大の砂粒を比較的多量に含む。 焼成ややあまい。 淡黄褐色。 口頸部1/2。
1号溝石の上	8		口径　14.6 最大胴径 22.8 底径　3.6 器高　29.0	口縁部は短く直立する複合口縁で端部8は外側にやや膨らむ。9は内側に把厚するが一様でない。ともに屈曲部の稜は横方向に長く伸びる。体部は肩の張る倒卵形で、底部は縁の丸い平底。肩部に8は貝殻腹縁による波状文帯とその下に刻み目がめぐり、9も貝殻腹縁による波状文帯から平行線帯を一連に施文する。9は底部焼成後の穿孔（7×5.5）で一方に片寄る。	口縁部内外面ヨコナデ2単位。口縁部外面に櫛描沈線状の擦痕残る。外面頸部～肩部縦方向に、肩部下半斜め方向にハケメ調整。体部下半8は非常に細かい目の縦方向のハケメ調整で一部粗い目もみえる。9は縦方向のハケメ調整のちナデ。内面頸部ナデで、器面粗く平滑でない。体部右上方向のヘラケズリで、8の底部付近はヘラケズリ後の指頭圧痕を残す。	1～2㎜大の砂粒を少量含む。 焼成普通かややあまい。 淡黄褐色～淡橙褐色。 ほぼ完形。
	9		口径　15.6 最大胴径 26.5 底径　5.7 器高　30.9			1～3㎜大の砂粒を比較的多量に含む。 焼成普通かややあまい。体部一方向に肩～底部まで黒斑。 淡黄褐色～淡橙褐色。 ほぼ完形。

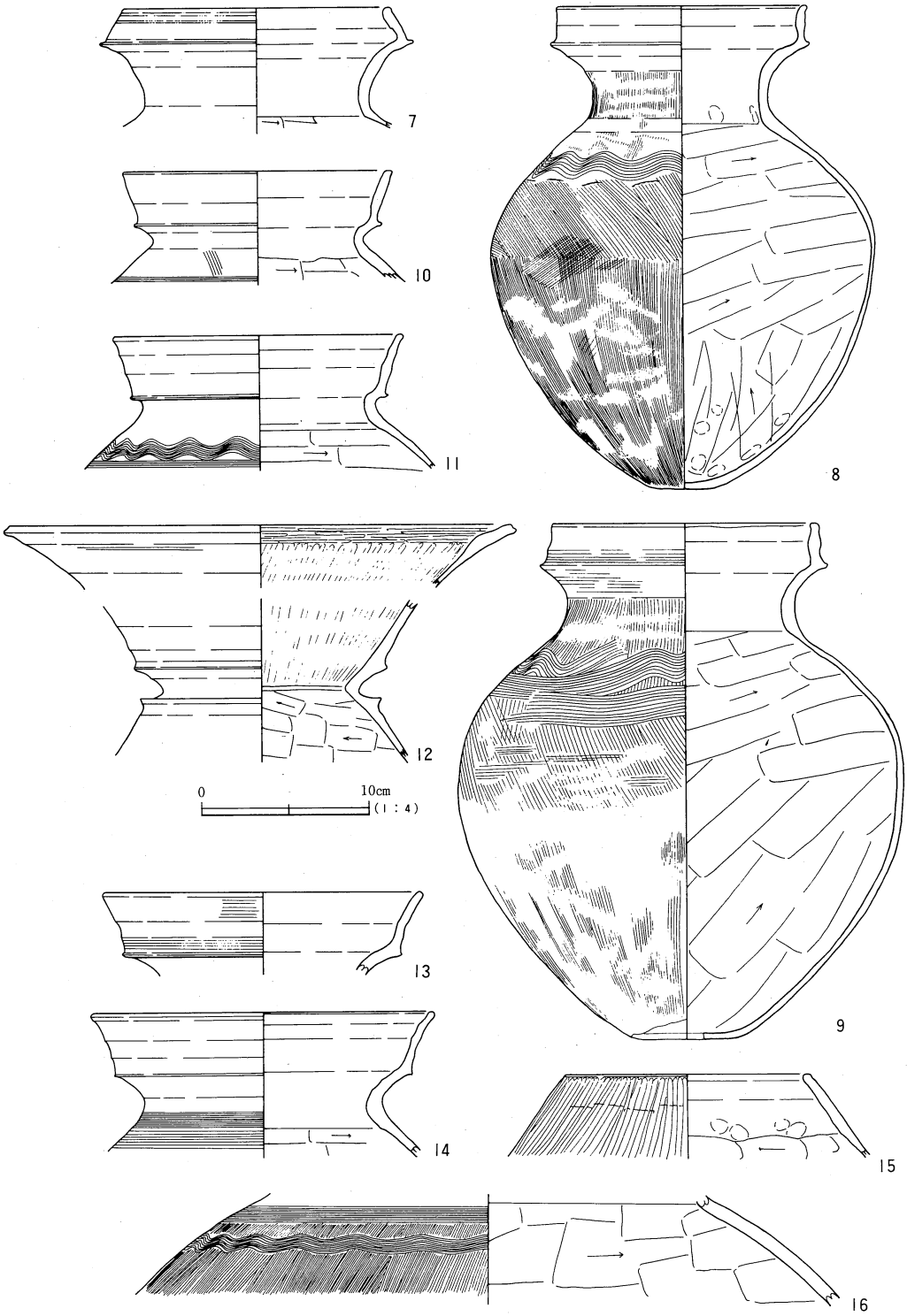
〔法量（　）は推定値〕

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・焼成・色調・遺存状態
1号溝 埋土上層	10	甕	口径(15.4)	口縁部は外傾する複合口縁で、端部10は角張り、11は丸い。屈曲部の稜は鋭い。肩部に貝殻腹縁による平行線ないし波状文帯がめぐる。	口縁部内外面ヨコナデ、10は2単位。ともに口縁部外面に櫛描沈線状の擦痕残る。肩部外面ナデ、内面右方向のヘラケズリ。	精良。雲母めだつ。 焼成良好。 淡褐色。 口縁～肩部1/6。
	11		口径(17.0)			1㎜大の砂粒少量、1㎜以下の細砂粒比較的多量に含む。 焼成良好。硬質。 暗黄褐色。 口縁～肩部1/3。
1号溝 埋土上層及び予備調査T2	12	鼓形器台	口径(14.8)	ゆるやかに大きく外反する上台部で端部は角張って凹面をなす。屈曲部の稜は鋭い。接合しないが同一個体の脚端部は角張る。	口縁部外面ヨコナデ、外面に櫛描沈線状の擦痕残る。内面端部横方向のヘラミガキ、上台部ヘラミガキのちナデ、脚台部左方向のヘラケズリ。	3㎜以下の砂粒を多量に含む。 焼成良好。 橙褐色。 口縁部2/3、筒部1/3。
2号溝 埋土上層	13	壺	口径(18.8)	口縁部は外反する複合口縁で、端部は丸い。屈曲部の稜は小さく外下方に突出する。14は肩部に櫛描平行線帯がめぐる。	口縁部内外面ヨコナデ、13は外面櫛描沈線状の擦痕全体に明瞭に残る。14はヨコナデ3単位が明瞭になっている。肩部内面右方向のヘラケズリ。	1㎜大の砂粒をわずかに含む。 雲母めだつ。 焼成普通かややあまい。 黄褐色。 口縁部1/2。
2号溝 西側埋土	14		口径(20.0)			1～2㎜大の砂粒を少量含む。 焼成あまい。 黄褐色。 口縁～肩部1/3。
2号溝 埋土上層	15	台付埦	口径(14.0)	内傾する口縁部。ワイングラス状の埦に台がつく器形。口端部丸く外側がやや膨らむ。大型。	口縁部外面縦方向のヘラミガキ、上位にハケメ端の痕が残る。内面端部ヨコナデ、下位左方向のヘラケズリ。	1㎜以下の細砂粒を多量に含む。 焼成良好。 淡黄白褐色。 口縁部1/10。
1号溝 2号溝 3号溝 埋土上層	16	大型壺		口頸部不明。頸部直下破片。肩部上位に貝殻腹縁による平行線帯と波状文帯を施文する。	体部外面非常に細かい目の縦方向のハケメ、内面右方向のヘラケズリ。	2㎜以下の砂粒を比較的多量に含む。 焼成良好。硬質。 淡黄褐色。 肩部1/10。

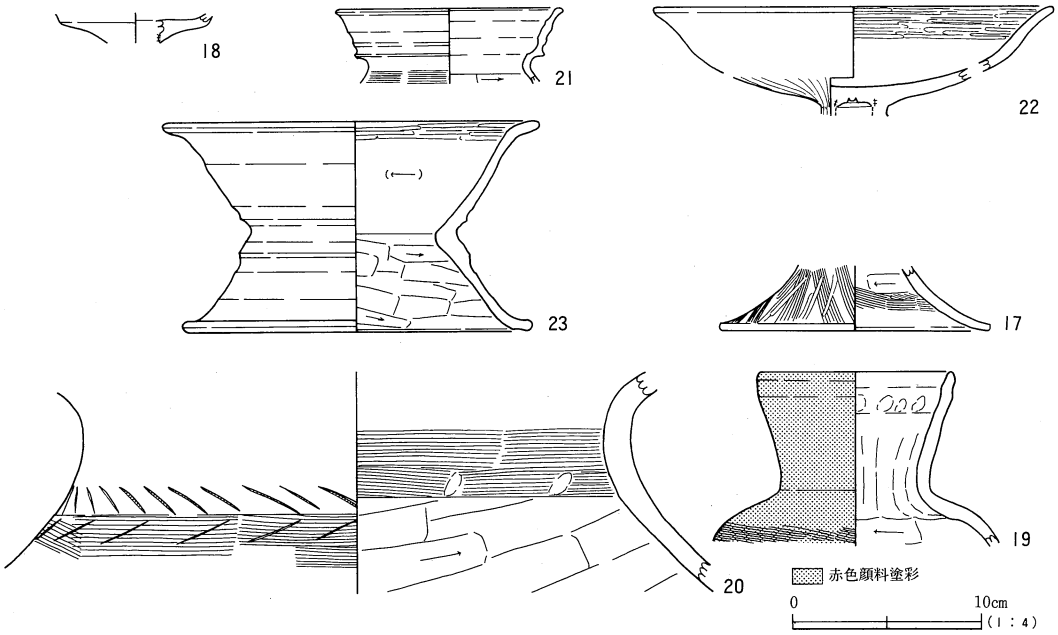
古墳群

〔法量（　）は推定値〕

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・焼成・色調・遺存状態
1号墳 周溝埋土	17	高坏	脚径(14.0)	脚部破片。ゆるやかに開く脚部で端部小さく角張る。薄手。	外面裾部ハケメ調整のち疎なヘラミガキ。内面筒部左方向のヘラケズリ、裾部横方向のハケメのち下位ナデでハケメ痕跡を残す。	2㎜大の砂粒を少量含む。茶色粒子を含む。 焼成良好。 黄褐色。 裾部1/6。
1号墳 表土	18	小型器台		受部破片。上方にのびる口縁部が付くもの。脚部との接合は円板充填式。やや厚手。	受部外面磨滅、内面ヘラミガキのちナデか。	2㎜大の砂粒を少量含む。 焼成普通。 くすんだ淡黄褐色。 受部1/6。
2号墳 周溝埋土	19	直口壺	口径　10.0	口縁部は長く外傾し、肩の張る球形の体部。	口縁端部内外面強いヨコナデ、下位に指頭圧痕めぐる。頸部内面絞り目。肩部外面斜め方向のハケメのち上位ナデ、内面左方向のヘラケズリ。	1～2㎜大の砂粒を比較的多量に含む。 焼成あまい。 暗赤褐色。外面赤色顔料塗彩。 口縁部2/3、肩部1/4。



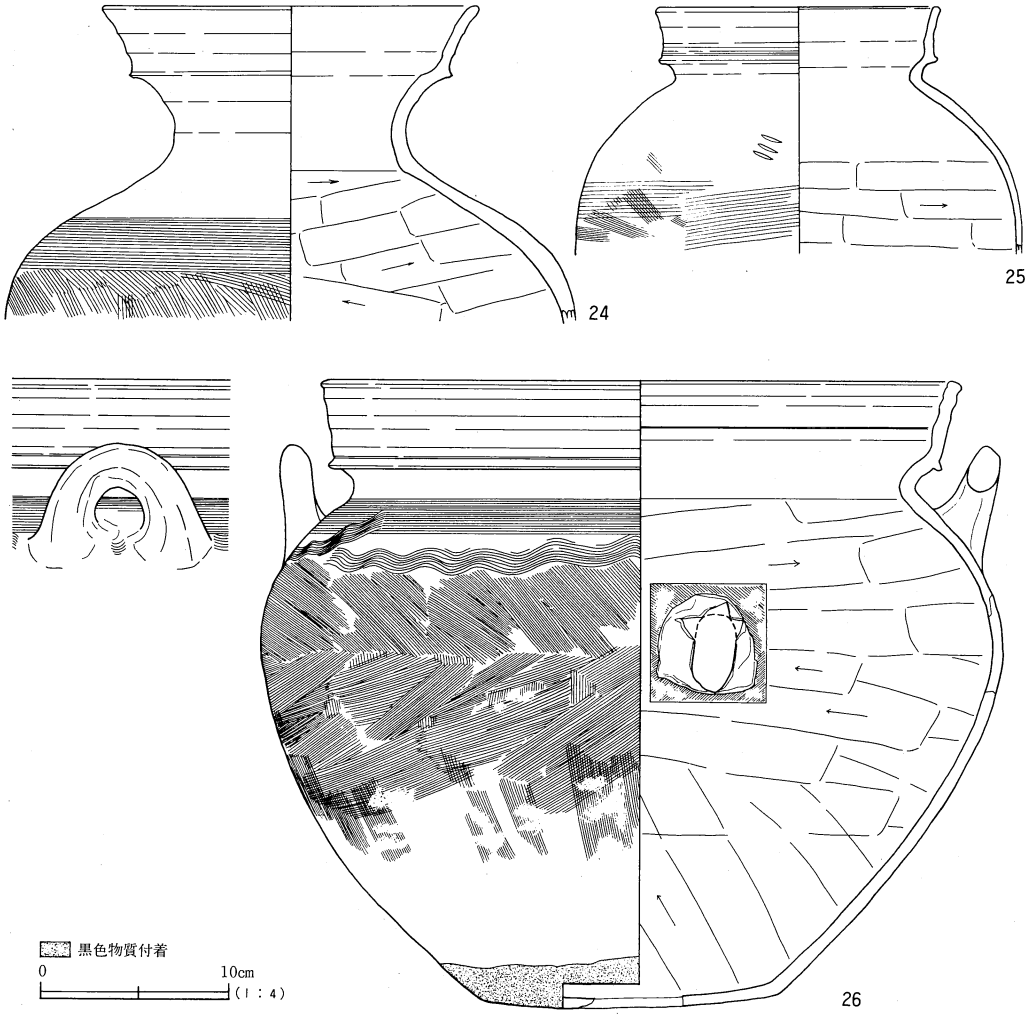
第25図　1～3号溝出土遺物図



第26図　1・2号墳出土遺物図

〔法量（　）は推定値〕

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・焼成・色調・遺存状態
2号墳 表土	20	大型壺		大型厚手の壺。口縁端部破片は外反し角張っておわるもの。頸部下位に木口状工具による細く浅い刻み目を施文。	頸部外面ナデ、内面頸部下位横方向の細かい目のハケメ調整。肩部外面横方向のハケメ、内面右上方向のヘラケズリ。	2～3㎜大の砂粒を比較的多量に含む。雲母めだつ。 焼成普通かややあまい。 淡黄褐色。断面黒灰色。 頸部1/12。
2号墳 周溝埋土下層	21	小型甕	口径(11.6)	口縁部は強く外反する複合口縁。端部は外側に丸い。屈曲部の稜は長く外下方にのびる。	口縁部内外面ヨコナデ3単位。肩部外面ハケメ、内面右方向のヘラケズリ。	1㎜大の砂粒を含む。 焼成ややあまい。 淡褐色。 口縁部2/3。
2号墳 表土	22	高　坏	口径(20.8)	坏体部は丸味をもち、口縁部で外反して開く。端部は丸い。坏底部外面小円孔を穿つが孔中央は突出する。	口縁部外面ヘラミガキと思われるが単位不明、内面横方向のヘラミガキのちナデ、ヘラケズリ痕残す。坏底部外面ヘラケズリのち縦方向のヘラミガキ、円板充塡のちナデて凹み、その後小円孔。内面ヘラミガキのちナデ仕上げ。	2㎜以下の砂粒を比較的多量に含む。 焼成良好。硬質。 暗黄褐色。 口縁部1/16、坏底部完存。
2号墳 周溝	23	鼓　形 器　台	口径　18.8 脚径　18.0 器高　11.3	やや小型。上台と脚台の大きさに差がない。口縁端部・脚端部とも外方に折れて横にのびる。筒部は強いヨコナデにより稜をつくるが鋭いものではない。器面は粗雑で歪つなかんじ。	口縁端部内外面ヨコナデ。口縁部内面横方向のヘラミガキ。上台部内面ヘラミガキのちナデ仕上げ、単位不明。脚端部内外面ヨコナデ。脚台部内面右方向のヘラケズリ。	1～2㎜大の砂粒を比較的多量に含む。1㎜以下の細砂粒を多量に含む。 焼成普通。 淡黄褐色。 上台部1/4、脚台部3/4。



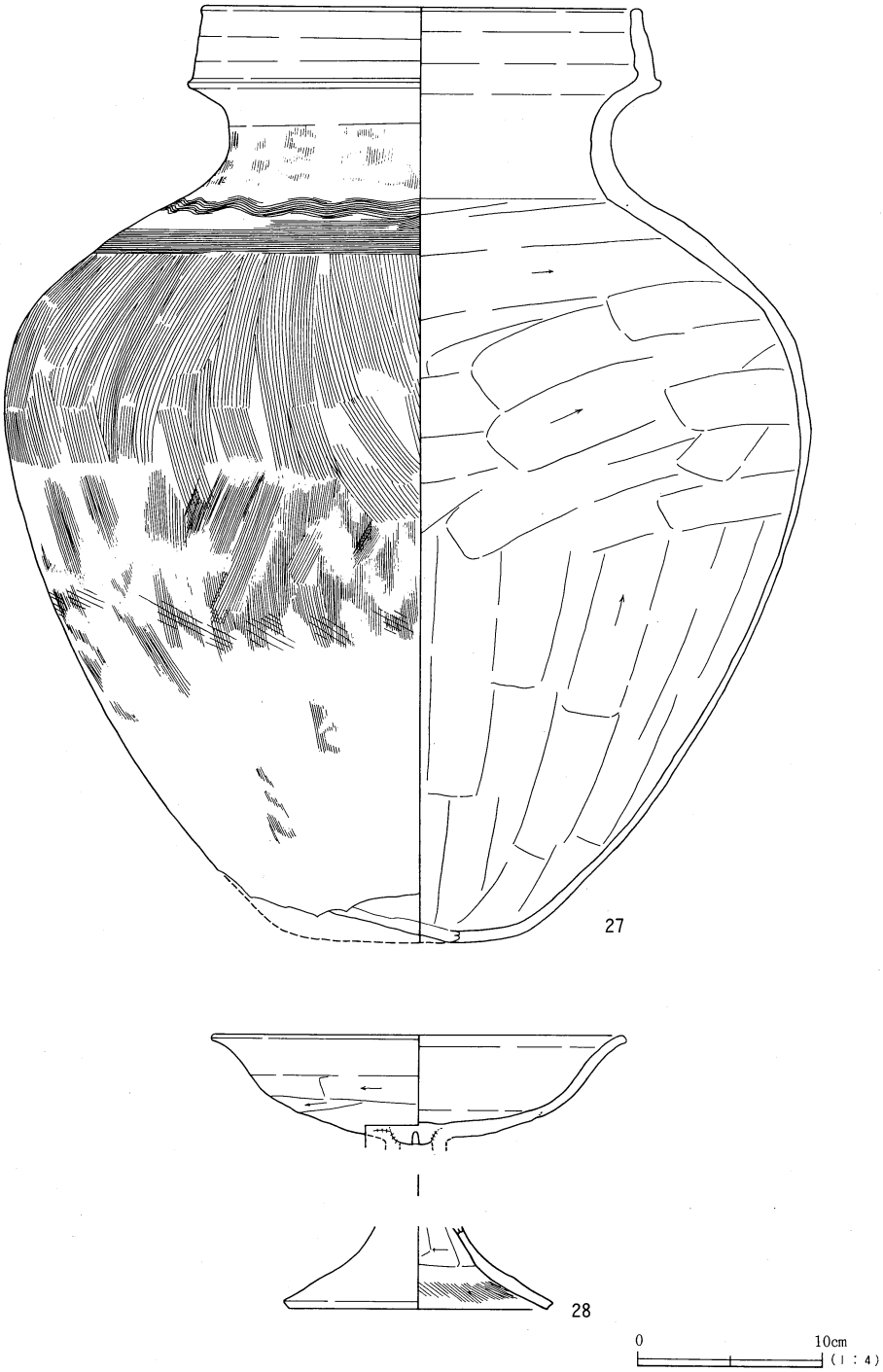
第27図　3号墳出土遺物図1

〔法量（　）は推定値〕

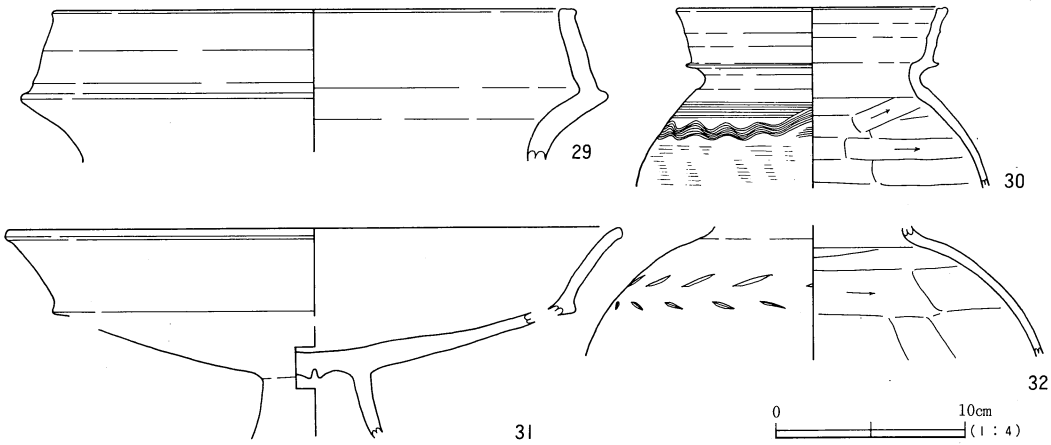
出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・焼成・色調・遺存状態
3号墳 周溝	24	壺	口径　19.4	口縁部は強く外反する複合口縁で端部は丸い。屈曲部の稜は小さく突出する。頸部は細くしまり、肩の張りは強い。やや厚手。	口縁部内外面ヨコナデ、ヨコナデの3単位不明瞭。外面肩部横方向のハケメ、胴部斜め方向のハケメ、ハケメは粗い目で粗雑。内面肩部右方向のヘラケズリ。	1～2㎜大の砂粒をわずかに含む。1㎜以下の細砂粒を多量に含む。 焼成普通。 淡黄褐色。口縁部一部黒斑有り。 口縁～頸部4/5、肩部2/3。
	25	甕	口径(14.6) 最大胴径 (23.5)	口縁部は直立気味に外反する複合口縁で、端部はやや角張る。屈曲部の稜は水平方向に突出する。肩部外面に木口状工具による刻み目が3本ある。	口縁部内外面ヨコナデ2単位。屈曲部上面に櫛描沈線状の細かい擦痕が残る。体部外面横～斜め方向のハケメ調整のち肩部ナデ仕上げ、内面右方向のヘラケズリのち肩部丁寧なナデ。	1㎜大の砂粒をわずかに含む。 1㎜以下の細砂粒を比較的多量に含む。 焼成普通。 淡黄褐色。 口縁部3/5、肩部1/2。

〔法量（　）は推定値〕

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・焼成・色調・遺存状態
3号墳 周溝内埋葬 施設　棺蓋	26	把手付 甕	口径　32.8 最大胴径 39.0 底径　15.7 器高　33.3	口縁部は外傾する複合口縁で、端部は外側に面をなして丸く膨らみをもつ。屈曲部の稜は外下方に鋭くのびる。体部は最大胴径位が高位にあり、底部まで直線的にすぼまる。肩部に貝殻腹縁による櫛描平行線帯→波状文帯がめぐる。底部は縁の丸い大きな平底。肩部の相対する位置に環状の把手が上向きにつく。焼成後の穿孔が胴部と底部に施される。	口縁部内外面ヨコナデ、内面端部に2条凹みがはしる。外面肩部左上方向からのハケメ、体部下半縦方向のハケメのち胴部乱方向の斜めのハケメ、ハケメは非常に細かい目。底部周辺は磨滅のため調整不明。内面体部下半左方向、上半右方向のヘラケズリ。 把手は櫛描施文後に棒状粘土を差し込んで装着し、接合面のまわりに粘土を補強する。その後もとの施文を重なるように把手の左右両側に平行線帯と波状文帯を重ねてうまくつけている。	1㎜大の砂粒少量含む。1㎜以下の細砂粒を多量に含む。 焼成ややあまい。 淡桃黄褐色。 完形。 底部外面、高坏坏部の合わさっていた部分が黒ずんでいる。接着剤の痕跡の可能性がある。
棺身	27	大型壺	口径　23.5 最大胴径 43.8 底径　13.7 器高　50.9	口縁部は内傾し、端部はやや角張る。屈曲部の稜は厚く突出する。頸部は器高に比して短く、体部は肩の張る倒卵形。底部は縁の丸い大きな平底をもつ。肩部貝殻腹縁による平行線帯を施して、波状文帯をめぐらせた後最後を平行線帯に重ねている。底部焼成後の穿孔約11×19㎝。	口縁部内外面ヨコナデ。外面頸部～肩部上から下への縦方向のハケメのち施文のためナデ消し。体部下半非常に細かい目の縦方向のハケメ後、下位はナデ消して仕上げる。胴部に幅広のハケメが同じ高さに認められる。内面体部底部からの上方向のヘラケズリのち肩部右方向のヘラケズリ。	2㎜大の砂粒を少量含む。 焼成ややあまい。 黄褐色。棺蓋がかぶさっていた部分は褐色に変色している。 完形。
棺穿孔部 被覆土器	28	高　坏	口径　22.0 脚径　14.0	坏体部は丸味をもち、口縁部でゆるやかに外反する。口縁端部カットされ小さく角張る。脚部との接合は円板充塡式で、坏底部内面の脚部分は凹む。坏底部外面小円孔穿つ。脚部はゆるやかに外方へ開き、脚端部はカットされ面をもつ。全体のつくりは粗雑で器面が平滑でない。	口縁部内外面ヨコナデ。坏部外面部分的に逆時計まわりのヘラケズリ様の痕残る、内面ヘラミガキのちにナデ仕上げと思われるが単位不明。脚部外面ナデ、ヘラミガキの有無不明。	1㎜大の砂粒を少量含む。1㎜以下の細砂粒を比較的多量に含む。 焼成不良。 淡黄白褐色。 坏部完形、脚部4/5。
5号墳 南西隅表土	29	大型壺	口径(27.2)	口縁部は内傾し、端部は平坦面をなして外側に肥厚する。屈曲部の稜は水平方向に厚くのびる。同一個体の破片では頸部下位に木口状工具による羽状文、肩部には浅い櫛描沈線帯で画した間に刻み目を2段交互に施文している。同一個体の底部は縁の丸い大きな平底を呈し、底部中央は焼成後の穿孔の可能性がある。口縁部の器壁は厚いが、体部破片は薄い。	口縁部内外面ヨコナデ。体部外面非常に細かい目の縦方向のハケメ調整。肩部内面左方向のヘラケズリ。	1～2㎜大の砂粒を比較的多量に含む。 焼成あまい。 淡橙黄褐色。 口縁部1/12、底部ほぼ完存。体部破片全体の約1/10。
5号墳 周溝埋土	30	甕	口径　14.0	口縁部は外傾し、端部は内側に面をなして凹む。屈曲部の稜は鋭い。肩部櫛描平行線帯→波状文を施文。	口縁部内外面ヨコナデ。肩部外面横方向のハケメ、内面右方向のヘラケズリ。	2㎜大の砂粒を比較的多量に含む。茶色粒子を含む。 焼成普通。 黄褐色。 口縁～肩部1/2。
5号墳 南西隅	31	高　坏	口径　32.1	稜をもつ大型の高坏。口縁部は外反して端部は外側に丸くおわる。脚部太い。	磨滅して調整不明。坏底部内面ヘラミガキ後ナデ、脚部との接合は円板充塡式で、その後にナデが施されている。	細砂粒を多量に含む。 焼成不良。 暗黄白褐色。 口縁部1/6、坏底部～脚部上半完存。



第28図　3号墳出土遺物図2



第29図　5号墳・1号土壙墓出土遺物図

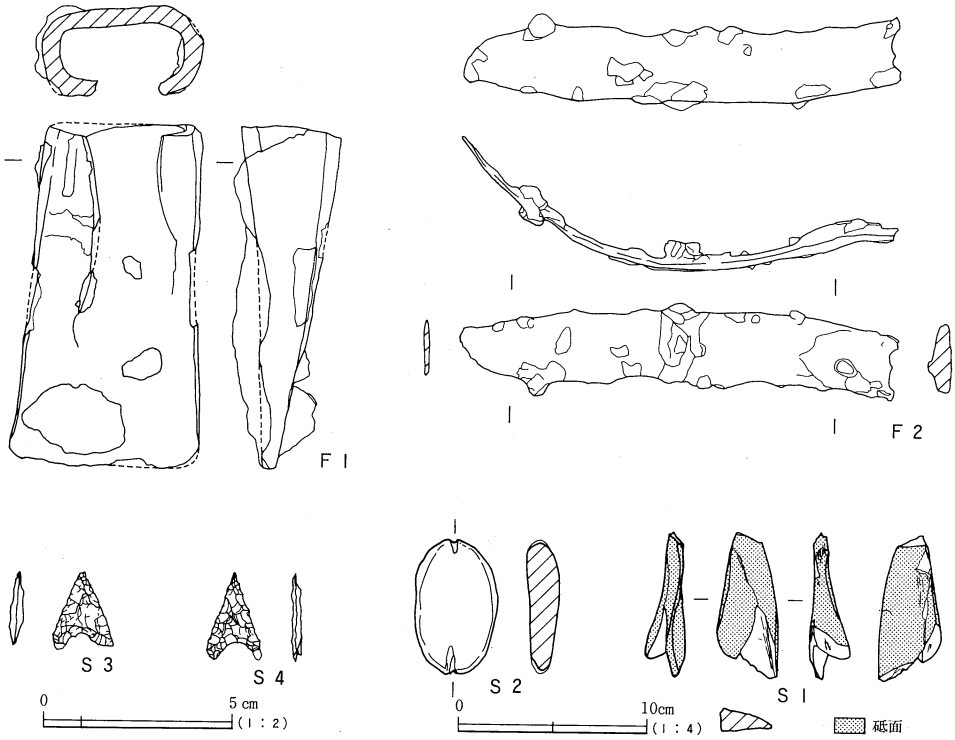
土壙

〔法量（　）は推定値〕

出土位置	No.	器種	法量(cm)	形態	手法	胎土・焼成・色調・遺存状態
1号土壙	32	甕		肩部片。木口状工具による羽状文を有す。	外面磨滅、内面右方向のヘラケズリ。	1～2㎜大の砂粒を少量含む。 焼成普通。 桃橙褐色。 肩部1/10。

鉄器・石器

出土位置	No.	種類	大きさ(cm)	特徴
1号墳	F1	鉄斧	全長 9.1 刃幅 5.1 厚さ 2.7	袋部は楕円形で内径3.3×1.8cm。刃部は台形気味。
2号墳 2号主体部	F2	鉄製刀子	残存長 11.5 刃幅 1.7 厚さ 0.2	板状で非常に薄い。刃部完存し茎部欠損。関は不明。刃部中央で折れ曲がる。
土壙墓群 1号溝東 上層埋土	S1	砥石	残存長 7.6 最大幅 3.2 最大厚 2.1	二つに割れ、両端を欠損していたが、ほぼ形を留めている。断面三角形状で磨面は3面。辺にも磨面を認める。2面は大変良く研磨され、側面には擦痕が残る。下割面にも擦痕がある。
土壙墓群 5・6号土壙墓 上層埋土	S2	石錘	全長 7.0 最大幅 4.3 最大厚 1.7	扁平な石の両端部を両面より切り込む。表面滑らかで光沢をもつ。重量49g。



第30図　鉄器・石器遺物図

石鏃計測表

(長・幅・厚：mm，重：mg)

出土位置	No.	種類	基部形	基部の細部調整	調整	整形	中央断面形	欠損部	尖端	長さ	幅	厚さ	重	石　材
土壙墓群 1号土壙墓 底部	S 3	石鏃	極凹	薄両	両面	非極	菱形	尖端部 脚端部	◎	(19.0)	16.0	3.5	600	安山岩質
4号墳 周溝SW区 上層埋土	S 4	石鏃	極凹	厚両	両面	非極	平凸	脚端部	◎	22.5	14.0	3.0	550	黒 曜 石

略号及び用語解説

1．基部形

極凹形：凹み部の長さに対してその深さが9分の1より大きくなるもの

凹　形：凹み部の長さに対してその深さが10分の1から20分の1のもの

直線形：凹み部及び突出部の幅に対して、その深さもしくは高さが20分の1以下のもの

2．細部調整

薄両：薄形両面細部調整　厚両：厚形両面細部調整　厚表・平裏：厚形表面細部調整・平形裏面細部調整　平形細部調整：打撃角が25度以下　薄形細部調整：打撃角が25～55度　厚形細部調整：打撃角が55～70度

3．調整

両面：両面細部調整　片面：片面細部調整

4．整形

非極：平形及び薄形細部調整による整形

5．尖端

◎：特に鋭い　○：鋭い　×：鋭くない

6．（数字）は残存部の大きさ、重さを示す

7．石材は肉眼による識別

土器はできる限り図化をはかった。土壙墓群出土土器の器種構成をみると、注口土器・壷・大型壷・甕・鼓形器台・台付埦がある。図化できなかったものでは大型高坏坏部片と注口土器2個体がある。注口土器については4個体はあったことになり、5号土壙墓と6号土壙墓で1個体ずつ出土していることから、一般的な器種ではないだけに注意される。

壷甕類のうち6号土壙墓棺上出土甕5は、口縁部のヨコナデ成形の明らかな外反の強い複合口縁であるが口縁部・体部ともに調整はヘラミガキである。肩部の文様も多条で振幅の小さい古式の波状文であり、土井編[註)]年の上種第5貯蔵穴7号・住居址27号期に比定される。甕底部1も同型式で、当遺跡では1・5より古いものは出土していない。

全形を知りうる1号溝出土壷8・9は、口縁部ヨコナデの単位はまだ2単位で、肩部には振幅の長い波状文を施文し、体部は縦方向主体のハケメ調整で底部は平底を留めている。8は口縁部が直立し底部は尖り気味と形態変化があり、肩部に体部下半とは別の粗い目のハケメを左上方向から施している点で、一括遺物ながら後出的特徴をもっている。擲塚第2号貯蔵穴期に比定される。その他の壷甕類の口縁部も口縁部外面に櫛描沈線状痕を残し、東高江2号貯蔵穴～擲塚第2号貯蔵穴期におさまるものである。

古墳群出土土器について遺存していたものの器種構成をみると次のようになる。

1号墳：大型壷・高坏・小型器台

2号墳：大型壷・甕・高坏・鼓形器台

3号墳：壷・甕

3号墳土器棺墓：大型壷・把手付甕・高坏

4号墳：甕

5号墳：大型壷・甕・高坏

土壙墓群も含めて4号墳以外のどの古墳も大型壷を伴っていることは供献土器か棺使用かは別として葬送儀礼を考えるうえで興味深い。以下、特徴的な個々の遺物の時期について説明を加えたい。

1号墳出土土器には小片ながら小型器台受部18があった。器形・胎土からみて搬入品ではない。小型三種土器を受容後に当地で作成したものであり、受部と脚部との接合がすでに円板充塡式へと形態変化しており、宮ノ下4・6号住居址期以降と考えられる。2号墳出土鼓形器台23は上台部端部・脚端部ともに外方に折れてはいるが、端部は角張らず丸く終わっている。筒部径は太く、上下の稜は突出しないで粗雑なつくりとなっている。これらを定形化前の古い要素とみたい。少なくとも擲塚第5号住居址期よりも古い。3号墳土器棺墓の26・27は、大型厚手で大きな平底を残している。未だ棺専用の特徴が顕著ではなく、体部は最大胴径位の高い比較的薄手に仕上げている。27は体部縦方向のハケメ、26は肩部に左斜め方向のハケメが施されることから、宮ノ下4・6号住居址期に併行すると考えられる。肩部の施文は櫛描平行線と波状文であるが、5号墳29は平行線に羽状文、2号墳20は羽状文と新しい

文様構成へと変化しさらに大型化している。大型で浅い高坏は宮ノ下４・６号住居址期ではヘラミガキ調整を主とする。28は坏底部が平坦で器形的には新しいが、ヘラミガキが不明瞭で坏底部と口縁部の境に粘土の接合痕が残り、外面にヘラケズリ痕跡を認めるといった粗いつくりである。これらは古い要素の可能性もあるが、脚部のゆるやかな広がりから一応、宮ノ下４・６号住居址期を考えた。２号墳高坏22は３号墳28と大きさ・形とも差異はない。ところが、柱状部内面の円板充塡後のナデ調整が22・31で認められた。この時期に特有の技法であるのか地域性によるものか検討を要するものである。

註　土井珠美　「鳥取県下の状況」『弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について』　第18回埋蔵文化財研究会事務局　1986年

Ⅳ　鑑　定

ニタ子塚遺跡１号墳周溝内埋葬施設より検出されたウシの骨について

鳥取大学医学部解剖学第２講座
井　上　貴　央

１．はじめに

倉吉市ニタ子塚遺跡の古墳群からは、１～５号墳の５基の古墳が検出されている。このうち、１号墳は最も大きい方墳で４世紀前半代のものと考えられているが、この古墳の周溝より獣骨が検出された。獣骨は鳥取大学医学部法医学教室の井上晃孝助教授を経て筆者に同定を依頼されたものであって、筆者自身現地で確認したわけではない。一部の骨は図面に描かれ実測されていたが、一括して取り上げられた骨や歯も多数あった。検出した骨は形状からウシの骨と同定した。

鳥取県内で古墳の周溝から動物の骨が検出された例としては長瀬高浜遺跡７号墳のウマ、同遺跡24号墳のウシの例があるが、類例は多くない。本稿ではその重要性にかんがみ、検出骨の記載を中心に同定結果について述べる。

２．検出状況と検出骨

１号墳の北西側の周溝より検出されたものであるが、ウシの骨を埋葬した時の掘り方は明らかではない。検出時の図面をみると頭蓋は主体部の長軸方向と直角な方向に前後をむけて上顎・下顎が鉗合状態で検出されている。後の検討結果からこの顎骨は左側のものであることが明らかになったが、図面に描かれていない左側の歯牙も検出されている。また、右側の下顎骨及び下顎歯は一括取り上げされたものの中に含まれていた。検出された骨は何れも頭部のものであって、椎骨、肋骨、骨盤、四肢骨は検出されていない。

図面に描かれていた鉗合状態にある骨は左側上顎と左下顎骨であって、歯は舌側面を上に向けた状態で検出されていたことが確認できた。したがって、一括取り上げされた右側の歯

牙は図面より高い位置から検出されたものと思われる。

検出された左側下顎歯は、第１～第３前臼歯と第１～第３後臼歯、左側上顎歯は第２～第３前臼歯と第１～第３後臼歯である。また、右側下顎歯は第１～第２前臼歯と第１～第３後臼歯が検出されている。歯牙はいずれも永久歯であって乳歯は検出されていない。歯牙の咬耗は中程度に進んでおり歯根も完成していることから、埋葬されたウシは成獣の個体であったと推定される。

その他部位の同定にたえない骨片が数点あるが、いずれも頭蓋骨の一部であると思われる。

３．ウシの埋葬とその意義

頭蓋骨は骨質が薄く保存されにくいが、上・下顎が鉗合状態で検出されていることから判断して、ウシの頭部が埋葬されていたとみるべきであろう。また、四肢骨、頸、胸・腹部の骨はまったく検出されていないことから考えると、埋葬されたものはウシの頭部のみであって、体幹から切り離したウシの頭部を埋葬したものと考えて良い。すなわち、今回検出されたウシの骨は食物残滓として廃棄されたものではなく、何等かの意図を持って供献されたものとみることが出来よう。長瀬高浜遺跡７号墳の周溝からはウマの全身骨格が検出されている。また、同遺跡の24号墳の周溝からはウシの歯牙が３点検出されている。このウシの歯は周溝上面から検出されているので、供献とは断定できないが、今回検出されたウシの頭蓋は埋葬儀式に伴う供献動物遺体と判断していいように思われる。今後類例を待ちたい。

稿を終るにあたり、ウシ骨の検討の機会を与えられた倉吉市教育委員会の関係各位に御礼申し上げる。

４．まとめ

１）倉吉市ニタ子塚遺跡の１号墳の周溝からウシの頭蓋骨の一部と歯牙が検出された。

２）埋葬されたウシは成獣のものである。

３）検出されたウシは頭部のみであり、上・下顎が鉗合状態で検出されていることから体幹から頭部を外し、頭部を供献したものと考えられる。

５．参考文献

井上貴央（1983）「長瀬高浜遺跡より検出した人骨と動物遺体について」『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書VI』pp. 285-312.鳥取県教育文化財団

V　ニタ子塚６号墳

調査区の西側約50mの同一丘陵の尾根上、標高約69～72mに立地する前方後円墳である。この古墳は開発地区外であったが、ニタ子塚遺跡を解明する上で重要と考え、平板による墳丘測量を実施した。墳丘全長は41m、周溝と見られる平坦面を含めると約55m、主軸方向はN78°Eで前方部が西南西、後円部が東北東に向く。推定される後円部直径約26m・高さ３m、前方

第31図　ニタ子塚6号墳墳丘測量図

部幅約26m・高さ2.7mである。主体部は横穴式石室が後円部と前方部に1基ずつ合計2基確認された。後円部の石室を1号主体部、前方部の石室を2号主体部と名付けた。

1号主体部　後円部中央に位置し、主軸と直交して南側に開口する横穴式石室である。天井石、玄門石等の石材が露出しており、石室の長さは3m前後、幅は2m前後と推定される。羨道部若しくは前庭部と推定される平坦地が、長さ約4m・幅約2mにわたって残存する。

2号主体部　前方部中央に位置し、主軸と平行して西側に開口する横穴式石室である。天井石が露出しているが、石室の規模は不明である。羨道部若しくは前庭部と推定される平坦地が約2m四方残存する。

この古墳は、前方部が開き、前方部と後円部の比高差がほとんどない。主体部が横穴式石室である。以上の2点から概ね6世紀代の築造と考える。

(註)　研究者の間ではこの古墳は、津原古墳あるいは半坂3号墳と名付けられていた。しかし、津原は大字の名称で範囲が広く、また半坂3号墳の名称は、そもそも半坂地内に古墳がなく不適切である。この古墳は以前から存在が知られており、小字のニタ子塚という地名は当古墳を示していると考えられる。このためニタ子塚古墳と呼ぶのが妥当であるが、今回発掘したニタ子塚遺跡の遺跡名と混同を招く恐れがあり、ニタ子塚6号墳と名付けることとした。

参考文献
野田　久男　「津原古墳」『前方後円墳集成・中国四国編』　山川出版　1991年

Ⅵ　考　察

土壙墓群について

時期　時期決定の判断材料になる遺物が出土したのは、3・5・6号土壙墓と1・2号溝のみである。このうち、3号土壙墓出土の甕底部片1、6号土壙墓出土の甕5は上種第5遺跡7号貯蔵穴・27号住居址段階[註1)]（以下、上種第5）に比定される。1号溝出土の壷9や2号溝出土の壷13はこれより1型式新しく、東高江2号貯蔵穴段階（以下、東高江2号）に比定される。また同じく1号溝出土の壷8、5号土壙墓出土の器台3は更に1形式新しい擲塚2号貯蔵穴段階（以下、擲塚2号）に比定されるものであった。

このように3形式の土器が出土しており、他の遺構もこの範囲内に納まるものと考えられる。この上種第5～擲塚2号という時期は畿内の庄内期と並行する時期で、あえて実年代を当てはめるならば3世紀後葉から3世紀末、弥生時代から古墳時代への移行期にあたる。

個々の遺構については、5・6号土壙墓出土遺物は供献遺物のためそのままの時期と考えて良かろう。しかし3号土壙墓出土遺物は埋土への混入のため、近くにあったそれ以前の古い時期の遺物が入ったものと考えられる。その他の遺構の時期については特定できない。

立地　本土壙墓群は標高74m、遺跡内の最高所付近に立地しており、水田面との比高差は約60mある。採石事業のために削られた南東の尾根と１～６号墳が並ぶ尾根との合流点にあたる。西側は丘陵が入り組んでいるが、東側は開けており、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡が点在する立縫遺跡群[註2)]を見晴らすことができる。調査前の分布踏査では、その立地条件とこんもり盛り上がったような地形から古墳の可能性が指摘されていた。

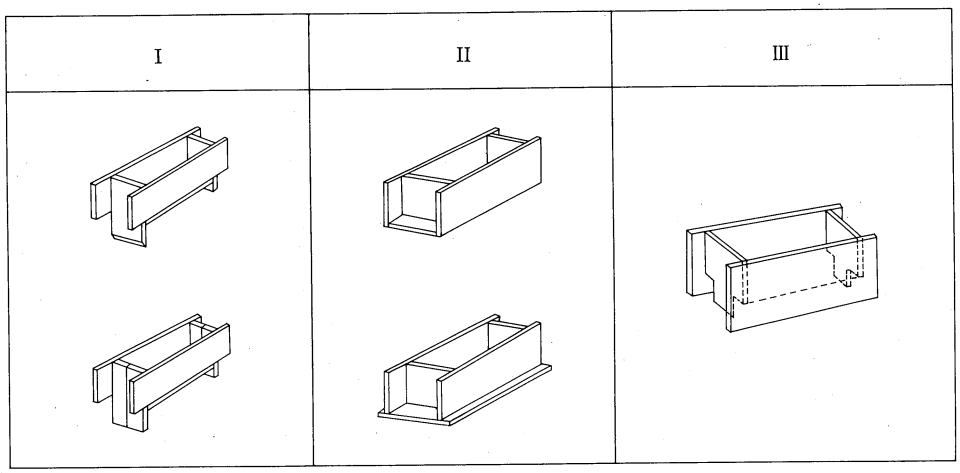
このような丘陵頂部に営まれた土壙墓群としては、県内では鳥取市桂見土壙墓群[註3)]や鳥取市西桂見土壙墓群[註4)]などが知られており、弥生時代後期後半に散見される。そして、このような土壙墓群は多くの場合これに続く前期の古墳が同一丘陵上に造られるようである。

墓域の区画　本土壙墓群の特徴は溝によって３方を区画されている点にある。このように土壙墓群に区画施設を持つ例としては桂見土壙墓群や関金町泰久寺中峯土壙墓群[註5)]が挙げられる。桂見土壙墓群は墓域を整地し周囲の一部を石列で区画したもので、泰久寺中峯土壙墓群は墓域の一部に鋤先状に貼り石をして区画したものである。本土壙墓群のように溝によって区画される例は、県内では西桂見土壙墓群で２つの土壙墓群を仕切るための溝が検出されている以外は知られていない。少し視野を広げると兵庫県豊岡市の立石墳墓群103号地点[註6)]を類例としてあげられよう。ここでは、浅い直線的な溝で２方を区画された一群やカスガイ型の溝で区画された土壙墓などが検出されている。また、時期も庄内期とされており共通点が多い。

溝　本土壙墓群を区画する３方４条の溝は、長さ、深さ、形態、主軸方向に於いて大きく異なっており、古墳やいわゆる方形周溝墓[註7)]に見られる周溝、後ロ谷墳丘墓[註8)]に見られるような区画溝とは様相を異にする。以下、溝に関して若干の考察を加えてみたい。

１号溝は土壙墓群の北を区画する溝である。しかし、両端の折れ曲がるカスガイ型の形態や７号土壙墓との位置関係から考えると、土壙墓群を区画する以上に７号土壙墓との密接な関係が想定される。溝中央の供献台は溝底から10cm以上浮いた位置で検出されており、溝がある程度埋まってから設置されたと考えられる。このため、出土したまとまった量の土器は７号土壙墓の葬送儀礼として供献されたものではなく、ある程度時間をおいてから土壙墓群全体に対して供献された可能性もある。２号溝は土壙墓群の西を区画する溝である。溝としては非常に浅いもので、溝底の土壙墓群側に用途不明の小溝を持つ。また、この溝は４条の溝の中で唯一土壙墓群の主軸に合う溝であり、中心となる４号土壙墓との関連が強いと考えられる。３号溝は２号溝と同様に土壙墓群の西を区画する溝であるが、２号溝の延長線上に位置しない。また形態も大きく異なっており、２号溝とは全く別の性格を持ったものと考えられるが詳細は不明である。４号溝は土壙墓群の南を区画する溝である。形態に大きな特徴はないが、２号溝よりかなり深く、主軸が３号溝同様土壙墓群の主軸と合わない。これは、３・４号溝が墓域の南東方向への拡張に伴って設けられたためか、当初から個々に何等かの特別の役割をもって設けられたためであろう。

このように本土壙墓群を区画する溝は単に「溝」とするには問題が多い。しかし、１・２・



『河内地域の弥生時代木棺の型式と変遷』より抜粋

第32図　木棺型式

3号溝から同一個体の大型甕片が出土しているので、少なくともこれ等の溝は同時に存在し、墓域を区画していたことは間違いない。

埋葬形態　今回の調査では10基の土壙墓が検出されたが、その埋葬形態は多種多様であった。大きく、木棺痕跡が検出されたものとされなかったものに分かれ　されたものは更に木棺形態によって分かれる。更に祭祀形態によっても分かれる。

まず、木棺形態による分類をしてみたい。本土壙墓群の木棺は全て腐蝕して失われているため、平断面に残る痕跡からの分類となる。また、分類に当たっては沖積低地部で多くの木棺が出土している河内地域の分類[註9)]（図32参照）に従うこととした。検出された7基の木棺墓のうち、I型式に属するものは6・7号の2基、II型式に属するものは1・3・4・9号の4基、III型式に属するものは5号の1基である。I型式は墓壙底に小口痕跡を残すもので、7号は両側で6号は片側で検出された。II型式は墓壙底には木棺痕跡を残さないもので、棺の大きさの2段掘り（1・3・4号）や土層断面の立ち上がり（9号）によって推定される。III型式の墓壙底に小口痕跡と側板痕跡を合わせ持つもので、この型式は底板を持たない。5号は小口痕跡と側板痕跡の深さに差が無いものだが、一般に小口痕跡の方が深いものが主流である。

以上3型式の木棺が使用されているが、段の在り方など細かな点を見ると個々に異なる特徴を持っている。この中で、規模の大小はあるが、唯一全く同じ特徴を持つのが3・4号である。この3・4号は位置・規模・掘り方・主軸方向からみて、土壙墓群内の中心主体と見られる土壙墓である。3・4号の特徴は3段掘りという珍しい掘り方を持つ点にある。下段はおそらく木棺掘り方であろうが中段にはどのような意味が有るのだろうか。このような掘り方を持つ類例は時期は異なるがイザ原11号墳[註10)]の主体部に見ることができる。この主体部は一部3段掘りの木棺墓で、中段の縁辺部には蓋を密閉するための灰白色粘土が詰められてい

た。つまり、中段の掘り方は蓋を納めるためのものということになる。3・4号では粘土では無く炭化物が検出されたが性格こそ違え同様に蓋の縁辺部を示すものと考えて良かろう。

次に祭祀形態であるが、共通の特徴を持っているのは5・6号である。5・6号は掘り方の特徴は異なるが、T字状に接するのみでなく、標石を持ち、棺上に注口土器・器台などの遺物を供献するという共通の墓上祭祀を行なっており、密接な関係が想定される。このような祭祀形態は、出雲地方においては弥生時代後期以降一般的に行なわれているものであるが、[註11)] 県中部ではそれ程一般的なものではなく、阿弥大寺1号墓3号土壙墓[註12)]や泰久寺中峯遺跡の第11土壙墓で見られる程度である。

このような埋葬形態の違いは土壙墓群が存続する時期幅から見て、時期差によるものとは考えられず、階級・性別・年齢・家族（出自）等の違いによるものであろう。

以上、土壙墓群についての考察を思いつくままに書き連ねてきたが、この結果いくつかの特徴が見えてきたように思う。第一は比較的短期間に営まれたこと、第二は見晴らしの良い最高所に立地していること、第三は溝によって区画されること、第四は中心となる埋葬施設を持つこと、第五はグルーピングできるものも有るが多様な埋葬形態を持つことである。これ等の特徴から、本土壙墓群は弥生時代の後期後半に墳丘墓や土壙墓群という形で見られる首長墓的な集団墓の流れの最終段階のものと言えよう。

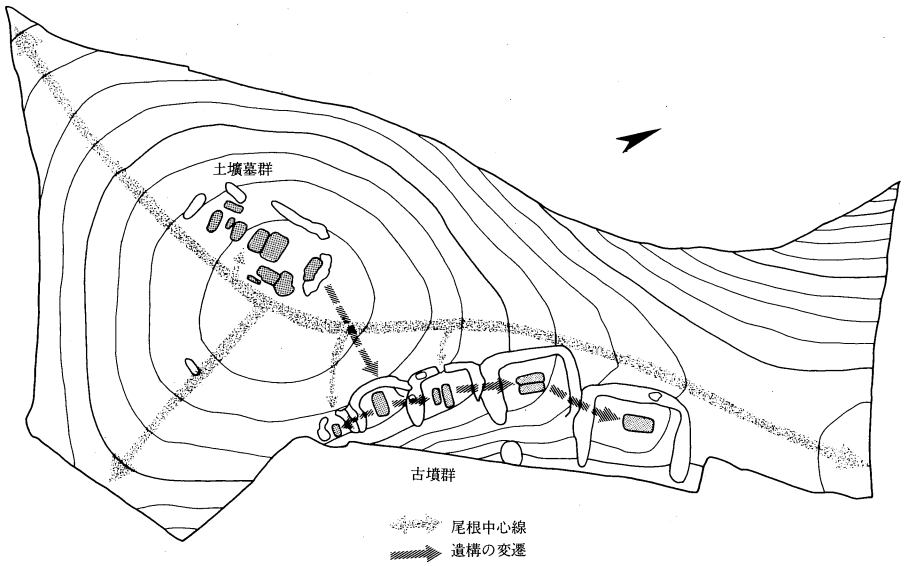
古墳群について

時期　5基とも主体部からの土器の出土が無かったため正確な時期を言うことはできないが、周溝内から出土したわずかな土器と周溝の切り合い関係から時期を推定してみたい。3号墳出土の甕25は口縁部の櫛描沈線をナデ消す古い特徴を持っているが、全体のプロポーションからみて宮ノ下4・6号住居址段階（以下、宮ノ下4・6号）に比定されるものであろう。また、3号墳の周溝内埋葬施設である土器棺や5号墳出土の甕30も宮ノ下4・6号に比定されるものである。2号墳は甕21・器台23から宮ノ下3B・7号住居址段階（以下、宮ノ下3B・7号）に比定される。1・4号墳は時期決定の判断材料となりうる遺物の出土が無いので、切り合い関係から考えてみたい。切り合いから見た築造順は次の通りである。

4号墳→3号墳→2号墳→1号墳
↘5号墳

これによると1号墳は2号墳より後に造られているので宮ノ下3B・7号以降ということになる。下限は不明だが大きな時期差はないと考えたい。4号墳は3・5号墳より先行するものであるから宮ノ下4・6号以前ということが言えよう。上限は古墳群が土壙墓群より後発のものであることから上種第5までは遡らないであろう。

以上のことから本古墳群は古墳時代前期、あえて実年代を当てはめるならば3世紀末頃から4世紀中葉にかけて連続的に造られたものと考えられる。



第33図　ニタ子塚遺跡遺構変遷模式図

立地　土壙墓群が標高74m付近の丘陵頂部に立地するのに対して、古墳群は土壙墓群からやや下った標高71～73mの丘陵東側の傾斜変換点に立地する。土壙墓群と古墳群中最古の４号墳とは直線距離で約12m離れている。大きく立派に見せたいという発想からすれば尾根上のなるべく高い位置に築造するのが普通である。しかし、この古墳群は土壙墓群の周囲に大きな余地が在るにも関わらず、土壙墓群を強く意識し、より低位に造られている。これは土壙墓群と古墳群との密接な関係を表わしている。おそらく、この古墳群は、土壙墓群の被葬者集団の直系集団が墓制の変化に対応し、祖先に対する畏敬の念を払いながら築いたのであろう。尾根から外れた斜面に造られたのも同様の理由と考えられる。３・５号墳の周溝に陸橋が残されていることから尾根上に墓道の存在が推定される(図33参照)。当然この道は古墳群の築造以前に土壙墓群にアクセスするために使われた道であったはずである。この道を壊さないためにあえて斜面に築いたのではなかろうか。２～５号墳が軸をほぼ揃えて築かれているのに１号墳だけ方向を変えたのも、そのまま続けると尾根上に上がってしまうからだと理解できる。また、１号墳の隣に古墳が造られなかったのは、尾根の鞍部にあたるのでスペースが無くなったためか、古墳の立地条件として要求されるものが変わったためだと考えられる。なお、東側の斜面に築かれたのは被葬者の集団が丘陵の東側に集落を形成しており、そこから眺望できる様にしたためだろう。

墳丘と周溝　墳丘の規模は南端の５号墳が最小で４・３・２・１と北にいくほど大きくなる。これは４号墳と５号墳との関係を除いて築造順によるもので、新しく造る度に規模を拡大している。５号墳が４号墳の後に造られたにもかかわらず規模が小さいのは、５号墳の主体部

の規模から考えておそらく子供の墓だったためと考えられる。墳形は他の県内の発生期古墳と同様に全て方墳だが、５号墳はかなりいびつな形である。また４号墳は１～３号墳に比べるとやや辺が丸みを帯びている。盛土は１号墳でわずかに残っていたのを除くとほとんど残っていなかった。しかし、主体部の削平状況から１～３号墳は数10cm以上の盛土があったと考えられる。これに対して４・５号墳は主体部の掘り方が深くほとんど削平を感じさせない。おそらく、周溝を掘った土を盛り上げた程度で、「周溝を持った土壙墓」といったイメージの墳墓であったであろう。このように１～５号墳では規模の拡大と共に墳形の定型化や盛土の増加といった変化が有ったと推定される。

周溝は全て尾根側の３方を囲いコの字状に巡る。新しい周溝はすでに有る周溝を意図的に切っており、強い同族意識が感じられる。発生期の古墳は主に地山の削り出しによって墳丘を造る例[註13]が多く、本古墳群のように周溝によって囲まれる例は米子市青木遺跡のＦ地区[註14]やＨ地区[註15]で見られる程度である。また、３・５号墳にある尾根側中央の陸橋状の掘り残しも青木遺跡FSX01[註14]に見ることができる。

主体部　盛土の残りが悪かったにもかかわらず、１・４・５号墳各１基、２・３号墳各２基、計７基の主体部が検出された。内訳は１号墳の主体部が竪穴式石槨、２号墳の１・２号主体部と４号墳の主体部が木棺墓、３号墳の１・２号主体部と５号墳の主体部が土壙墓であった。ただし、木棺痕跡が見つけられなかったため土壙墓とした主体部も、木棺墓であった可能性はあろう。３基の木棺墓を土壙墓群と同じ様に型式分類すると、小口・側板痕跡を持つ４号墳の主体部が５号土壙墓と同じⅢ型式、これに対して、２号墳の１・２号主体部は３・４号土壙墓などと同じⅡ型式であった。この違いが時期差によるものか、土壙墓群からのつながりによるものなのかは大変興味深い問題である。３基の木棺墓のうち２号墳２号主体部は、土壙墓群には見られなかった粘土が検出面と墓壙底で検出された。この内、墓壙底で検出された粘土については粘土枕として報告したが、鳥取市覚寺７号墳[註16]で見られるような板状の粘土枕とはかなり様相を異にするもので、若干大き過ぎる嫌いも有る。このため、枕ではなく、何等かの理由で棺上に置かれた粘土塊が崩落したものである可能性も示唆しておきたい。

主軸は１・２号墳が丘陵尾根筋に平行する東西方向、３～５号墳が丘陵尾根筋に直交する南北方向であった。頭位はあくまで推定の域を出ないが、１号墳主体部、２号墳１・２号主体部はそれぞれ小口の石積みの様子、副葬品の位置、粘土枕の位置から南、３・４・５号墳主体部は小口幅から西と考えられる。ここで２号墳から主軸が変わった理由を考えてみたい。主体部の頭位を意識して古墳群と土壙墓群を見ると、全て土壙墓群のある方向に頭位が向いているように見える。このことから、墳丘の１辺に主軸を合わせながら、土壙墓群に頭位が向くように方向を変えたというのは考えられないだろうか。つまり、１・２号墳になると土壙墓群からの距離が遠くなるので、頭位を西側にすると、土壙墓群の方を向かなくなる。そのため、主軸方向を振り替えて頭位を南側にしたということである。特に１号墳の主体部は

墳丘の角度が変わったこともあって土壙墓群の中心線に近い方向となっており、深い関係が有るように思われる。

副葬品は2号墳1号主体部で刀子が1点出土した。これは土壙墓群・周溝内埋葬施設も含めて全19基の埋葬施設中唯一のものである。この刀子は、出土時には3つに折れていたため気がつかなかったが、接合すると刃部が故意に大きく曲げられていることがわかった。このように故意に曲げられた鉄製品が副葬されていた例は、鳥取市桂見1号墳第1主体の鉄剣[註3)]、青木遺跡FSX04[註14)]の鉈の他、堤谷古墳群[註17)]など前期の古墳に見られる。山陰の弥生時代の墳丘墓や土壙墓にはほとんど鉄製品の副葬はなく、県内では阿弥大寺地区第11土壙墓の鉄刀[註12)]、西桂見土壙墓群の刀子[註4)]、鳥取市門上谷1号墓の鉄刀[註18)]、米子市岡成第9遺跡SX26の刀子[註19)]など数例があるが、何れも曲げられていなかった。また、古墳時代後期には多くの古墳に鉄製品が副葬されているが、管見によると意図的に曲げられたと考えられる例は見られない。よって、おそらく故意に曲げられた鉄製品を副葬するのは、古墳時代前期特有の葬送儀礼だと考えられる。

1号墳主体部の竪穴式石槨について　竪穴式石槨は前方後円墳の成立に伴い導入される。東伯耆地方で古墳時代前期の竪穴式石槨の例は、向山古墳群宮ノ峰19号墳（方墳・一辺27m　倉吉市小田）・21号墳（円墳・径30m[註20)]）、馬ノ山4号墳（前方後円墳・全長推定100m　羽合町橋津[註21)]）がある。宮ノ峰21号墳は石槨の長さが内法で4.6m、築造時期は出土遺物から4世紀前半代と推定される。馬ノ山4号墳は石槨の長さが内法で8.8m、出土遺物からおよそ4世紀中頃の築造と推定され、ともに長大な割竹形木棺が想定されている。それに比べ、ニタ子塚1号墳は古墳の規模が周溝を含め12.5mで、石槨規模は長さ2.4m、割竹形木棺の復元長さ1.8m、幅0.4mと小さい。しかも一般的な石槨で見られるように、板石を水平に積み上げ蓋石をするのではなく、基底石を立てた上に板石を木棺に立てかけるように持ち送っている。したがってニタ子塚1号墳は、古墳の規模から明らかなように首長級の墓ではなく、宮ノ峰19・21号墳といった首長級の古墳に竪穴式石槨が採用されてから後に、これを模して築造したと考えられる。1号墳の築造時期は、出土土器よりおよそ4世紀中葉の築造と推定される。また、上神猫山3次調査1号墳第3主体[註22)]は、木棺の両小口に丸く整形した板石を立て両側壁に一列に板石を並べている。これはニタ子塚1号墳の竪穴式石槨と直接結びつかないものの、割竹形木棺に板石を立てかけ囲う点で類似性が認められ、この古墳が築造された時期が土井編年・上神猫山段階であることは、ニタ子塚1号墳の築造時期を考える上で興味深い。

周溝内埋葬施設　周溝内の埋葬施設は3号墳より土器棺墓が、1号墳より牛墓が各1基検出された。

土器棺墓は県内では弥生時代前～中期の土壙墓中に散見される程度で、後期後半の墳丘墓や土壙墓群には見られない。それが古墳時代になると、鳥取市桂見2号墳[註3)]や会見町普段寺1号墳[註23)]など古い段階の古墳から、副次的な主体部や周溝内埋葬として一般化する。3号墳の土

器棺は土器型式から、その中でも初現的なものと考えられる。

周溝に埋葬されていた獣骨は、鳥取大学の井上貴央先生に鑑定していただいた結果（詳しくは第Ⅳ章参照)、牛の頭蓋骨の一部と歯牙であることがわかった。周溝内から牛の骨が検出された例は、羽合町長瀬高浜24号墳[註24]の他、大栄町上種14号墳[註25]がある。上種14号墳は６世紀後半の帆立貝式古墳で、頭蓋骨と肩胛骨が検出された。周溝内に獣を埋葬する[註26]のは、①被葬者の埋葬時に殉死させた、②古墳の被葬者が飼っていた動物が死んだために追葬した、③時期をおいて子孫が祖先に対して供献した、④被葬者には直接関係無く、獣を埋葬するのに古墳の周溝を利用した、などが考えられよう。このうち１号墳の牛墓は、周溝がかなり埋まってから掘り込まれており、１号墳の築造時とは隔絶した時期に造られたものと考えられることと、頭部を切り放して埋葬されたという鑑定結果を踏まえると、③の性格を持つものであろう。

以上、古墳群の時期・立地・墳丘・主体部・副葬品、及び土壙墓群との関係について検討を加えてみた結果、次のような、築造順に伴う遺構の特徴とその変遷過程が見えてきた。

①土壙墓群…丘陵頂部に小首長墓が造られ始める

②４号墳…丘陵の傾斜変換点に一墳一葬墓が造られ始める。

③３号墳…墳形が定型化し、墳丘が高くなる。

④２号墳１号主体部…鉄製品が副葬される。

⑤２号墳２号主体部…主体部に粘土が用いられる。

⑥１号墳…主体部が竪穴式石槨になる。

⑦１号墳以降…おそらく立地条件が変わり、離れた尾根上に造られるようになる。

このように本古墳群は徐々に「古墳」として完成されていくのだが、ここで一つの問題が浮かび上がってきた。それは調査時には「土壙墓群」に対する言葉として漠然と「古墳群」という用語を使ってきたが、果たして１～５号墳は「古墳」と呼んでいいのだろうかという問題である。特に４号墳は、庄内から布留への移行期という微妙な時期、斜面に立地する低墳丘、副葬品を持たない木棺墓など古墳とは呼べないような要素を多々持っている。そのため、「古墳」の他に「墳丘墓」・「方形周溝墓[註27]」と呼ぶべきだという考え方もあるように思う。この中で我々は土壙墓群と古墳群との間の遺構上の較差を重視し、集団墓から一墳一葬墓への移行の背景に弥生時代から古墳時代へのダイナミックな社会変化があったと捉え、１～５号墳を全て「古墳」と呼ぶこととした。ただし、これを以て結論とするのではなく議論の出発点として頂きたい。

おわりに

今回の調査では、弥生的な墳墓の最終段階である土壙墓群とそれに続く発生期の古墳を検出することができた。本市でも今までに多くの古墳が調査され、いくつかの弥生墳墓の調査もされてきたが、このようなケースは初めてであった。これは本市における古墳時代の始まりを考える上で非常に貴重な資料となった。また、ほとんど実態の解かっていなかった古墳発生期の小首長墓に初めてメスを入れる画期的な調査でもあった。しかし、このような貴重な遺跡の発掘機会を与えられたにも関わらず、その機会を十分に生かすことができなかったように思う。今後、この報告書が同様の遺跡を研究する際の基礎資料の一つとなれば幸いである。

最後に、末筆ながら調査の実施並びに報告書の作成にあたって、指導・協力・助言を頂いた方々に感謝の意を表したい。

註

(1) 土器編年及びその時期観については、全て参考資料１に発表された土井氏の編年試案による。

(2) 根鈴輝雄他 『立縫遺跡群VI 頭根後谷遺跡発掘調査報告書』 倉吉市教育委員会 1991年 なお、以下市町村名の無い遺跡は全て倉吉市所在の遺跡。

(3) 船井武彦 『桂見墳墓群』 鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団 1984年

(4) 前田 均 『西桂見遺跡II』 鳥取市教育委員会・倉見古墳群発掘調査団 1984年

(5) 日野琢郎 『泰久寺遺跡発掘調査報告―中峯地区―』 関金町教育委員会 1984年

(6) 塩崎 誠他 『北浦古墳群・立石墳墓群』 豊岡市教育委員会 1987年

(7) 弥生時代のいわゆる「方形周溝墓」として報告されている例は、米子市岡成第９遺跡のＳＤ―01～04（註19）がある。

(8) 森下哲哉 『大谷・後ロ谷墳丘墓発掘調査報告書』 倉吉市教育委員会 1986年

(9) 田中清美 「河内地域における弥生時代の木棺の型式と階層」『文化財学論集』 文化財学論集刊行会 1994年

(10) 根鈴輝雄 『イザ原古墳群・小林古墳群発掘調査報告書』 倉吉市教育委員会 1983年

(11) 東森市良 「山陰地方における弥生墳丘墓の展開と地域的特性」『山陰地方における弥生墳墓の研究』 島根大学法学部考古学研究室 1992年

(12) 眞田廣幸 『上米積遺跡群発掘調査報告―阿弥大寺地区―』 倉吉市教育委員会 1981年

(13) 鳥取市桂見１・２号墳（註３）、米子市日原６号墳（参考資料４）など。

(14) 船越元四郎他 『青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ Ｆ・Ｊ地区』 鳥取県教育委員会 1976年

(15) 船越元四郎他 『青木遺跡発掘調査報告書Ⅲ Ａ・Ｂ・Ｅ・Ｈ地区』 鳥取県教育委員会 1978年

(16) 松下利秀他 『覚寺古墳群』 ㈳中国建設弘済会覚寺古墳群発掘調査団 1990年

(17) 現在遺物整理中のため未発表。

(18) 原典にあたれなかったため、参考資料２による。

(19) 藤原裕子 『岡成第９遺跡』 米子市教育文化事業団 1993年

(20) 根鈴智津子 「向山古墳群宮ノ峰支群の発掘調査から」『文化財だより第22号』 倉吉文化財協会 1991年

(21) 大村俊夫 『山陰の前期古墳文化の研究Ⅰ 東伯耆Ⅰ・東郷池周辺』 山陰考古学研究所 1978年

(22) 倉吉市教育委員会編 『猫山遺跡第３次発掘調査報告書』 倉吉市教育委員会 1985年

(23) 原典にあたれなかったため、参考資料４による。

(24) 西村彰滋他 『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書VI』 鳥取県教育文化財団 1983年

(25) 馬淵義則他　『上種西古墳群発掘調査報告』　大栄町教育委員会　1984年

(26) 松井　章　「犠牲となった動物・霊を運ぶ動物」『日本の美術3　人物・動物埴輪』　至文堂　1995年

(27) 古墳時代のいわゆる「方形周溝墓」として報告されている例は、猫山遺跡・青谷町大口第2遺跡・米子市青木遺跡（註15）などがある。

眞田廣幸　『上神猫山遺跡発掘調査報告』　倉吉市教育委員会　1979年

松下利秀他　『大口遺跡群発掘調査報告（大口第2遺跡）』　青谷町教育委員会　1989年

参考資料（順不同）

1．土井珠美　「鳥取県下の状況」『弥生時代後期から古墳時代初頭のいわゆる山陰系土器について』第18回埋蔵文化財研究会事務局　1986年

2．山桝雅美　「因幡地方の弥生時代の墓とその様相」　平成6年度埋蔵文化財発掘技術研修会発表資料

3．長岡充展　「東伯耆地方の弥生時代の墓とその様相」　平成6年度埋蔵文化財発掘技術研修会発表資料

4．久保穣二郎　「西伯耆地方の弥生時代の墓とその様相」　平成6年度埋蔵文化財発掘技術研修会発表資料

調査前空中写真

（西より）

調査区空中写真

（西より）

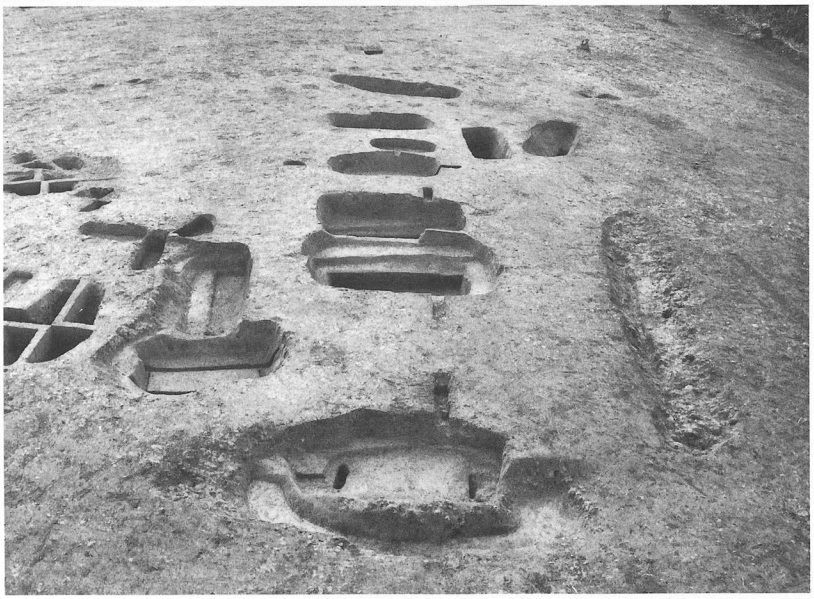
調査後全景

（南西より）

図版 2

土壙墓群検出状況

（北より）



土壙墓群完堀

（北東より）

１号土壙墓

（南東より）

2 号土壙墓

（南東より）

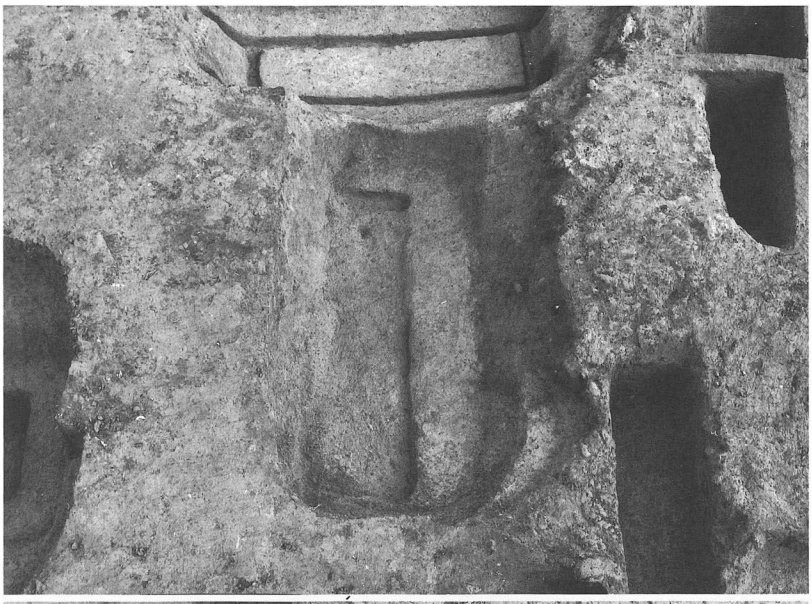
3 ・ 4 号土壙墓

（右）（左）　（北西より）

5 号土壙墓

（北西より）

図版 4

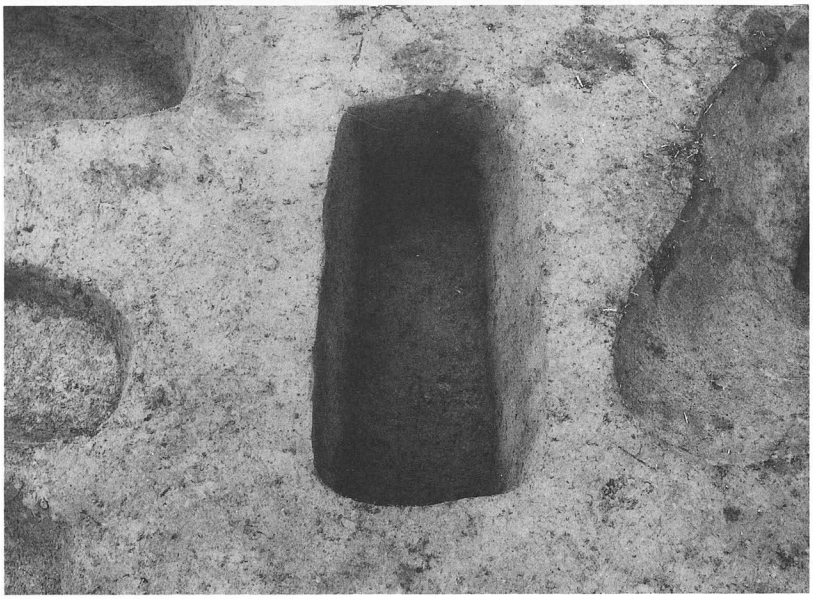


6 号土壙墓

（南西より）

8 号土壙墓

（南西より）

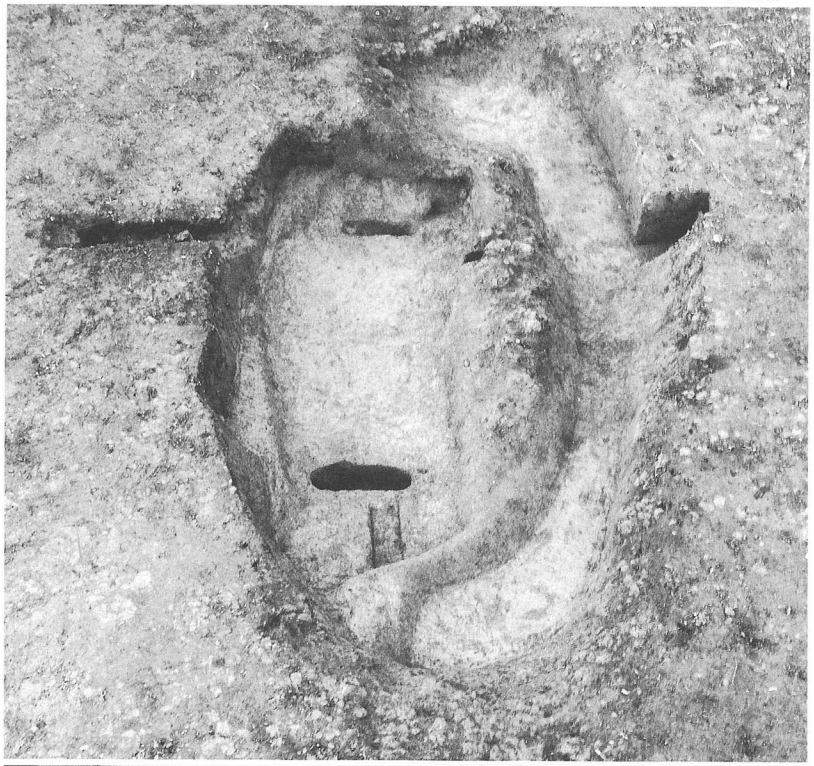


9 号土壙墓

（北東より）

7 号土壙墓・1 号溝

（南東より）



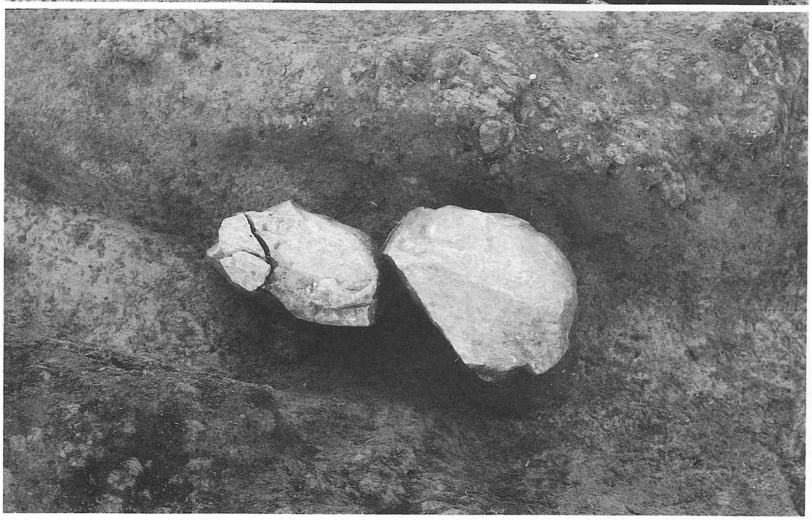
1 号溝遺物出土状況

（北より）

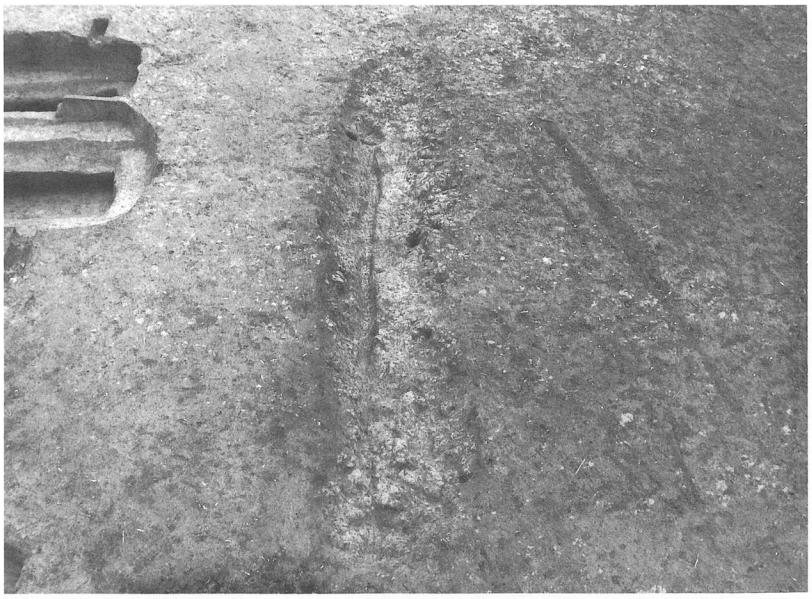
1 号溝供献台

出土状況

（北西より）



図版 6



2 号溝

（北東より）

3 号溝

（南西より）

4 号溝

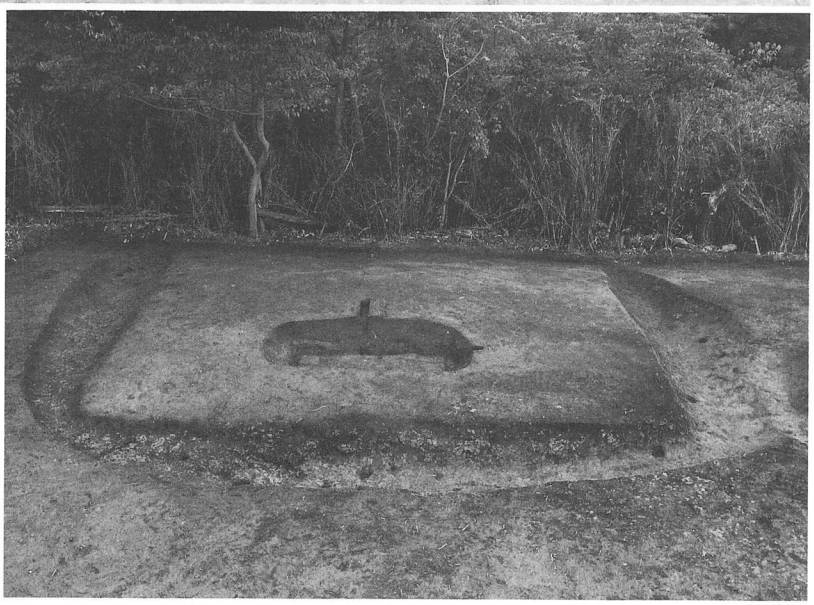
（南東より）

▲1～5号墳

（北より）

▶1号墳

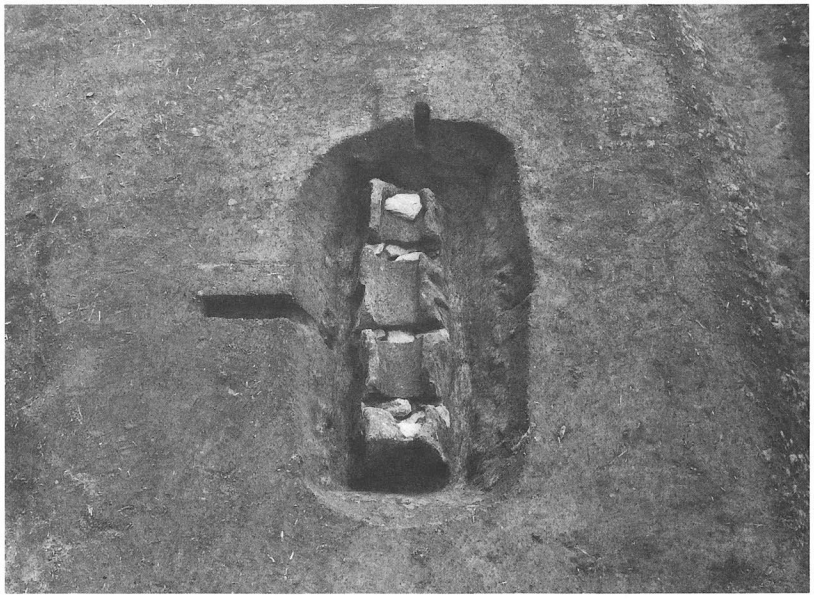
（西より）



図版 8

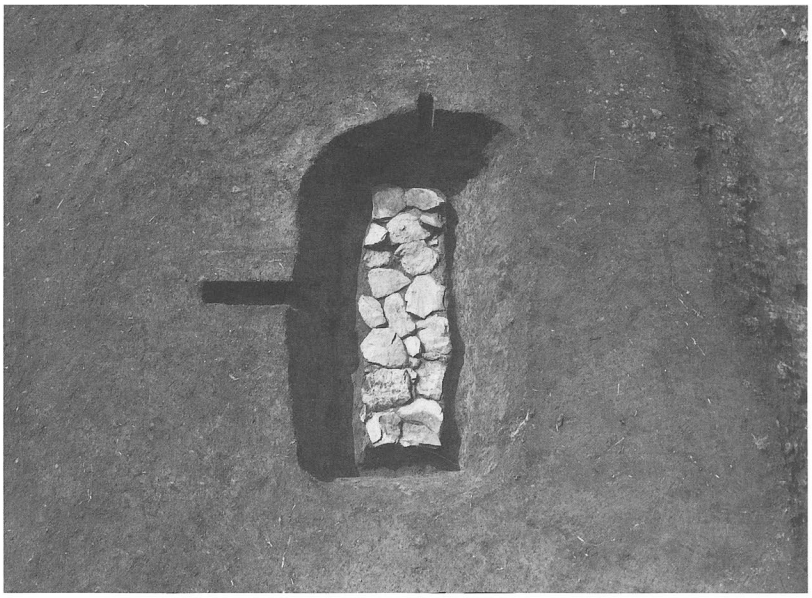
1 号墳主体部
石槨内堀り下げ
（北東より）

1 号墳主体部
粘土床断面
（北東より）

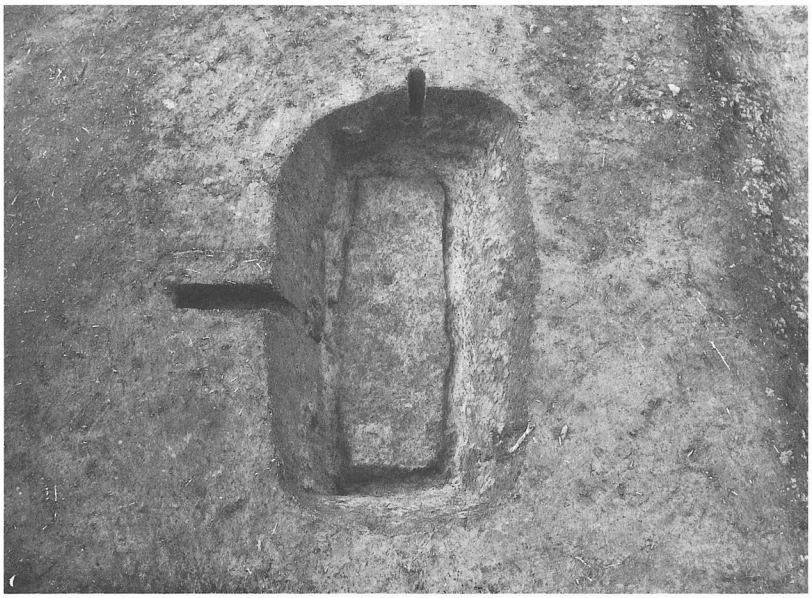


1 号墳主体部
粘土床検出状況
（北東より）

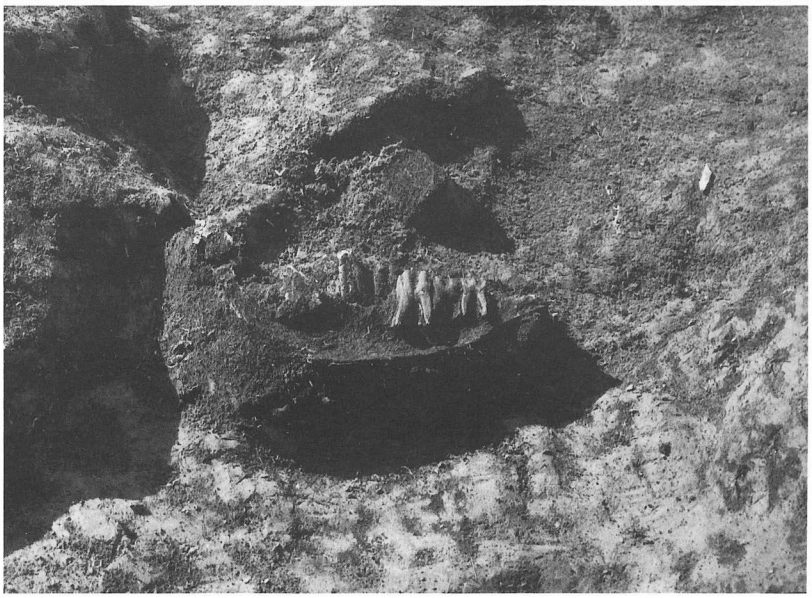
1 号墳主体部
敷石検出状況
（北東より）



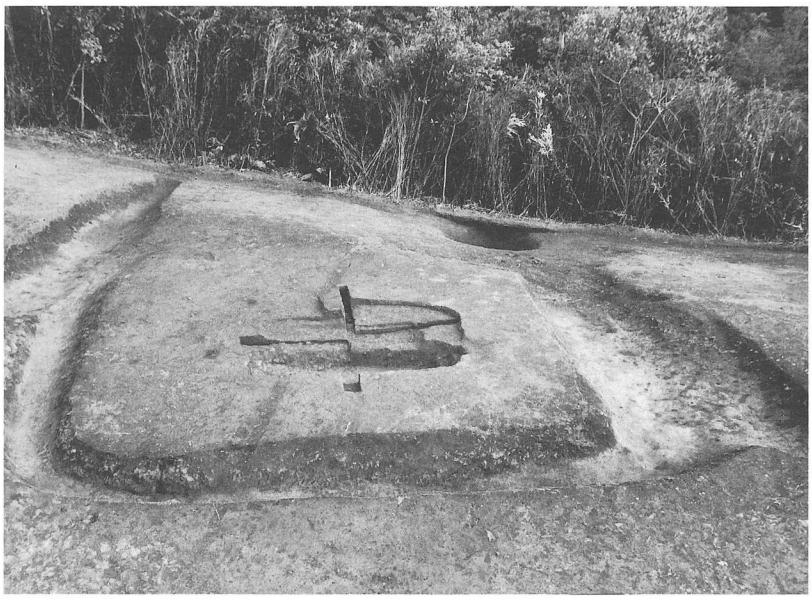
1 号墳主体部完堀
（北東より）



1 号墳周溝内
埋葬施設　（東より）

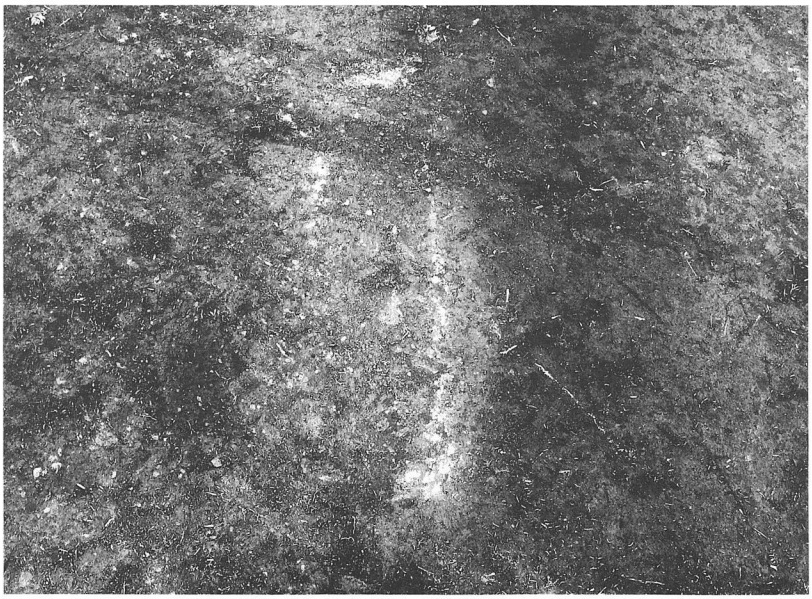


図版10



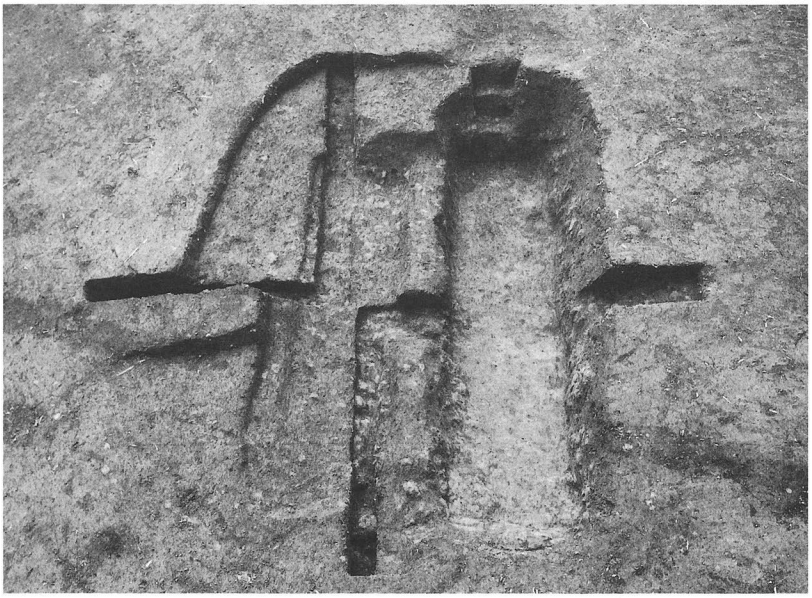
2号墳

（西より）



2号墳主体部
検出状況

（南より）



2号墳主体部完堀

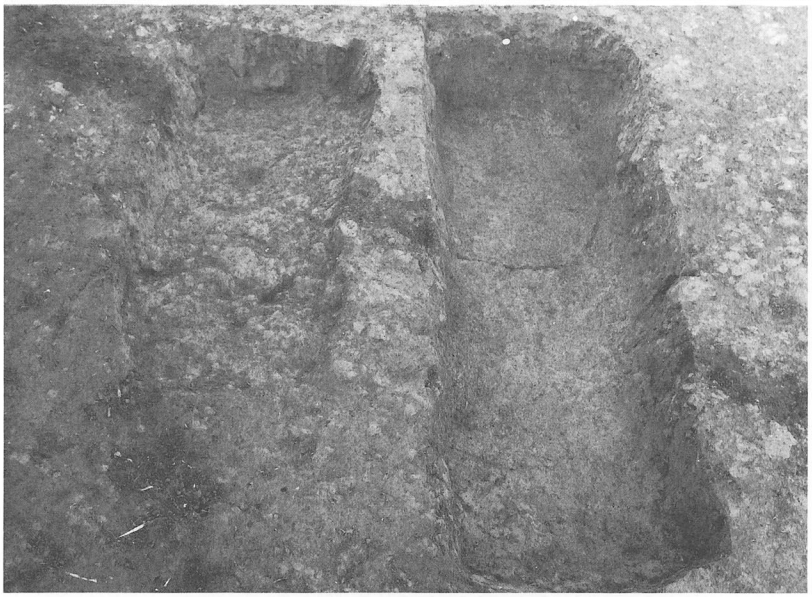
（北より）

3 号墳

（西より）

3 号墳主体部

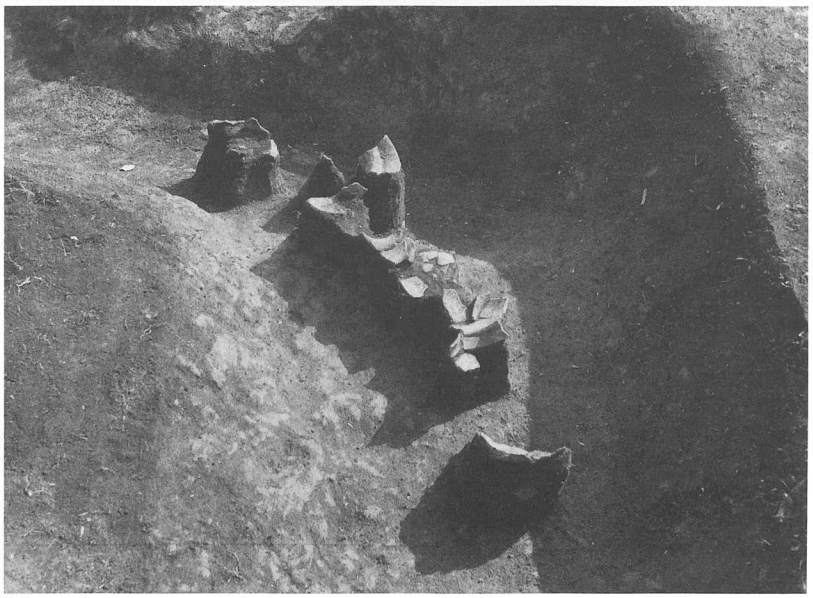
（東より）



3 号墳周溝内

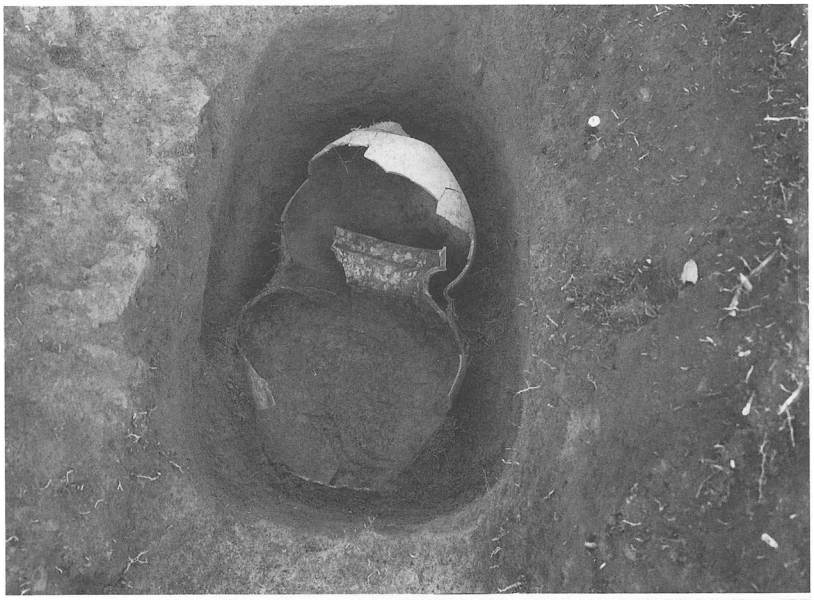
遺物出土状況

（北より）



図版12

3号墳周溝内
埋葬施設
土器棺出土状況
（北より）

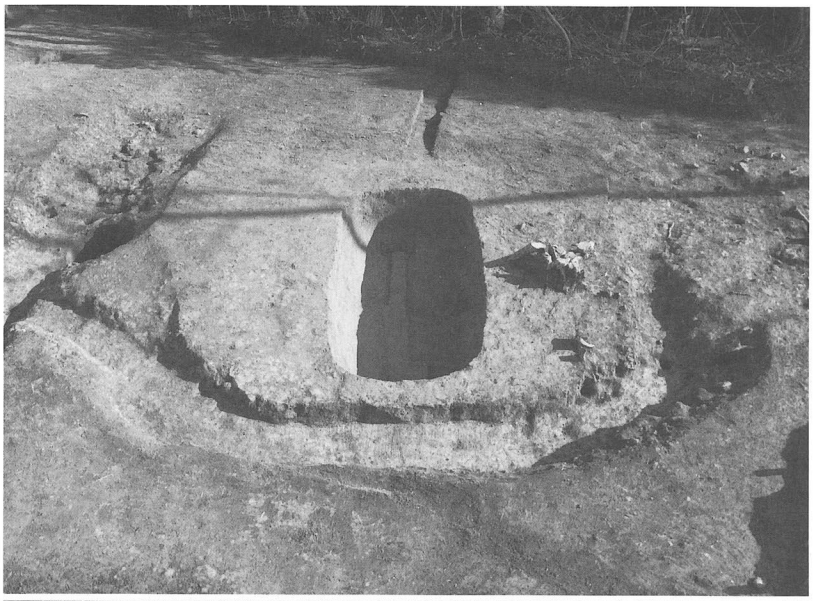


3号墳周溝内
埋葬施設
（北より）

3号墳周溝内
埋葬施設完堀
（北より）

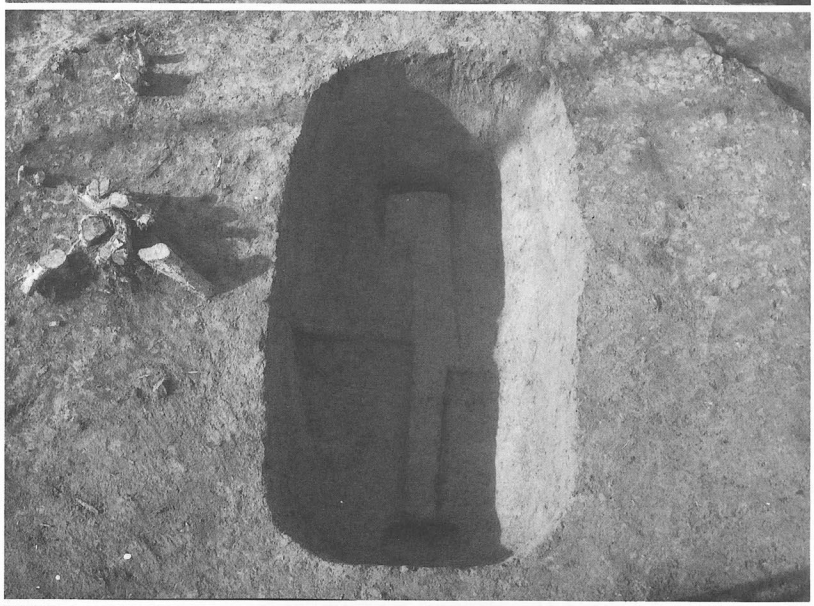
4 号墳

（西より）



4 号墳主体部

（東より）



5 号墳

（西より）

図版14

5号墳主体部

（東より）

◀1号土壙

（北東より）

▶2号土壙

（北より）

▼3号土壙

（東より）

ニタ子塚６号墳全景

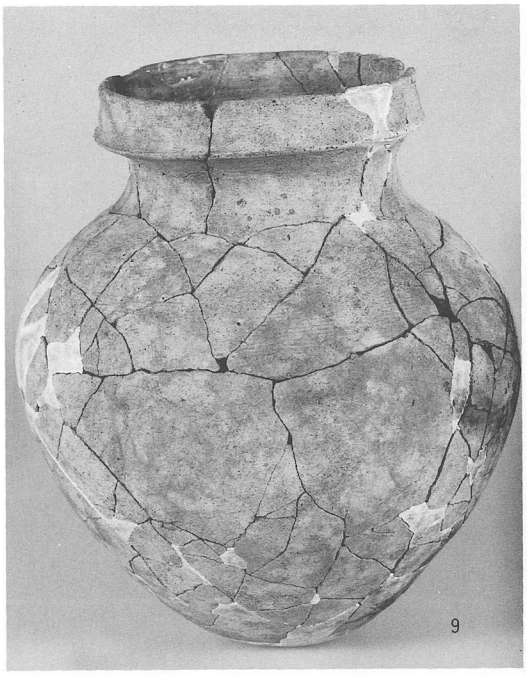
（南西より）

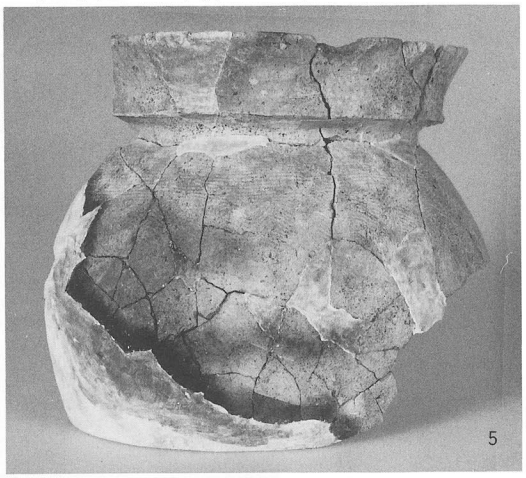
１号主体部

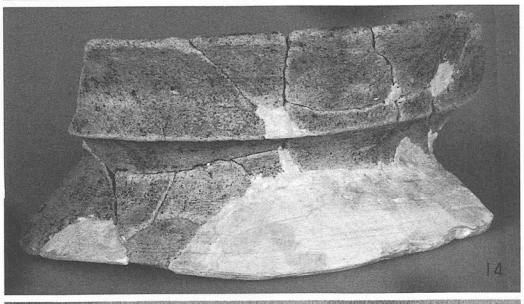
（南より）

２号主体部

（西より）

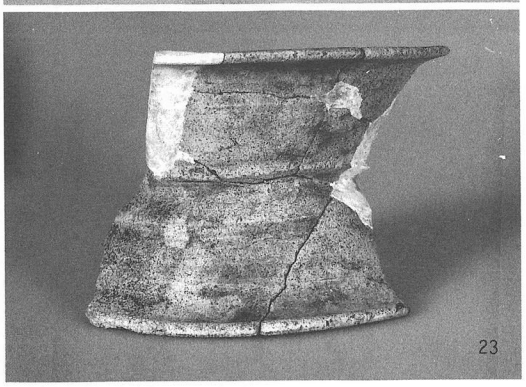

9


5


14

8

19

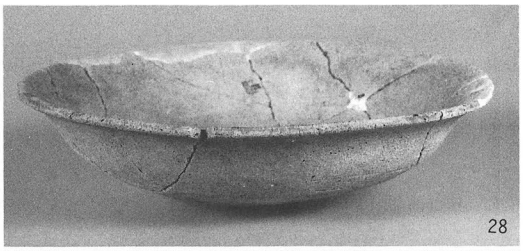

23

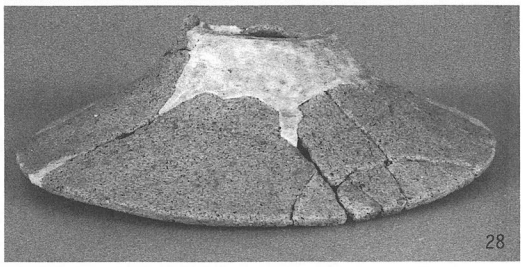
3

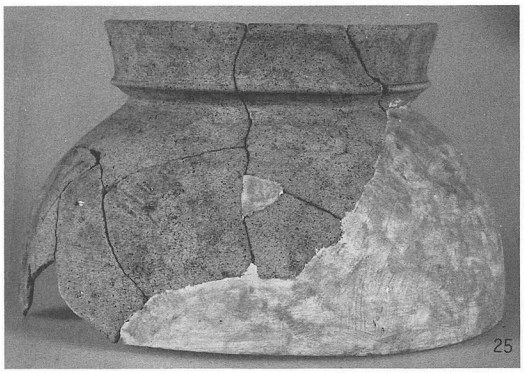
26

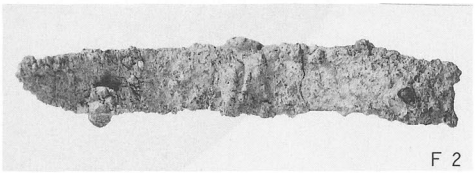
27

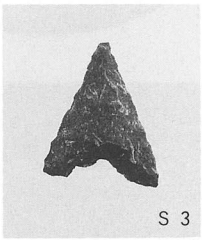
図版18　　3号墳出土遺物　鉄製刀子・鉄斧（1：2）・石鏃（1：1）・砥石・石鏃（1：2）

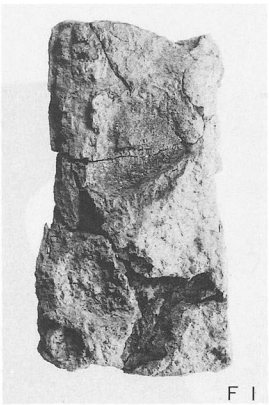


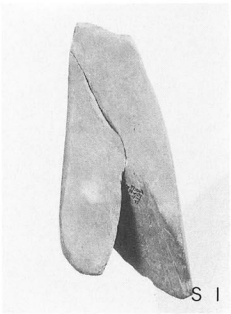


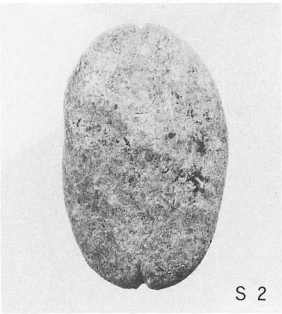


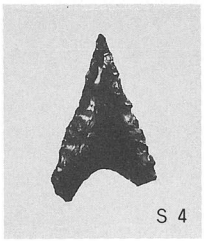


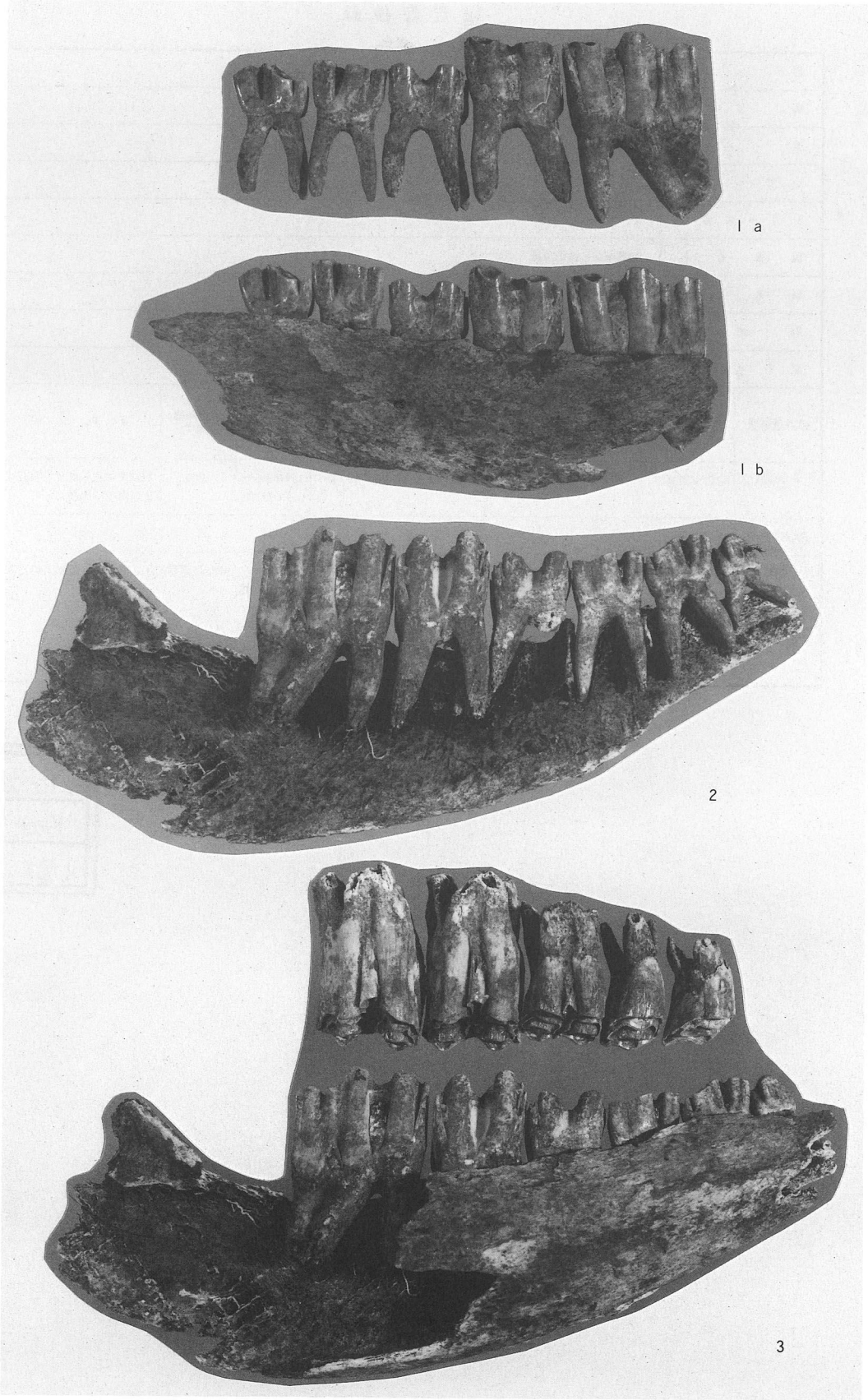












1．ウシ右下顎歯の舌側面（a）と右下顎歯に下顎骨を付着させたところ（b）
2．ウシ左下顎骨と左下顎歯の舌側面
3．ウシ左上・下顎歯と左下顎骨の舌側面

図書館　　郷土資料室

報告書抄録

書名	二ヌ子塚遺跡発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	倉吉市文化財調査報告書
シリーズ番号	第82集
編集者名	加藤誠司・高取英雄
編集機関	倉吉市教育委員会
取材地	〒682　鳥取県倉吉市葵町722番地　ＴＥＬ0858-22-8111
発行年月日	西暦1995年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード 市町村：遺跡記号	北緯	東経	調査期間	調査面積（m²）	調査原因
二ヌ子塚遺跡	倉吉市津原字フタゴ塚	31203：４ＤＴＦ	35°27′7″	133°45′18″	19940905～19941228	3200	国営ダム建設による採石事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
二ヌ子塚遺跡	墳墓・古墳	弥生 古墳	土壙墓　10基 溝　4条 古墳　5基 土壙　3基 （うち落し穴　1基）	弥生土器・土師器・鉄斧刀子・石鏃	弥生時代末期から古墳時代前期に連続する土壙墓群と古墳群竪穴式石槨を検出。

210.2
Kur
(82)

ニタ子塚遺跡発掘調査報告書

平成７年３月31日　印 刷
平成７年３月31日　発 行

編 集
発 行　倉吉市教育委員会

印 刷
製 本　勝美印刷株式会社